

Title	地域社会における多様性・寛容性向上のための介在者に必要な特性の提案： 日本人学生と留学生の交流における「スナックのママ型介在者」を例として
Sub Title	Proposal of necessary characteristics for a community connector to improve diversity and tolerance in local communities : the case of "a Japanese snack bar mom-type community connector" in an interaction between Japanese and international students
Author	鈴木, まどか(Suzuki, Madoka) 前野, 隆司(Maeno, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
Publication year	2023
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2023年度システムデザイン・マネジメント学 第553号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40002001-00002023-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文

2023 年度

地域社会における多様性・寛容性向上のための
介在者に必要な特性の提案
：日本人学生と留学生の交流における
「スナックのママ型介在者」を例として

鈴木 まどか
(学籍番号：82233267)

指導教員 教授 前野 隆司

2024 年 3 月

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
システムデザイン・マネジメント専攻

論文要旨

学籍番号	82233267	氏 名	鈴木 まどか
論 文 題 目： 地域社会における多様性・寛容性向上のための介在者に必要な特性の提案 ：日本人学生と留学生の交流における「スナックのママ型介在者」を例として 近年、ダイバーシティ・インクルージョンを目指す動きが注目されているが、日本における地域社会の不寛容さは依然として存在している。さらに、地域コミュニティや家族コミュニティが時代の変化とともに衰退したために、孤独を抱える人が多く存在していることから、地域コミュニティの新たな形として、地域の居場所を提供することが総務省や厚生労働省から示されている。 本研究の目的は、地域コミュニティの地域の居場所における介在者の特徴に注目し、それらの特徴を明らかにすることと地域の寛容性や幸福度の向上との関係性を明らかにすることである。本研究では、地域の居場所において必要な介在者の姿としてスナックのママのように分け隔てなく交流の場にいる人の中に入る人と捉え「スナックのママ型介在者」とし、さらにその特徴を「ママ特性」と定義した。 仮説としては、3段階に分けママ特性がコミュニティ内の共感やコミュニケーションの発展につながり、共感やコミュニケーションが発展することで多様性や寛容性の向上が起こり、多様性や寛容性の向上が幸福度の向上につながり、結果的にスナックのママ型介在者が存在する地域コミュニティの地域の居場所では幸福度が上がるか検証する。本研究におけるコミュニティの対象は日本人学生と留学生の交流の場とした。データの収集については、実際に同じ大学や大学院に属する日本人学生と留学生と介在者で2時間交流を行う実験を行い内容の録音と、事前事後にアンケートを行いインタビューも実施した。比較実験として、日本人同士でも同様に2時間交流し、事前事後のアンケートとインタビューを実施した。 その結果、ママ特性は8つにカテゴリー分けされ、「笑顔」「口調」「ユーモア」「話しかけやすさ」「つながる」「飾らない」「安心感」「聞き上手」と抽出された。それぞれの具体的行動から各ママ特性の平均得点を算出し、共感とコミュニケーションの発展には「聞き上手」がどちらにも強い正の相関を示し、大きく寄与していることが分かった。さらに「話しかけやすさ」も正の相関を示し、共感とコミュニケーションの発展に寄与していた。「口調」と「つながる」は、コミュニケーションにのみ正の相関を示した。共感とコミュニケーションはそれぞれ多様性・寛容性と強い正の相関を示し、共感とコミュニケーションの発展が多様性・寛容性に寄与することが立証された。さらに、多様性・寛容性と感情的幸福度と幸せの4因子のどちらにも相関が見られ、多様性・寛容性が向上することで幸福度も向上することが判明した。事前事後での幸せの4因子に有意差が見られたことから、仮説が検証された。ママ特性は暫定的なものではあるが、地域の居場所を増やしていくにあたり、介在者として必要な人材像をわかりやすく捉えることができ、さらにそれらが不寛容さの軽減やウェルビーイングの向上に寄与したことが明らかになったことで、実装に対する実態像を与えるものとなった。			
キーワード (5 語) 地域コミュニティ, 地域の居場所, 介在者, 寛容性, ウェルビーイング			

SUMMARY OF MASTER’S DISSERTATION

Student Identification Number	82233267	Name	Madoka Suzuki
Title: Proposal of Necessary Characteristics for a Community Connector to Improve Diversity and Tolerance in Local Communities : The Case of “a Japanese Snack Bar Mom-type Community Connector” in an Interaction between Japanese and International Students			
Abstract: In recent years, there has been a focus on the movement toward diversity and inclusion, but the intolerance of local communities in Japan still exists. Furthermore, as local communities and family communities have declined with the changing times, many people suffer from loneliness, and the Ministry of Internal Affairs and Communications and the Ministry of Health, Labour and Welfare have indicated that a new form of local community is to provide a place to stay in the community. The purpose of this study is to focus on the characteristics of a community connector in the local community's local places of residence and to clarify the relationship between these characteristics and the improvement of community tolerance and well-being. In this study, we defined the "snack bar mom-type community connector" as a person who is a necessary community connector in a local community, and further defined the characteristics of a "mom characteristic" as a person who comes between people in a place of interaction without dividing them, like a Japanese snack bar mom. The hypothesis is that the “mom characteristics”, divided into three stages, lead to the development of empathy and communication within the community, and that the development of empathy and communication leads to increased diversity and tolerance, and that increased diversity and tolerance leads to increased happiness, resulting in a community where the snack mom-type interveners exist. We will examine whether the level of happiness increases in the community's local places of residence. The target communities in this study were places where Japanese and international students interacted. To collect data, we conducted an experiment in which Japanese and international students who belong to the same university or graduate school interacted for two hours with a community connector, and recorded the content of the interaction. As a comparison experiment, Japanese students also interacted with each other for 2 hours, and a questionnaire and interview were conducted before and after the interaction. As a result, “the characteristics of the mom” were divided into eight categories: "smile," "tone of voice," "humor," "talkativeness," "connectiveness," "unpretentiousness," "reassurance," and "good listener. The average score for each mom characteristic was calculated from each specific behavior, and it was found that "good listening" contributed significantly to the development of empathy and communication, showing a strong positive correlation with both. In addition, "talkativeness" also showed a positive correlation, contributing to the development of empathy and communication. Tone" and "connect" were positively correlated only with communication. Empathy and communication showed strong positive correlations with diversity and tolerance, respectively, proving that the development of empathy and communication contributes to diversity and tolerance. Furthermore, diversity and tolerance were correlated with both emotional well-being and the four happiness factors, indicating that increased diversity and tolerance also increase well-being. The hypothesis was tested as there were significant differences in the four factors of happiness in the pre- and post-periods. Although the mom characteristics are tentative, they provide a clear picture of the human resources needed as community connector in increasing the number of places in the community, and furthermore, the findings that these contributed to reducing intolerance and improving wellbeing provide a picture of the actual situation with respect to implementation.			
Keywords (5 words) Local community, Local Place, Interventionist, Tolerance, Wellbeing			

目次

第1章 諸言	1
1.1 研究の背景	1
1.1.1 地域の不寛容・排他的さに関する研究	4
1.1.2 地域のつながり・居場所に関する研究	6
1.2 研究の目的	15
1.3 用語の定義	16
第2章 先行研究	17
2.1 介在者に関する研究	17
2.1.1 ファシリテーターに関する研究	17
2.1.2 コーディネーターに関する研究	18
2.1.3 コミュニティマネージャーやコミュニティデザイナーに関する研究	19
2.1.4 コンサルタントに関する研究	20
2.2 地域の寛容性やつながりと幸福度の研究	20
第3章 地域の居場所における介在者像の提案	21
3.1 介在者像の抽出	21
3.1.1 スナックのママに関する研究	22
3.2 像の特徴を抽出	23
3.3 特徴と多様性・寛容性、幸福度に関する仮説	27
第4章 検証	29
4.1 検証手順	29
4.1.1 検証方法	29
4.1.2 調査対象者	30
4.2 ママ特性とコミュニケーション・共感に関する結果と考察	31
4.3 共感・コミュニケーションと多様性・寛容性及び幸福度	42
4.3.1 共感・コミュニケーションと多様性・寛容性の結果と考察	42

4.3.2 多様性・寛容性と幸福度の結果と考察	53
4.4 全体の考察	71
4.4.1 仮説の検証	71
4.4.2 介在者ごとの結果と考察	72
4.4.3 介在者への影響	82
第5章 結語	86
5.1 結論	86
5.2 今後の展望	86
参考文献	87
謝辞	91

図目次

図 1-1 全 47 都道府県幸福度ランキング 2022 年度版（データ出典[17]）	3
図 1-2 令和 5 年度全国 Well-Being 調査（データ出典[18]）	3
図 1-3 寛容性総合指標×U ターン意向（データ出典[20]）	5
図 1-4 寛容性総合指標×離脱意向（データ出典[20]）	6
図 1-5 地域の人々との付き合いが疎遠な理由（複数回答）（データ出典[21]）	7
図 1-6 ワンルーム共同住宅居住者の地域の人々との付き合い（データ出典[21]） ..	7
図 1-7 町内会に参加しない理由（データ出典[22]）	8
図 1-8 「隣近所の人とのつきあい」として望ましいもの（データ出典[24]）	8
図 1-9 50 歳時未婚率と単身世帯率（データ出典[23]）	9
図 1-10 分野横断的な対応が求められる課題・制度の狭間にある課題（データ出典[24]）	10
図 1-11 ポストコロナの令和時代に求められる新たな「つながり・支え合い」（データ 出典[24]）	10
図 1-12 地域の居場所づくりの活性化のイメージ（データ出典[22]）	11
図 1-13 オンライン接触の欠点（データ出典[23]）	11
図 1-14 地域の居場所の例①（データ出典[22]）	12
図 1-15 地域の居場所の例②（データ出典[24]）	13
図 1-16 ソーシャルハウス宝島の様子①（筆者撮影）	14
図 1-17 ソーシャルハウス宝島の様子②（筆者撮影）	14
図 2-1 地域コーディネーターが果たす役割（データ出典[34]）	19
図 3-1 介在者の分類（筆者作成）	21
図 3-2 スナックのママのように介在の上手な人の特徴（筆者ら作成）	24
図 3-3 ユーモアのカテゴリー分類（データ出典[55]）	25
図 3-4 仮説図式（筆者作成）	28
図 4-1 実験概要図	29
図 4-2 介在者の行動の傾向	32
図 4-3 笑顔とコミュニケーションの散布図	33
図 4-4 笑顔と共感の散布図	33

図 4-5	口調とコミュニケーションの散布図.....	34
図 4-6	口調と共感の散布図.....	34
図 4-7	ユーモアとコミュニケーションの散布図.....	35
図 4-8	ユーモアと共感の散布図.....	35
図 4-9	話しかけやすさとコミュニケーションの散布図.....	36
図 4-10	話しかけやすさと共感の散布図.....	36
図 4-11	つなげるとコミュニケーションの散布図.....	37
図 4-12	つなげると共感の散布図.....	37
図 4-13	安心感とコミュニケーションの散布図.....	38
図 4-14	安心感と共感の散布図.....	38
図 4-15	聞き上手とコミュニケーションの散布図.....	39
図 4-16	聞き上手と共感の散布図.....	39
図 4-17	各ママ特性の分布（2 軸図）.....	40
図 4-18	共感と多様性・寛容性の散布図.....	43
図 4-19	コミュニケーションと多様性・寛容性の散布図.....	43
図 4-20	項目別多様性・寛容性の実験前後比較（全体）.....	44
図 4-21	項目別多様性・寛容性の実験前後比較（日本人学生のみ）.....	45
図 4-22	項目別多様性・寛容性の実験前後比較（留学生のみ）.....	45
図 4-23	共感と多様性・寛容性の散布図（日本人同士の交流において）.....	50
図 4-24	コミュニケーションと多様性・寛容性の散布図（日本人同士の交流において）	50
図 4-25	項目別多様性・寛容性の実験前後比較（日本人同士の交流において）....	51
図 4-26	多様性・寛容性とポジティブ感情の散布図.....	54
図 4-27	多様性・寛容性とネガティブ感情の散布図.....	55
図 4-28	多様性・寛容性と 4 因子の散布図.....	55
図 4-29	多様性・寛容性とありがとう因子の散布図.....	56
図 4-30	多様性・寛容性となんとかなる因子の散布図.....	56
図 4-31	多様性・寛容性とありのままに因子の散布図.....	57
図 4-32	多様性・寛容性とポジティブ感情の散布図（日本人同士の交流において）	58

図 4-33 多様性・寛容性とネガティブ感情の散布図（日本人同士の交流において）	58
図 4-34 多様性・寛容性と幸せの4因子の散布図（日本人同士の交流において）	59
図 4-35 多様性・寛容性とありがとう因子の散布図（日本人同士の交流において）	59
図 4-36 多様性・寛容性となんとかなる因子の散布図（日本人同士の交流において）	60
図 4-37 幸福度の前後変化（全体）	62
図 4-38 幸せの4因子別の前後変化（全体）	62
図 4-39 幸福度の前後変化（日本人学生のみ）	66
図 4-40 幸せの4因子別の前後変化（日本人学生のみ）	66
図 4-41 幸福度の前後変化（留学生のみ）	68
図 4-42 幸せの4因子別の前後変化（留学生のみ）	69
図 4-43 幸福度の前後変化（日本人同士の交流において）	70
図 4-44 幸せの4因子別の前後変化（日本人同士の交流において）	70
図 4-45 Iさんのママ特性レーダーチャート図	73
図 4-46 Mさんのママ特性レーダーチャート図	73
図 4-47 Bさんのママ特性レーダーチャート図	74
図 4-48 Hさんのママ特性レーダーチャート図	74
図 4-49 Uさんのママ特性レーダーチャート図	75
図 4-50 Sさんのママ特性レーダーチャート図	75
図 4-51 介在者別 被介在者のコミュニケーション・共感平均得点	76
図 4-52 介在者別 被介在者の多様性・寛容性実験前後変化	76
図 4-53 介在者別 ポジティブ感情実験前後変化	77
図 4-54 介在者別 ネガティブ感情の実験前後変化	78
図 4-55 介在者別 幸せの4因子実験前後変化	78
図 4-56 介在者別 やってみよう因子の実験前後変化	79
図 4-57 介在者別 ありがとう因子の実験前後変化	79
図 4-58 介在者別 なんとかなる因子の前後変化	80
図 4-59 介在者別 ありのままに因子の前後変化	80

図 4-60 介在者自身の幸福度実験前後変化	83
------------------------------	----

表目次

表 3-1 ママ特性の具体的行動や特徴（筆者ら作成）	26
表 4-1 各ママ特性とコミュニケーション・共感の相関係数表.....	32
表 4-2 共感・コミュニケーションと多様性・寛容性の相関係数表.....	42
表 4-3 t 検定の結果（全体）	46
表 4-4 t 検定の結果（日本人学生・留学生各結果）	46
表 4-5 t 検定の結果（全体）	47
表 4-6 t 検定の結果（日本人学生・留学生各結果）	48
表 4-7 t 検定結果（留学生のみ）	49
表 4-8 t 検定の結果	51
表 4-9 多様性・寛容性と幸福度の相関係数表	54
表 4-10 多様性・寛容性と幸福度の相関係数表（日本人同士の交流において）	57
表 4-11 ポジティブ感情の t 検定結果.....	63
表 4-12 ネガティブ感情の t 検定結果.....	63
表 4-13 幸せの 4 因子の t 検定結果.....	64
表 4-14 幸せの 4 因子別の t 検定結果	65
表 4-15 幸せの 4 因子の t 検定結果（日本人学生のみ）	67
表 4-16 ありがとう因子の t 検定結果（日本人学生のみ）	67
表 4-17 なんとかなる因子の t 検定結果（日本人学生のみ）	68
表 4-18 ポジティブ感情の t 検定結果（留学生のみ）	69
表 4-19 S さんのポジティブ感情の t 検定結果	77
表 4-20 ママ特性の再分類案	81
表 4-21 ポジティブ感情の t 検定結果.....	83
表 4-22 ネガティブ感情の t 検定結果.....	84
表 4-23 幸せの 4 因子の t 検定結果.....	84

第1章 諸言

1.1 研究の背景

近年、日本を含む世界各国で「ダイバーシティ&インクルージョン」という言葉がよく聞かれるようになった。「ダイバーシティ&インクルージョン」とは、年齢や性別、国籍、学歴、特性、趣味嗜好、宗教などにとらわれない多種多様な人材が、お互いに認め合い、自らの能力を最大限発揮し活躍できることとされている[1]。主に組織作りにおける文脈で使用されることが多く、各企業で取り組みを公表し多様な人材を活用し組織を活性化することで経営上の成果につなげようとしている。日本政府も2021年の経済財政運営と改革の基本方針（骨太の方針）[2]では「誰一人として取り残されない包括的な社会を目指す」としている。取り組みの一環として、経済産業省では「ダイバーシティ経営」を推進している[3]。ダイバーシティ経営とは、「多様な人材を生かし、その能力を最大限発揮できる機会を提供することで、イノベーションを生み出し、価値創造につなげている経営」と定義している。

「イノベーションを生み出し、価値創造につなげている経営」とは、組織内の個々の人材がその特性を活かし、生き生きと働くことのできる環境を整えることによって、自由な発想が生まれ、生産性を向上し、自社の競争力強化につながるといった一連の流れを生み出しうる経営のこととしている。また、多くの企業が国際基準であるISO26000「社会的責任の手引き」[4]に基づき、ダイバーシティ・マネジメント（多様性施策）への取り組み[5]を幅広く実施している。ダイバーシティ・マネジメントとはこれまでの慣習にとらわれずに、ジェンダー、国籍、年齢などの多様な属性や価値観を活用してビジネス環境の変化に迅速かつ柔軟に対応し、企業の競争力と社会的評価を高め、また個人の幸せを実現しようとするマネジメント・アプローチである[6][7]。このように多様な人材が活躍することでVUCA時代にも適応できるのではないかとされている。そして「ダイバーシティ&インクルージョン」に関しては、労働環境においてだけでなく、地域社会においても適用される。豊島区では様々な住民が互いに快適に住めるダイバーシティ世界を目指し、誰もが入ってくることができる緩やかな距離感が重要であり、その緩やかさがあってはじめて「多様な人が存在できる」と

萩原は述べている[8].

しかし、日本では「郷に入っては郷に従え」という言葉にあるように、自分の文化に適応することを望ましいとする考え方があり、一般的に自分の文化と異なるものを「よそ者」として排除する傾向にある。別の表現で「島国の日本は単一民族である」という考えもあり、岡本（2010）[9]は、単一民族観が常識となった結果「日本社会に内在する多様な個性を否定し、異質なものを排除する性向を列島社会に蔓延させ」（p.75）たとしている。また、国広（2004）[10]も、単一民族観にもとづくナショナルアイデンティティーによって「日本人意識」が自明視され、結果として“日本人”ではない「他者」に対する差別的な反応につながると論じている。社会心理学的学説（e.g., Sidanius & Pratto, 1999）もこうした議論を裏付けて、単一民族観のような社会で幅広く共有されている言説は、人種主義や差別的行為を正当化する役割を果たしうると指摘している[11].

ここで、近年の風潮と昔からの日本人の根源にある性格が相反しているように感じられる。そのことを一因としてか歪みが生じており、実際には日本において外国人に対する差別が、就職や住居などの分野で問題になっている[12]など、目指す姿と現実が合っていないことが問題として挙げられる。偏見や排外意識については、アメリカの社会心理学などの分野を中心として様々な研究が行われてきた。その中でも異なる人種や民族集団など外集団との接触経験を通して、個人の外集団に対する偏見や排外意識が低減されるとする「接触仮説」が長年提唱されてきた[13][14]。最近の日本社会における接触仮説の実証的研究においても、「接触仮説」の一定条件を満たした接触と偏見・排外意識の関連は、日本社会においても同様に存在し、そのような外国人との接触が彼ら/彼女らへの偏見・排外意識を低減させる可能性が高いことが明らかにされてきている[15][16]しかしながら、地方都市においては接触する機会が少なく、なかなか偏見・排外意識の低減ができていないことが課題となっている。

筆者が勤務している富山県を例に挙げると、富山県は全国幸福度ランキング（[17]）で全国4位と高順位である。しかし、一般社団法人スマートシティ・インスティテュートジャパンの調査（[18]）によると、客観的データと主観的データに大きな差があることが分かる。これは富山県に限ったものではなく、多くの都道府県でも見られる。また、この結果から地域とのつながりの値は高いものの、多様性・寛容性の値が低いことが確認できる。この結果から、地域のつながりが強すぎるが故に、単一性が進み、多様性・寛容性が少ないことが示唆される。主観的アンケートの多様性・寛容性の項目（表 1-1）の中に、「見知らぬ他者で

も信頼する」とあるが、外国人を含む他者を容易に受け入れるという行動は一般的に見られず筆者の周りの留学生も地域とのつながりを持ってない現状がある。

幸福度ランキング【2022年】

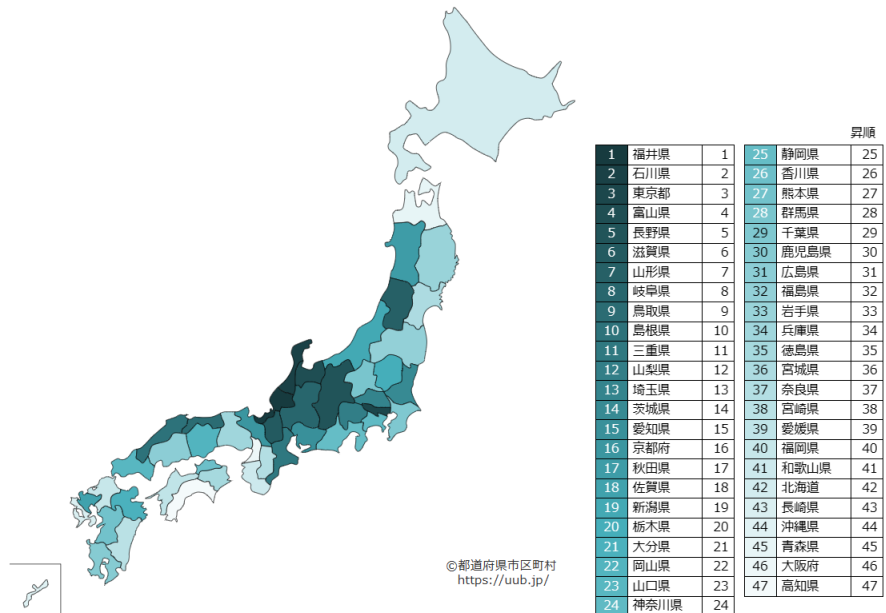


図 1-1 全 47 都道府県幸福度ランキング 2022 年度版（データ出典[17]）

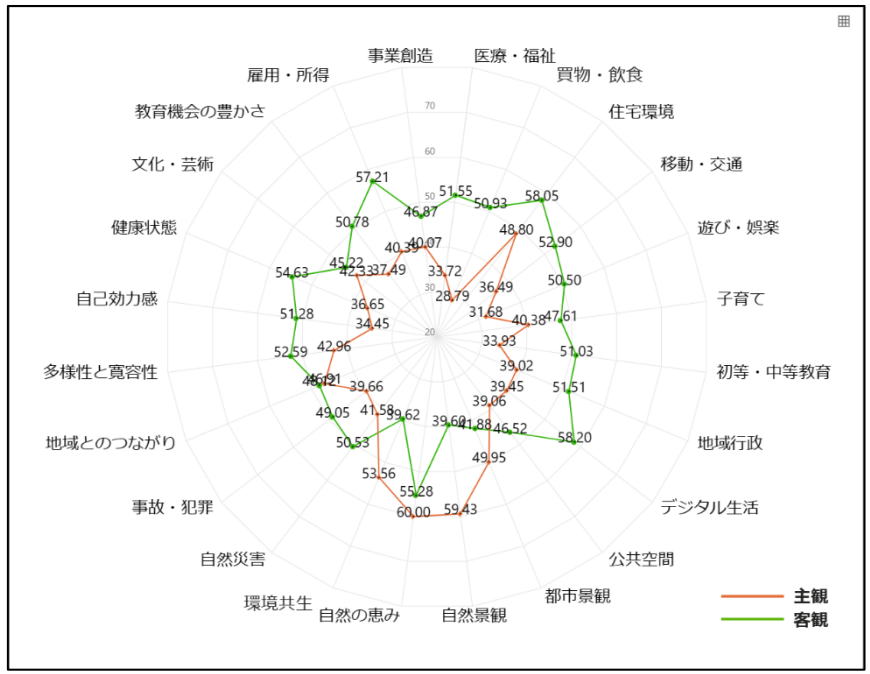


図 1-2 令和 5 年度全国 Well-Being 調査（データ出典[18]）

表 1-1 令和 5 年度版全国 Well-being 調査における客観的指標と主観的アンケート項目一部抜粋（筆者作成）

介入ポイント	客観的指標(KPI)	主観的アンケート項目
多様性と寛容性	管理職職員における女性の割合(官民問わず) 女性の労働力人口比率 家事の男女負担割合 男女の賃金格差 障害者雇用率 人口あたり外国人人口 留学生数 多様性指数 (施策等の有無を1か0で表した下記KPIの合計) パートナーシップ宣誓制度の有無 性の多様性に関する条例の有無 障害差別解消に関する条例の有無 子どもに関する条例の有無 バリアフリー基本構想の有無 男女共同参画条例・ジェンダー平等条例の有無	・この町内(集落)には、どんな人の意見でも受け入れる雰囲気がある ・私は、見知らぬ他者であっても信頼する ・私は、町内(集落)の人が自分をどう思っているかが気になる ・私の暮らしている地域には、女性が活躍しやすい雰囲気がある ・私の暮らしている地域には、若者が活躍しやすい雰囲気がある
地域とのつながり	孤独を感じている人 ・人口当たり自殺者数 ・高齢単身世帯の割合 交流する機会 ・人口あたりNPO数 ・ボランティア行動者数 ・祭りの数 ・関係人口創出活動指数	・私は、同じ町内(集落)に住む人たちを信頼している 私の暮らしている地域では、地域活動(自治会・地域行事・防災活動等)への市民参加が盛んである 暮らしている地域には、困ったときに相談できる人が身近にいる 私は、町内(集落)の人が困っていたら手助けをする 私は、この町内(集落)に対して愛着を持っている

1.1.1 地域の不寛容・排他的さに関する研究

地方都市における偏見・排外意識について、安達（2008）[19]は、地方都市における日本人の異文化受容態度について年代別・国別態度調査を行い、年代別ごとの特徴として老年層では受容態度が比較的低い傾向にあるとした。原因について、地理的または歴史的特性から同質性が比較的高かった日本では、外国人と接触する機会が少なく社会的受け入れ態勢が十分に育まれてこなかった土壤があるのではないかとしている。2021 年の LIFULL 総研の調査結果[20]では、寛容性の高さを都道府県別にしたところ 1 位が東京都となり神奈川県、千葉県、埼玉県もトップ 5 に入っている。大阪府も 3 位となり、人口 100 万人以上を有する大都市圏での寛容性の高さが顕著に表れた。宮城県以外の東北地方や、沖縄県、福岡県以外の九州地方の都道府県は低調であり、北陸地方も 40 位前後にとどまる結果となった。同調査における寛容性は「凝集性」と「開放性」によって説明され、凝集性とは、「人間関係が濃密でつながりが強い」ことや「歴史や伝統が大切に守られている」ことを示し、開放性とは「よそから移り住んでくる人を温かく迎え入れる」ことや「学問や教養を高めることに熱心である」ことであるとしている。調査結果より寛容性が高い都道府県ほど開放性が高い

傾向にあり、寛容性が低い都道府県では凝集性が高いことが分かっている。これらから大都市圏に比べ地方都市のほうが寛容性が低いことがうかがえる。また、同調査によると地域の寛容性とUターン傾向には相関関係があると示唆され、地域の寛容性が高いほどUターン意向も高まるとした（図 1-3）さらに、離脱傾向との相関関係では緩い逆相関が見られたため地域の寛容性が高いほど、離脱傾向が弱まるとわかった（図 1-4）。調査結果より、地域の寛容性が地域への愛着を高めていることが示唆された。

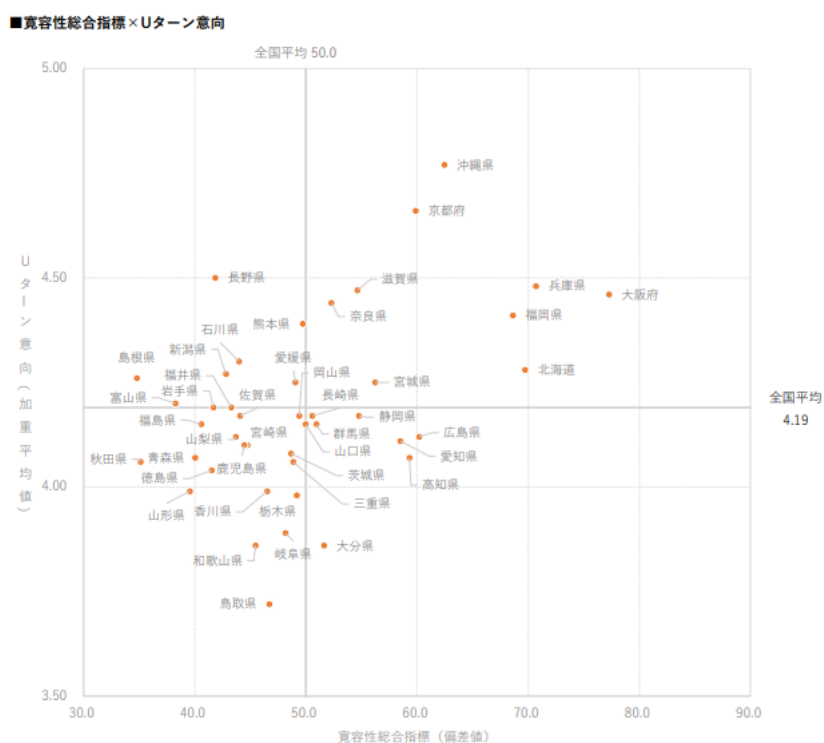


図 1-3 寛容性総合指標×Uターン意向（データ出典[20]）

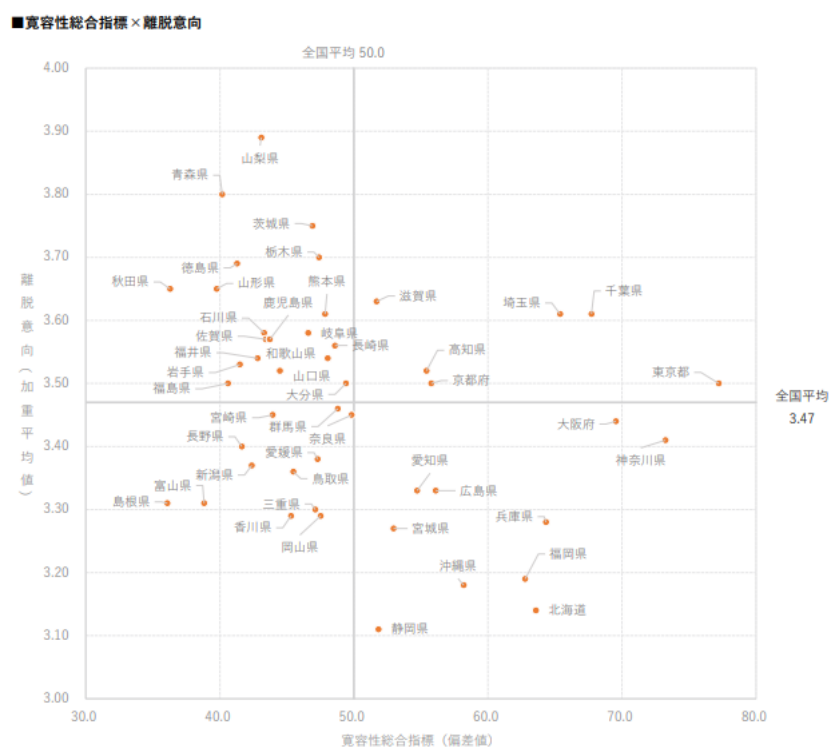


図 1-4 寛容性総合指標×離脱意向（データ出典[20]）

1.1.2 地域のつながり・居場所に関する研究

では、「よそ者」ではなく地域に根付いている人同士の地域内での関係は強いのだろうか。かつての日本では、家族だけでなく地域の住民らで子育てをするような場面も多く見られ、地域内の関係が強く相互に助け合う姿があったが、現在では地域コミュニティの希薄化が問題視されており政府として各省庁から地域コミュニティに対する提言が示されている。国土交通省の平成 18 年の白書[21]や、総務省の地域コミュニティに関する研究会が発表した資料[22]によると、都市部では一般にコミュニティ意識が希薄であり、地縁による共助の担い手は乏しく、地方部では、一般にコミュニティ意識は高く、地縁による共助の支え合い体制の基盤が存在する地域が多いものの、取り組みの担い手の減少により、共助の支え合い体制の基盤が弱体化しつつある。また、ライフスタイルの変化により単独世帯の増加や女性や高齢者の就業率の上昇から地域コミュニティに関わる機会や時間が減少していることや、コミュニティ活動のきっかけとなる子どもの減少が地域コミュニティの衰退に寄与していることが以下の図（図 1-5、図 1-6、図 1-7）に示される。

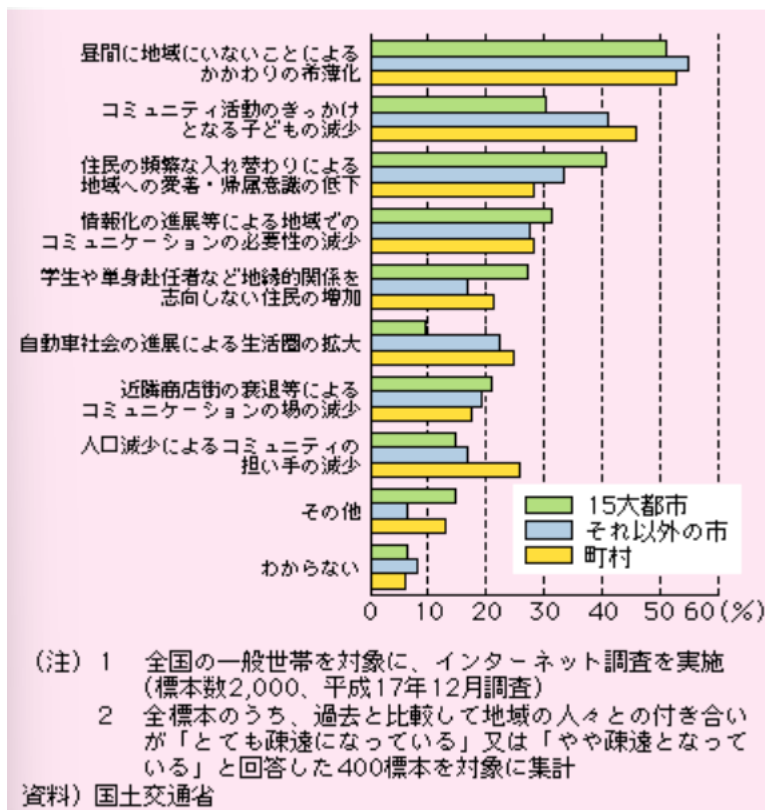


図 1-5 地域の人々との付き合いが疎遠な理由（複数回答）（データ出典[21]）

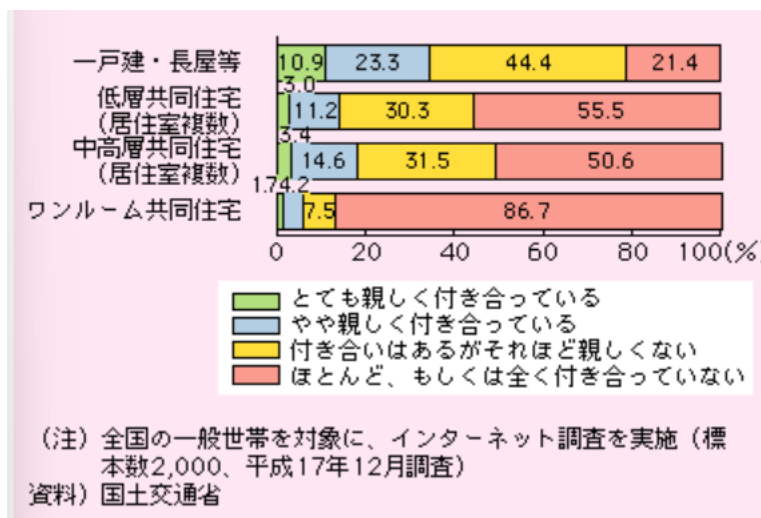


図 1-6 ワンルーム共同住宅居住者の地域の人々との付き合い（データ出典[21]）

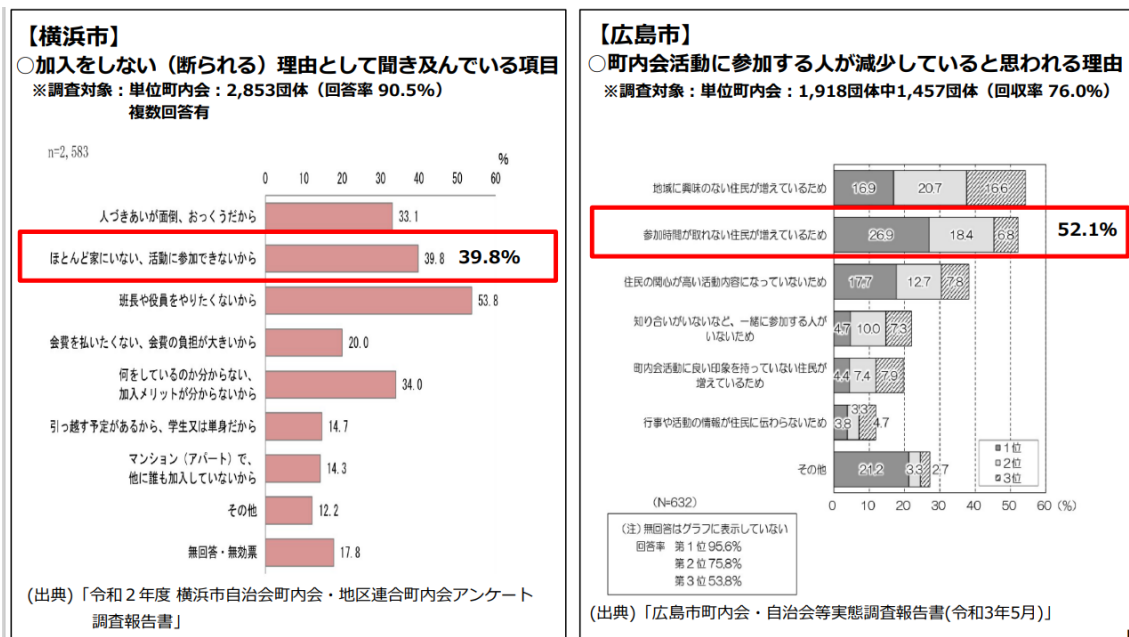


図 1-7 町内会に参加しない理由（データ出典[22]）

また、NHK 放送文化研究所による調査では日本人の意識調査として、「隣近所の人との付き合い」として望ましいものを 1973 年から 5 年ごとに調査した結果（図 1-8）に示す。この図から、なにかにつけて相談したり助け合ったりするような「全面的な付き合い」を求める傾向が大きく減少し、会ったときに挨拶する程度の「形式的な付き合い」を求める傾向が大きく増加し 1973 年と 2018 年では望ましいとされる近所との付き合い方が逆転していることがわかった。この結果から地域コミュニティに対し、時間がないことだけでなく、人間関係の希薄化も地域コミュニティへの参加を妨げる要因になっていると考えられる。

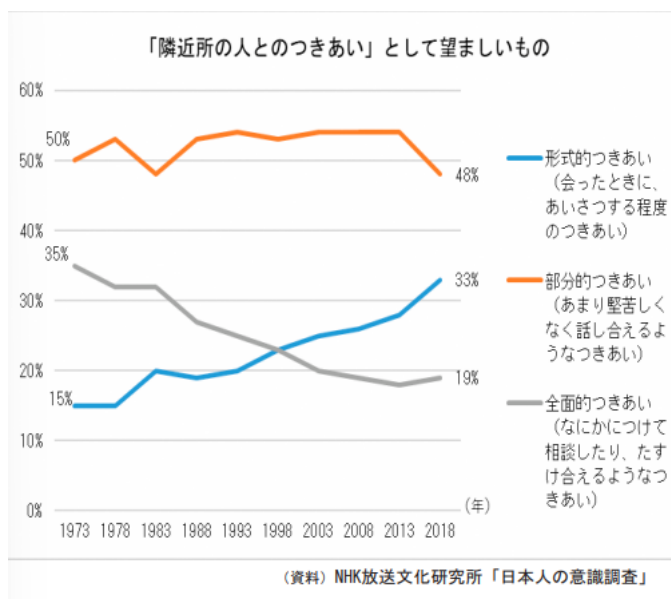


図 1-8 「隣近所の人とのつきあい」として望ましいもの（データ出典[24]）

さらに、人間関係の希薄化は地域コミュニティにとどまらず家族にも見られるようになってきている。50歳時点で一度も結婚がない人は、男性は1985年、女性は2005年頃から右肩上がりになり、家族を作らない人が非常に増えている（図1-9）。家族を作らない人が増えると単身世帯も当然増え、単身世帯率は34.6%と夫婦世帯よりも単身世帯のほうが多くなっている。夫婦と子どもがいる世帯はもはや標準ではなくなっており、家族の中で相互扶助をしている社会が揺らいでいる[23]。また、子どもがいる世帯でも女性の社会進出に伴い、両親が共働きの世帯が増えている。以前は祖父母に子どもを預けたり、祖父母と2世帯で暮らしたり世帯も多く家族という最後のセーフティネットに守られていたが、現在は核家族化が進み子どもと祖父母世帯それぞれが孤独を抱える状態になっている。

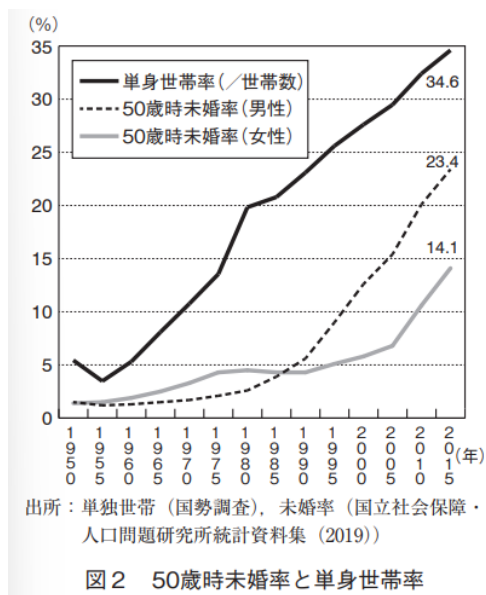


図1-9 50歳時未婚率と単身世帯率（データ出典[23]）

厚生労働省[24]では、このように人口構造や世帯構成が変化し、家族や地域のつながりが弱まっている中で複数の課題が重なり合い、複雑化していると提言している（図1-10）。

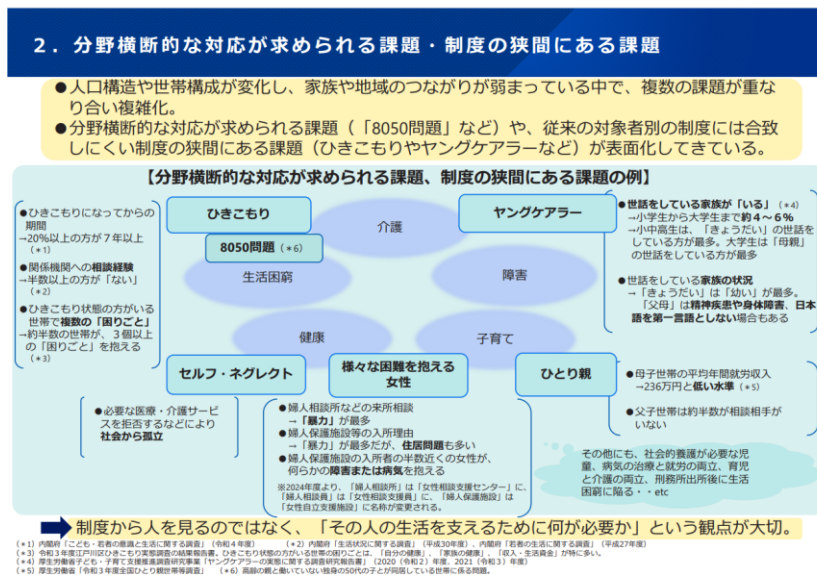


図 1-10 分野横断的な対応が求められる課題・制度の狭間にある課題（データ出典[24]）

分野横断的な対応が求められる課題が多く存在しており、これらの課題に対して「つながり・支え合い」の概念が広がりを見せており、ポストコロナの令和の時代にはつながりを持ちながら安心して生活を送ることのできる「地域共生社会」を実現するべきとしている。そのためには、やはり包括的（インクルーシブ）なつながり・支え合いを推進していかなければならない。（図 1-11）

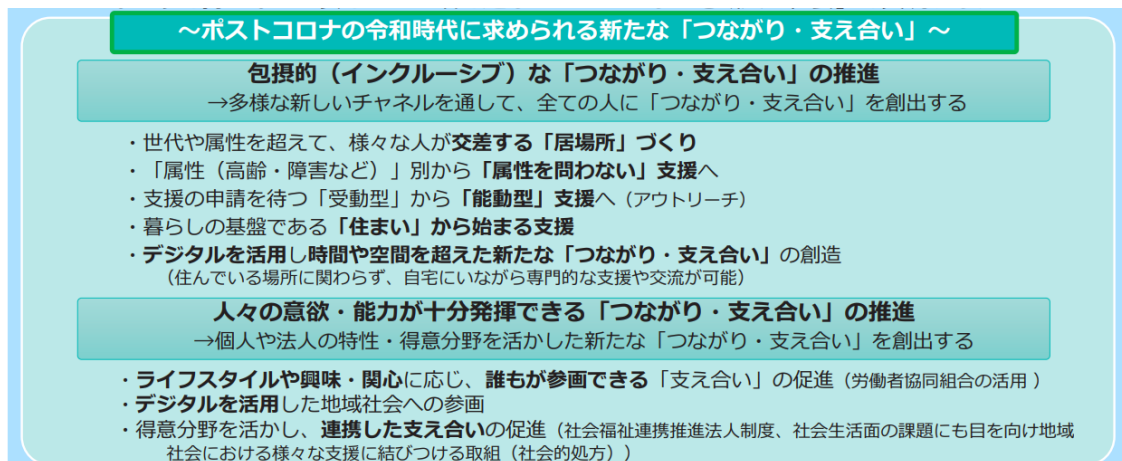


図 1-11 ポストコロナの令和時代に求められる新たな「つながり・支え合い」（データ出典[24]）

地域共生社会を実現するために、地域コミュニティに今後期待される活動としては「地域の居場所」づくりである。複雑な問題に対して、世代や属性を超えて集まれる場所を住まう地域内に作ることで、新たなつながり・支え合いを生み出せるのではないかと考えられている。以下の図（図 1-12）にイメージを示す。

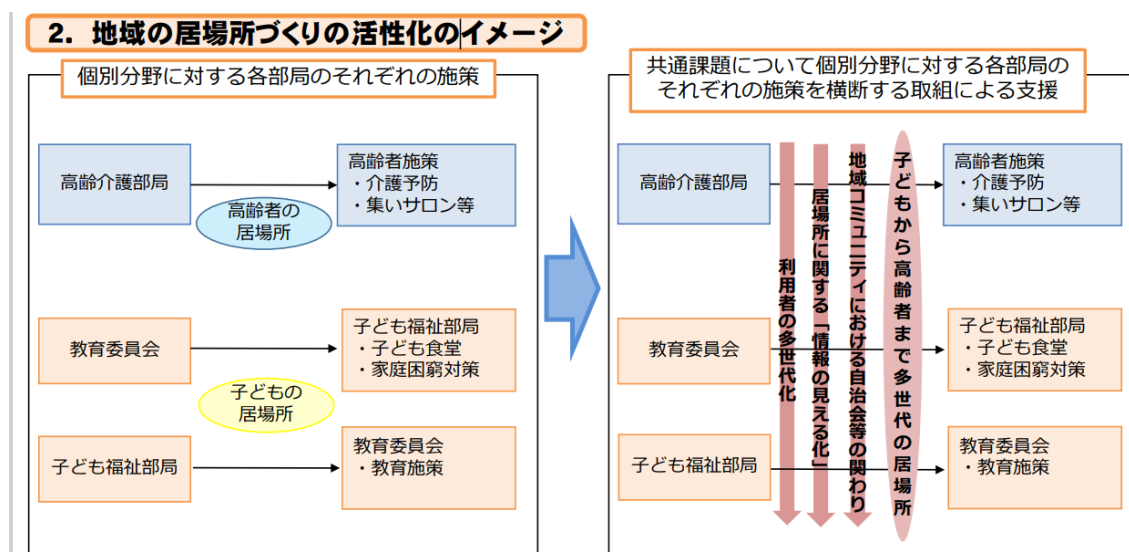


図 1-12 地域の居場所づくりの活性化のイメージ（データ出典[22]）

居場所づくりに際して、新型コロナウイルスの感染拡大の影響によりオンラインでの交流も多くみられるようになったが、オンライン接触の欠点を石田[23]は以下の図(図 1-13)に示す。

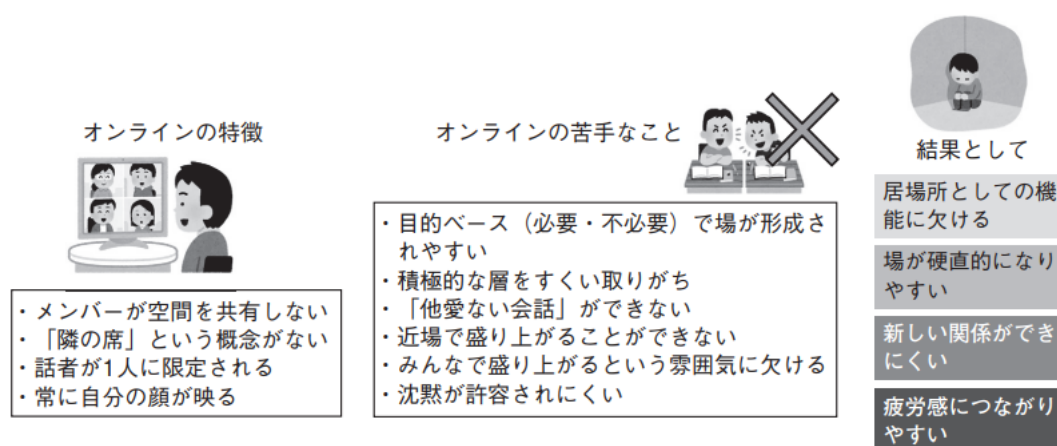


図 1-13 オンライン接触の欠点（データ出典[23]）

オンライン接触は場所を問わないという利点があるものの、目的ベースで場が形成され、目的をもって集まり目的が終わったら解散となりやすく、その場に残って雑談をするといったことがない。目的のない他愛もない会話や沈黙は、空間を共有していないと難しいという側面があり、議論を行うにはいいが、居場所としての機能は欠けていると捉えられる。また、地域コミュニティの多世代間の交流としたときに、オンライン接触だと高齢者層がデジタ

ルツールに慣れている必要があり交流へのハードルが高くなる可能性がある。そのため、居場所を作る場合は実際に会えることが重要であり、行きやすい範囲内に存在することが必要とされる。計良ら（2022）[25]によると、「居場所」はありのままの自己を安心して表出し、自身の役割や被受容感を感じる場所や空間と定義づけられ、「居心地」のよい空間が「居場所」の大前提としての包括的な概念とした。また、瑞ら（2009）[26]は、子どもにとって居場所がある人のほうが居場所がない人に比べて自己受容感が高かった。さらに居場所がない人は自己の葛藤や悩みを受容しがたく、自分の中だけに閉じこもった狭い自我形成になる可能性も伺えるため、周りがその人にとって理解し受容してくれる存在となることが必要であるとした。では、そのような居場所はどういった例があるのか。現在、実際に地域の居場所として機能している事例が多くある[22][24]（図 1-14、図 1-15）。

令和2年12月14日開催
地域コミュニティと地域の居場所についての意見交換

地域コミュニティと地域の居場所についての意見交換②

神戸市

【取組概要】

- 地域福祉センター** 概ね小学校区ごとに設置され、ふれあいのまちづくり協議会（自治会・婦人会・民生委員児童委員協議会・老人会等で構成）が管理。高齢者や障がい者・児童等地域住民をはじめ誰でも利用可。

- 子どもの居場所づくり事業** ひとり親や共働き家庭で夜遅くまで一人で過ごす子どもを対象に、食事や学習、団らんなどを通して安心して過ごせる居場所づくりのための補助金を平成28年度から交付。

戸田市

【取組概要】

- ボランティア・市民活動支援センター（TOMATO）** 市民活動に関する相談、団体同士の交流・連携、設備利用等の用途で多くの市民活動団体が利用。
- 市民活動サポート補助金、新型コロナウイルス対策市民活動支援補助金** コミュニティ・カフェの運営、フードパントリーなど、市民活動団体が行う社会貢献事業に補助金を交付。
- 市が係わる「子どもの居場所」の整備** 第三の居場所戸田拠点（NPO法人委託）、学習支援事業L-Café（社会福祉法人委託）

- 市直営のフードパントリー** 緊急事態宣言に伴う緊急的な支援活動として実施。

日野市

【取組概要】

- 地域懇談会** 平成18年度から自治会同士の交流や意見交換を行う目的で開始。平成26年度から地域で活動しているNPO・PTA・消防団・民生委員・市民活動団体・個人など多くの方々に対象を拡充。

- みんなの居場所プロジェクト**

平成30年度は「市内66か所ある地区センターを居場所づくりに活用できないか」を地域懇談会のテーマとし、翌年度以降、地区センターでのイベント、リノベーション等を実施。

NPO法人むすびえ

【取組・問題意識】

- コロナ禍でのこども食堂の活動** 緊急事態宣言下でも過半数が活動、46%がフードパントリーを実施。飲食店、自治体、自治会等との関係強化により、資源の地域循環を意識。
- キーワードとしての地域の居場所** 東京都、川崎市、宮崎市等においてビジョン、プロジェクト等に採用。
- 居場所づくりの俯瞰的把握** 居場所づくり活動の所管部署は多岐にわたり、活動支援施策を独立して実施しており、施策や社会資源（団体、人材等）の把握や、自治体間比較に課題があるため、俯瞰的に把握することが重要。

あっちにもこっちにも
こども食堂 こども食堂のある街
むすびえの目指す地域（校区）はここに

図 1-14 地域の居場所の例①（データ出典[22]）

＜参考3＞「つながり・支え合いのある地域共生社会」関係② (具体的な取組み例)

＜包括的な支援体制の構築＞

＜属性などを問わない「断らない相談支援」＞ (岡山県岡山市)

- ◆世帯の課題が複合化している場合に、「つなぐシート」を各相談支援機関で活用。
- ◆課題をもれなく把握し、つなぎ先を整理、各相談支援機関の役割を見る化。




「つなぐシート」

＜関係機関の連携、アウトリーチ、居場所づくりでひきこもり支援＞ (岩手県北上市)

- ◆行政機関と支援関係機関でプラットフォームを構築。ひきこもりに関する情報を共有。
- ◆入口は一般の店舗のような、誰でも気軽に入ることのできる「居場所」を開設。



常設の居場所「フラタネスクエア」

＜居場所＞

＜住民によるまちづくり＞ (株式会社WaCreation (千葉県流山市))

- ◆交流スペースで、地元特産のみりんを用いたお菓子作りなどのイベントを開催。
- ◆空き家を活用したこども食堂、市内の公園でのプレーパーク活動を実施。



住民が交流できる緑側での風景

＜住まい支援＞

＜高齢者と若者が交流する賃貸住宅＞ (株式会社ノビシロハウス (神奈川県藤沢市))

- ◆高齢者、若者、車椅子利用者が暮らす賃貸住宅。
- ◆若者の住民が高齢者に定期的に「声かけ」、住人同士が参加する「お茶会」を開催（こうした取組みを条件に若者の家賃は半額）。
- ◆交流により、電池交換など日常のちょっとした助け合いも広まる。



お茶会の様子

＜デジタル・ICT＞

＜アプリを活用したフレイル予防＞ (東京都府中市)

- ◆習慣化アプリを活用し、高齢者5人1組でウォーキングなどのフレイル予防に取り組む。
- ◆「通いの場」において、「みんなの使い方講座」を実施。
- ◆アプリの継続で貯まるコインを地域へ寄付できる仕組みにより、高齢者のモチベーションを維持。




府中市の寄付プロジェクト

図 1-15 地域の居場所の例② (データ出典[24])

上記に共通しているのは、やはりリアルな場所が存在していることと、孤独を抱える子どもや高齢者などが多世代で交流し、互いに助けあうような関係が築かれている。また、地域の強みを生かした取り組みなども見られ、地域が抱える課題によって取り組み方を変えていることもわかる。

筆者がインタビューを行った、静岡県富士吉田市にある「ソーシャルハウス宝島」[27]も地域の居場所として機能している。ソーシャルハウス宝島は、2022年に空き家を活用して開所された。地域サロンとして週に一度近所のおばあちゃんたちが集ってお昼ご飯をつくって一緒に食べたり、不登校児のフリースクールとなっていたりして、多様な人々が自然に交流している場所である。開設者である上田さんは、多様な人々が認め合い支え合う共生社会を目指すためにまずは多様な人々が触れる機会、つまり人々が出会って顔を見て話すことでつながることがスタートだと考え、そのための場所を開設したと話しており、高齢者の孤独感の解消や不登校児の新たな社会的つながりをもたらすことで、以前より明るい表情を見せる人が増えたと話していた。



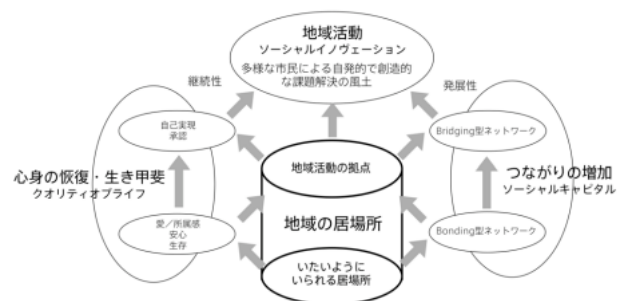
図 1-16 ソーシャルハウス宝島の様子①（筆者撮影）



図 1-17 ソーシャルハウス宝島の様子②（筆者撮影）

他にも、地域の居場所の一つとして東京都港区にある「芝の家」がある。坂倉ら（2013）[28]によると、「芝の家」では、近隣住民だけでなく地域外の多様な人が集い、主に休憩や交流を目的に過ごしていることが、特定の目的のために利用される公共施設とは異なる地域の居場所に特徴的な利用形態であり、来場者にとって「芝の家」が健康の快復や孤立感の低減に寄与し、社会関係資本を培養する契機になっている。そして、芝の家の来場者は居心地のよさや自分の関心を満たせる期待を感じることで居場所としてまずは訪れるようにな

る。次に、その関係性の中で次第に自分らしさへの自覚が深まり、運営協力等の行動を試行する。自己や他者との関係が十分に深まると、自分らしい活動が見つかり、主体的に取り組めるようになる。発展の契機は、内的動機付けと他者との関係性の相互作用であり、それを促進するためには一定の時間的猶予があることとスタッフのサポートが重要である。所属感を感じられる場と人間関係が、自己承認や自己効力感を得られる活動を始める土壌を作り、こうした中から広がる活動や組織間のネットワークの充実が地域の活性化につながり、地域の居場所が地域活動の拠点としての機能を果たしている。また、地域の居場所は地域活動に関心のある目的意識の高い人だけではなく、幅広い人が地域の様々な活動へ参入する機会を提供できる仕組みである。



1.2 研究の目的

では、坂倉らが言及した行動発展の契機となるスタッフのサポートとはどのようなものか。坂倉らは、来場者の段階に応じて場に受け入れられている実感や、居心地の良さを感じられるような配慮、運営側の役割を担っている手ごたえを感じられる機会の提供、関心を共有する他の人や地域の施設や組織を紹介するとしている。また田中ら（2007）[29]は地域の居場所のひとつであるコミュニティカフェに関する研究で、コミュニティカフェの場所の運営に継続的に携わる運営の中心的な役割を担う人物を「主」（あるじ）と定義し、主は「私と他人とをつなぐ媒介者」であるにとらえることができるとした。また、主が地域で築いている関係がコミュニティカフェと地域とのつながりを可能にしている一因になっていると示している。さらに、コミュニティカフェにおける人々の関係の在り方は上下関係もなくフラットな関係であり、固定されたものがないというところで自分なりに関わられる寄りが残され、事後的に運営内容が形成されていくことにもつながるとしている。また、主は他者との

無理なかかわりを強要せず、その時の状況や来訪者に応じた関わりを意識していることで多様な社会的接触が許容されていると感じ結果として来訪者の関係をとirmottことにつながっているとしている。

しかし、地域の居場所におけるスタッフや「主」の具体的行動の分類や、その行動が地域の不寛容さや排他性の軽減や幸福度にどうつながるのかはまだ十分に解明されていない。そこで本研究では、具体的行動を明らかにすることでスタッフや「主」の像を掴みやすくするとともに、不寛容さ・排他性や主観的幸福度とどう関係しているかを明らかにすることを目的とする。

1.3 用語の定義

本研究において、「芝の家」のスタッフや田中らの研究における「主」にあたる存在を「介在者」と定義し、交流するコミュニティの場においてその場にいる人の間に立ち交流を促す人を指し、年齢や性別など属性は問わないものとする。また、交流の場において介在者が間に入った状態で交流する人を「被介在者」と定義する。

第2章 先行研究

2.1 介在者に関する研究

介在者の先行研究は数多く存在しており、「ファシリテーター」や「コーディネーター」などに分類される。それぞれについて先行研究を示す。

2.1.1 ファシリテーターに関する研究

ファシリテーターの定義は様々であるが、デジタル大辞泉（小学館）によると、1.物事を容易にできるようにする人や物。又は世話人。2. 集会・会議などでテーマ・議論に沿って発言内容を整理し、発言者が偏らないように順調に進行するように口添えする役。議長と違い、決定権を持たない、と定義されている。主にワークショップなどにおける司会進行役を指し、メンバーに共感し全体の信頼関係を作り上げていくことに加えて、様々なテクニックを駆使しながら議論をわかりやすく整理して円滑に進めることが求められ、専門家ほど専門性の深さは求められないが、異質な分野同士を滑らかに連携させていくための「つなぎ役」としての熟練が求められる[30]。教育学的に位置づける場合、「内容の指導者」ではなく「場面の企画者」として学習者同士の双方向的で相互作用を伴う場面を生み出すことを基盤にし、集団内の個々の成員が互いの可能性を引き出し合う関係を促進する役割が期待されている。また、曾我ら（2008）[31]によると、まちづくりワークショップにおいてファシリテーターの介入タイプを整理すると、「話し合いを方向付ける」、「議論を要約する」といったタイプの介入が多く、「発言を支援する」など協働の場づくりに関係する介入は少ないことが確認された。また、認知過程では「ファシリテーターの主張を混ぜる介入」、意志的過程では「決定を後押しする」介入が重要な役割を果たすとしており、進行役もつとめつつ、ファシリテーター自身の意見を述べることが求められると示唆された。武田（2012）[32]は、教員に求められる学習ファシリテーションスキル評価として5項目を取り上げた。まず、「学場づく

り (field design)」は授業の事前準備・段取りのスキルであり、要点は目標 (方向性)、目的、プロセス、規範、メンバー構成である。次に、「対人関係 (personal relationship)」は学習者が安心して発言できる場を提供するスキルであり、傾聴 (聴く力)、質問 (訊く力)、観察 (観る力)、復唱 (応える力) が要点である。「構造化 (structuration)」は議論をかみ合わせ、整理するスキルである。話の前提となる知識や、根拠、主張したい結論を明らかにすることが要点であり、論点を整理したり、場の状況に応じたアクティビティを選択したりする能力が求められる。「合意形成 (consensus building)」は構造化の段階で生じた対立を解消し意見をまとめてわちあうスキルである。意見をまとめて、結論をだすことや、対立を解決して、合意に導くこと、さらには意見のギャップを発見し、問題分析を再構築することが要点とされ、話し合いの道が開けるようにまとめる能力が求められる。最後に、「情報共有化 (information sharing)」は互いの意見が理解できるようにアクティビティを用いて見せる化の作業を進め、広げることである。議論の表現技術や、情報発信・受信データの整理力、情報通信技術の活用技術が要点とされ、図解チャートなどの表現技術の取得やリアルタイムな外部交信技術の習得、さらには情報モラルの理解力が求められるとしている。

これらの先行研究より、ファシリテーターは議論を中心とした場において、進行やまとめる力が必要とされていることがわかる。

2.1.2 コーディネーターに関する研究

コーディネーターとは、広辞苑によると、物事を調整する人と定義されている。竹丸 (2020) [33]はコーディネーターについて、様々な専門的機能を使いながら第三者的俯瞰的立ち位置で実践共同体の要としてその成立に寄与し、実践共同体が行う実践活動の場づくりに関与している。すなわちワークショップの「場」をデザインしていると述べる。広辞苑で定義されている通り、調整役の意が強いため様々な場面において職業としてのコーディネーターが存在している。学校と特別支援を必要とする学生の間の特例支援教育コーディネーターや、多文化コーディネーター、地域コーディネーターなどが存在している。特に、本研究の地域の居場所の介在者と近い存在である地域コーディネーターが果たす役割について平井 (2013) [34]は以下に示す図 (図 2-1) にまとめた。

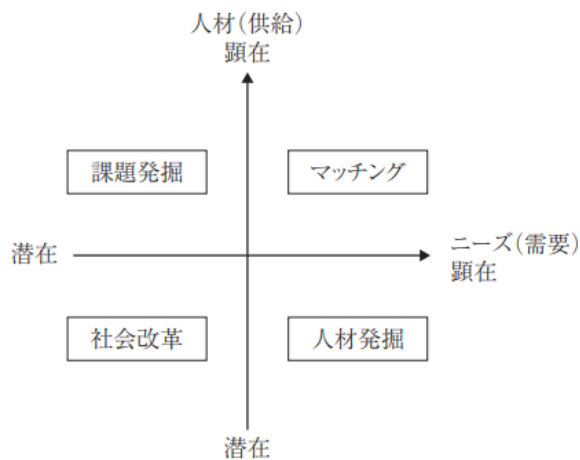


図 2-1 地域コーディネーターが果たす役割（データ出典[34]）

武川（2004）[35]は、コーディネーターに求められる重要なスキルとして、①最新情報・生きた人脈を多数所有している。②企業の課題を見抜き、分析する基礎能力がある。③ネットワークが軽く、営業センスや交渉能力がある。④特定分野に偏らない柔軟な思考ができる。⑤支援対象者の心理的側面を理解し、当人のモラルアップに貢献できる。と述べている。

これらの先行研究からコーディネーターとは、専門知識や人脈などを用いてその分野において人の間に立つてつなげることとされており、コーディネーター自身の経験や人脈に大きく依存する可能性が高いと考えられる。

2.1.3 コミュニティマネージャーやコミュニティデザイナーに関する研究

コミュニティマネージャーとは、コミュニティの運営やメンバーのサポートなどコミュニティ全体の管理を担当し、コミュニティデザイナーは人と人とのつながり、人のネットワーク化や活動のプラットフォームづくりを促し、コミュニティの仕組みを設計する。両者に求められるスキルは重なる部分も多く、周囲を巻き込む力や柔軟な思考力、ユーザーの気持ちやニーズを汲み取る力、発信力、企画力とされている。コミュニティデザインという言葉はもともと1960年代にアメリカで生まれた言葉であり、もとは住宅開発で土地に合わせてデザインすることを意味していたが、1980年代から実際に使う立場となる地域住民の意見を取り入れた住宅開発を行うべきではないかとされ、言葉の意味が変化していった。山崎（2012）[36]や平本（2015）[37]らはコミュニティデザインについて「人の集まりが力を合

わせて目の前の課題を乗り越え、さらに多くの仲間を増やしながら活動を展開することを支援する」ことが目指され、フィールドワークやワークショップを繰り返すことで人のつながりを作り出し、意識を共有するとしている。

2.1.4 コンサルタントに関する研究

コンサルタントとは、広辞苑によると専門的な問題について相談を受け、診断・助言・指導などを行う人とされている。田中ら（2010）[38]は、大学における授業コンサルタントのスキルに関して、コンサルティとコンサルタントの2者間の個人型コンサルタントに必要なスキルは、Lewis（2002）[39]が話を聴くスキル、データ収集のスキル、観察のスキル、データ分析のスキル、励ます能力、共感する能力、文献に関する知識と述べていることに對し、多様な参加者とコンサルタントの場合は、お互いの学び合いの場を創出し、参加者同士のネットワークが形成されることを支援していくことが重要としている。これらの研究より、コンサルタントは人と人の介入ではなく、人の悩みや判断に対して助言などを通じて介入する人であり、専門的知識を求められるとされる。

2.2 地域の寛容性やつながりと幸福度の研究

有馬（2021）[41]は、LIFULL 総研の調査結果[20]を基に分析した結果、幸福度（人生評価）を目的変数として寛容性を示す「開放性」「凝集性」を説明変数に加えた回帰分析を実施すれば、個人レベルの「凝集性」の知覚は「開放性」と共に幸福度を高める効果があり、幸福に対してはポジティブな要因である事が分かる。幸福と寛容性はいずれも離脱意向を下げる効果があるが、都道府県レベルでの両者の相関はそれほど強くはない（ $r = 0.293$ ）。

「凝集性」との相反する関係性にも象徴されているように幸福と寛容性の間には複雑な関係性があるらしい。地方創生の課題に取り組むうえでは、その地域で暮らす一人一人の幸福と、地域の寛容性の両方の視座を持つ必要があるようだとされており、明確に寛容性と幸福度の正の相関関係は確認されていない。また、高尾ら（2018）[42]によると、地域内に交流できる場所があるなどの「地域交流」因子は幸福度指標と相関係数が高く、ソーシャル・キャピタルの豊かな地域で幸福度が高いという先行研究と整合的であることを示し、「交流安心」政策が「地域活動」や「地域愛着」を媒介して間接的に幸福度に影響していることを示

している。

第3章 地域の居場所における介在者像の提案

3.1 介在者像の抽出

まず、地域の居場所としての交流の場において必要な介在者像を定義する。前述の先行研究より、ファシリテーターやコーディネーター、コミュニティマネージャー・デザイナーと呼ばれる介在者は、場で交流する目的意識が高く目的の達成のために被介在者間の介在を行うが、地域の居場所の存在意義が交流すること自体にあるため、本研究の介在者像にはあたらならないのではないかと捉えた。

これらから、筆者は以下のように介在者を分類した（図 3-1）。場の目的と介在者の働き方で分類を行った結果、地域の居場所に必要な介在者は交流自体が目的の場所で、リーダーシップをとってまとめるのではなく、間に入って輪を広げる役割を持った介在者であると考えられる。

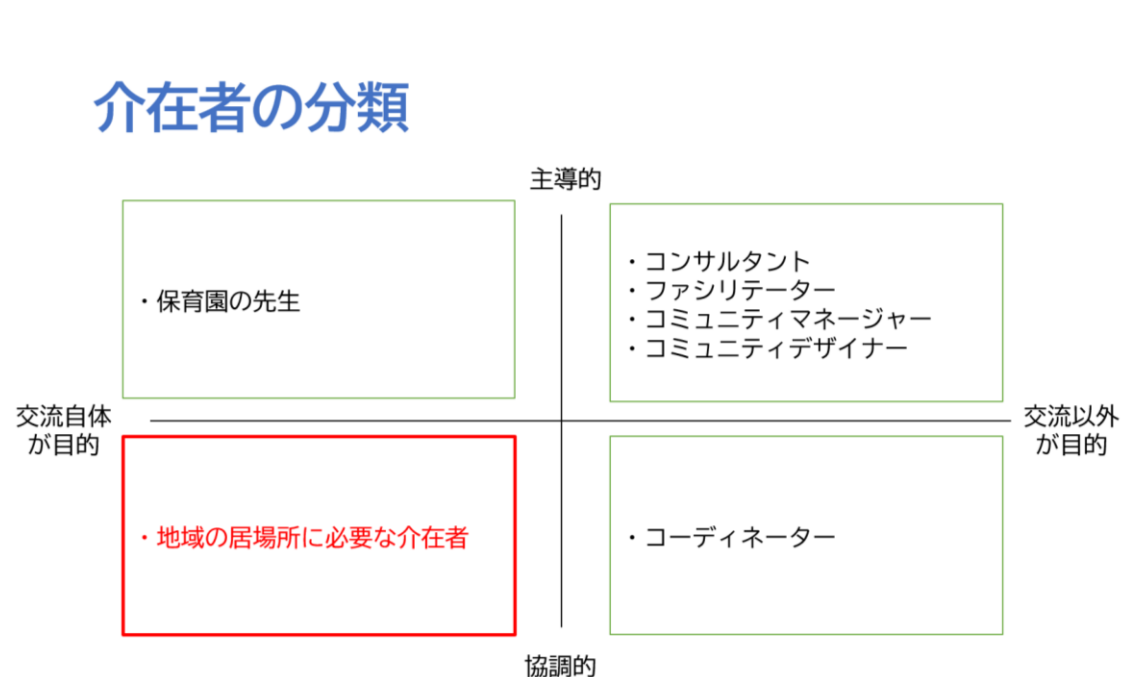


図 3-1 介在者の分類（筆者作成）

そこで、地域の居場所での交流に必要な介在者像と同じ分類の介在者を検討した結果、ス

ナックのママのような存在ではないかと考えた。スナックというと一般的には夜の風俗営業の一種という印象を持たれているが、他業態店と異なりスナックの場合はコミュニティの形成につながっており、アットホームな家のような地域交流の場になっている ([40]) という点で特徴づけられる。そのコミュニティ形成力を活かし、近年「オフィススナック」が会社内で設けられることも増えてきた。「オフィススナック」とは、スナックの持つ特有の空間や、ママのコミュニケーション・スキルを活用して社内のダイレクトで円滑なコミュニケーションの醸成を目的としたイベントである [43]。スナックは単純な飲食目的ではなく、会話を求めて集まる場でありアットホームな場でママという介在者は、会話相手として重要な役割を果たしている。

3.1.1 スナックのママに関する研究

中田 (2016) [44] はスナックにおける言語コミュニケーションについて、ママと男性客の間ではスピーチレベルが時間の経過とともに丁寧体基調から普通体基調へと緩やかに変化すること、自己開示についてママと男性客との間では不均衡性が認められること、ユーモアの出出について男性客側の発話数が多いことやユーモア題材に偏向性があること、男性客のフェイス (体面) を侵害しないようにママはパラ言語的な韻律を使用していることの 4 点を明らかにし、これらを総合するとママは男性客に対して親しさを表現しつつも、一定の距離を保つという接客言語ストラテジーを採っているといえる。これらを実験的仮説スナックにて参与観察した結果、この言語ストラテジーはママ側からの一方的な働きかけだけでは関係を調整するうえで機能しないことが明らかになり、男性客にとってスナックは家庭や職場の役割から解放された自由な発言ができ、かつ自分のフェイスを満たしてくれる場であり、それを可能にさせているのがママの言語行動であり、レストランのような飲食店ともバーやキャバクラのような風俗営業店とも異なる、日常性と非日常性の両方をバランスよく兼ね備えた言語コミュニケーションの場であると結論づけた。

また、中田 (2019) [45] は、日本には数多くの遊戯飲酒店が存在しており、クラブや、キャバクラ、様々な営業形態の店が存在するが、これらは一般的に「水商売」と称され、一括りにされる傾向にあると述べ、熊田 [47] が述べるように性風俗に対して芳しくないイメージがあることを即座に否定できる人はおらず、世間一般的に「いかがわしい」といったイメージを持たれてしまう。しかし、前地 (2020) [48] はホステスクラブとスナックの違いについて

て、ホステスクラブはボックス席で「女性接客者と客」といった個々のやり取りを中心としているが、スナックは客同士がカウンターに並び、「客と客」という多方面にわたる社交場としての社会的空間を作り上げていると述べている。また、スナックのママは店を「家」、ママである自らを「母」とし、訪れる客を「息子」共に働く「女の子」を「娘」という認識に転換し、自らを「水商売の女」であることを回避しているのではないかと結論付けている。また、ここには「水商売」というものに対するアンコンシャスバイアスがかかっている可能性が示唆された。

先行研究では、スナックのママは女性であることが強調されているが、ママという呼称に関しては女性を指すわけではなく、女性性を表す表現（[46]）であり、受容、包容力などを想起させることにつながり、協調的な介在者としてのイメージが湧きやすい。本研究では地域の居場所としてスナックのようなコミュニケーションの場を目指すため、介在者にあたるスナックのママは女性に限定する必要はない。飲食業種としてのスナックではなく、あくまでもコミュニケーションの場としてのスナックを目指すものとする。ただし、介在者の呼称は「スナックのママ的介在者」とすることでイメージがしやすいことからあえて「ママ」を使用する。

3.2 像の特徴を抽出

では、スナックのママに必要な特徴とはどういったものか。先行研究より、ママに必要とされるスキルとして、「コミュニケーション・スキル」が重要であると考えられる。コミュニケーション・スキルについて、藤本ら（2007）[49]は基本スキルを「自己統制」「表現力」「解読力」の3因子、対人スキルとして「自己主張」「他者受容」「関係調整」の3因子の合計6因子に分類した。

本研究では、上記記載のスキルでもママに求められるコミュニケーション・スキルの具体的な特徴を明らかにするため、筆者と同研究室に属している16名にてスナックのママのような介在の上手な人に関するブレインストーミングを行い、その後親和図法にてまとめたものを図に示す。（図 3-2）

図より、ママのように介在の上手な人の特徴で、介在するときに意識しやすい項目として「笑顔」「ユーモア」「話しかけやすさ」「口調」「つなげる」「安心感」「飾らない」「聞き上

手」の8つに分類して、これらを「ママ特性」と本研究では定義する。



図 3-2 スナックのママのように介在の上手な人の特徴 (筆者ら作成)

各ママ特性について先行研究とブレインストーミングの結果から、具体的な行動を示したものが (表 3-1) である。

「笑顔」については、菅原ら (2007) [50]により、笑顔の強度や口唇形状に注目した笑顔のタイプから笑顔の印象評価を行い、笑顔に活力を与える携帯特徴は口の形状であることがわかった。また、笑顔は肯定的な印象を与えるため、笑顔の印象平面が持つ普遍性の表れであると考えられるとされた。また、益子ら (2006) [51]では笑顔を感情によって異なる8種類の笑い (微笑, 大笑い, 嘲り笑い, くすくす笑い, にやにや笑い, 高笑い, 照れ笑い, 吹き出し笑い) に分類し、結果をクラスター分析したところ笑顔の静止画を見た群では微笑やくすくす笑いなどの「小さい笑い」と吹き出し笑いや高笑いなどの「大きい笑い」に分類下に対し、笑顔の動画を見た群では微笑と照れ笑いの「ポジティブな笑い」と「ネガティブな笑い」に分類しており、静止画では単に表情の変化を大小で分類しているのに対し、動画では笑いを肯定的・否定的なものに分類しており、より意味的な解釈を行っているとした。これらの結果から、今回の実験における笑顔の具体的チェック項目を抽出した。

「口調」は、中田 (2016) [44]によるスナックのママの言語ストラテジーから丁寧体基調

から普通体基調に徐々に移行したことがわかっており、普通体基調が重要であると示唆されていることとブレインストーミングでも「同じ目線に立った口調」と表出していることから、チェック項目は「ため口を混ぜる」「丁寧すぎない」「親しみを感ずる」とした。

「ユーモア」は「おもしろさ、おかしさといった心的現象」[52]とされ、ユーモアを引き起こす個々の刺激事象は「ユーモア刺激」[53]と呼ばれている。高岡（2011）[54]は対人ストレス場面におけるユーモア刺激を5つの大カテゴリーに分類し、さらに高岡（2015）[55]はそれぞれのカテゴリーの代表的な解答例を示した。この分類からチェック項目を生成した。

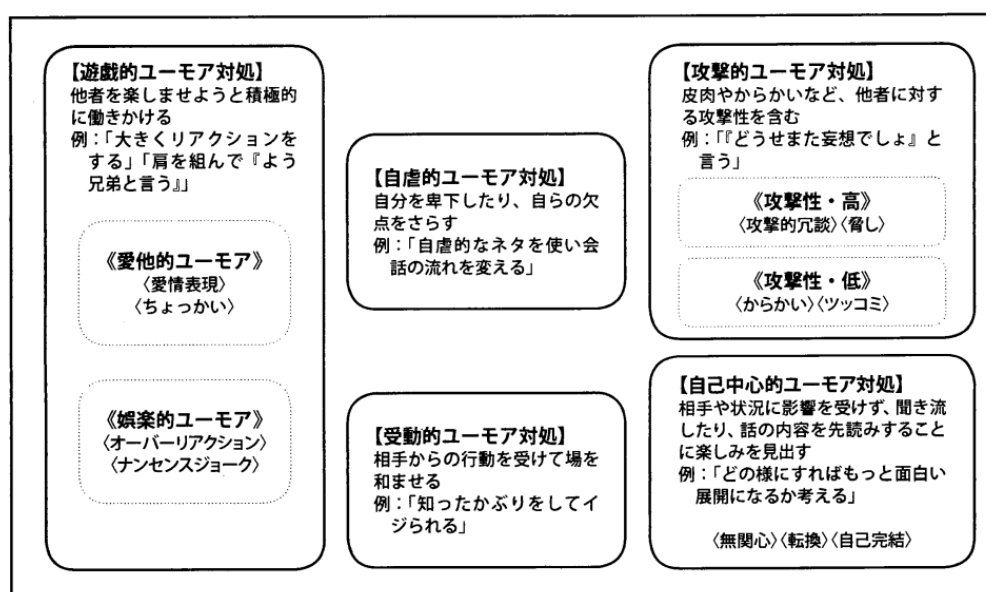


図 3-3 ユーモアのカテゴリー分類（データ出典[55]）

「話しかけやすさ」については、佐藤ら（2016）[56]が言及するように受取手の性格や考え方といった心理特性として、「社会的発話傾向尺度」もしくは「詩的発話傾向尺度」のどちらが高いかの2つに分類される。つまりは、聞き手に回ってくれる人のほうが話しかけやすいと感じるか、話し手に回って話しかけてくれるほうが話しかけやすいと感じるかに分けると述べている。そのため、どちらのパターンもチェック項目とした。また、話しかけやすさはコミュニケーションとしてだけでなく、視覚的なことも影響していると考えられ「清潔感」をチェック項目とした。

「つなげる」については、田中ら（2007）[29]が述べている「主」の特徴としてあげられているように、「無理につなげない」が「共通点を探る」などを項目とした。

「飾らない」については、中田（2016）[44]のスナックの場の特徴にあった日常と非日常

の間であることと関連していると考えられ、ママ自身が上から目線ではなく、等身大でいることやキャバクラやラウンジとは異なり、ママが脱性化している[57]ことに着目した。

「安心感」については、計良ら（2022）[25]や坂倉ら（2013）[28]が述べるように居心地のよさと関係性がある。また、中田（2012）[57]はスナックのママが言語的に怒りを表現することがあったとしても、それは客をなだめたり気をそらしたりするためであり親密さの表現であるとし、信頼関係という安心感があってこそその行動であると述べている。

「聞き上手」はコミュニケーション・スキルの「解読力」[49]と近いが、原田（2003）による聞き手の発言を6つのカテゴリーに分類し、①推測・理解・確認②肯定・受容③情報探索④自己及び周辺の開示⑤違う視点の提示⑥問題解決に向けた発言としている。

以上より、各ママ特性について32項目の特徴を抽出した。

表 3-1 ママ特性の具体的行動や特徴（筆者ら作成）

笑顔	微笑んでいる
	目が笑っている
	口を開けて笑う
	声を出して笑う
	不意の笑顔がある
口調	ため口を混ぜてしゃべる
	親しみを感じる口調
	丁寧すぎない口調
ユーモア	会話にツッコミを入れる
	身振り手振りが大きい
	ジョークを会話に挟む
	ちょっかいをかける
話しかけやすさ	たくさん話題を提供してくれる
	全員に話を振る
	話しかけられることに嫌悪感を示さない
	どんな話も興味をもって聞く
	清潔感がある

つなげる	共通点を見つけてつなげてくれる
	無理につなげようとはしない
飾らない	誰にも媚びない
	気取らない態度
	自然体でいる
	忸度しない
安心感	上下関係つけない
	自分のために叱ってくれる
	自分の価値観を押し付けない
	平等に接する
	何を言っても認めてくれる
聞き上手	聞いたことから推測・理解して自分の言葉で返す
	相槌などで共感を示す
	新たな情報を得るための質問をする
	自分の経験も話す

3.3 特徴と多様性・寛容性，幸福度に関する仮説

では 3.2 で仮定されたママ特性がどう地域の不寛容さ・排他性や幸福度に影響するのか、筆者は 3 段階に分かれてママ特性が間接的に多様性・寛容性の向上や幸福度の向上に寄与すると仮説立てを行った。（図 3-4）

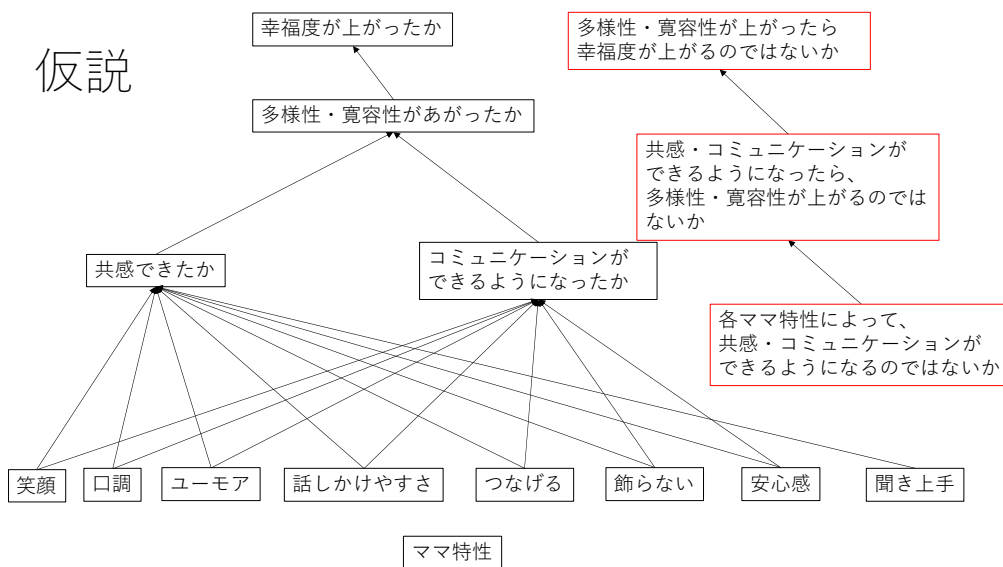


図 3-4 仮説図式（筆者作成）

まずは、各ママ特性が交流の場において作用することで被介在者間の共感ができるようになることや、被介在者間のコミュニケーションが円滑になるのではないかと仮説を立てた。また、ママ特性の中でも、より共感もしくはコミュニケーションの向上に寄与している特性が存在しているのではないかと仮説を立てた。（第一段階）そして、被介在者間の共感やコミュニケーションが向上することで、お互いのことを理解し合えるようになり多様性・寛容性が向上するのではないかと仮説を立てた。（第二段階）さらに、多様性・寛容性が向上することで2.2に示したように幸福度の向上に寄与する一因となるのではないかと仮説を立てた。（第三段階）と3段階に分けた。

そして、結果的にスナックのママ的介在者がいるコミュニケーションの場では幸福度が向上するのではないかと仮説を立てた。

第4章 検証

4.1 検証手順

実際に被介在者同士が初対面の場に、被介在者と面識のある介在者が存在し交流する実験をする（図 4-1）ことで、仮説の流れに従い検証を行う。まずは、本研究で仮定したママ特性の具体的行動を用いて介在者のママ特性をアンケートにて評価し、各ママ特性が被介在者間のコミュニケーション・共感に寄与したかを検証する。さらに実験前後にて被介在者の多様性・寛容性と幸福度を測定することで、コミュニケーション・共感と多様性・寛容性の関係、そして多様性・寛容性と幸福度の関係を検証する。また、多様性・寛容性と幸福度の前後の差を有意差検定し、実験の効果を確認することで妥当性確認を行う。

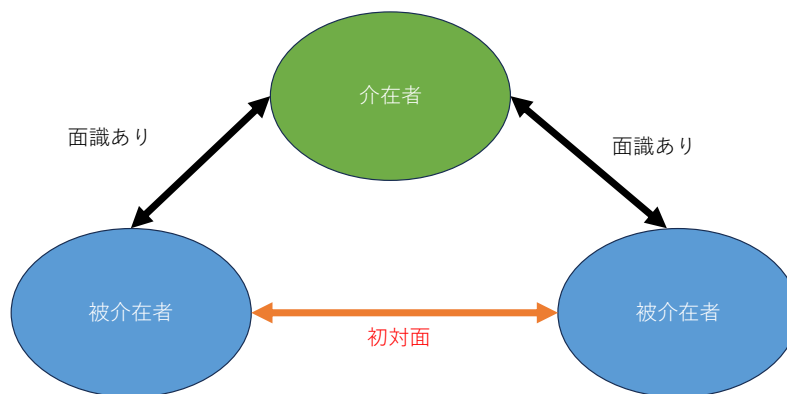


図 4-1 実験概要図

4.1.1 検証方法

異なる文化背景を持つ日本人学生と留学生を対象に実験を行う。被介在者を日本人学生と留学生、介在者は日本人学生と留学生のどちらとも面識のある日本人学生とし、2 時間交流する実験を行った。スナックのような場を仮定するため、昼食と飲み物、軽食を用意して

一緒に食べながら交流する形式とした。被介在者は留学生 1 名と日本人学生 1 名、介在者は日本人学生 1 名である。介在者の日本人学生は留学生とも日本人学生とも面識がある者である。実験直後に、ママ特性がコミュニケーション、共感に寄与していたかをアンケートにて調査した。また、実験直前及び直後に多様性・寛容性（異文化理解）に関する 9 項目（[59]参照）と幸福度の尺度として、感情的幸福（ポジティブ感情、ネガティブ感情）の 16 項目、幸せの 4 因子の 8 項目[60]のアンケートを実施し、10 名の有効回答を得た。

比較実験として、同じ文化背景を持つ日本人同士でも仮説が認められるかを検証するため、日本人のみを対象として 2 時間交流する実験を行った。こちらも軽食と飲み物を用意し一緒に食べながら交流する形式とした。被介在者を 1 名ずつと、介在者 1 名の計 3 人で交流を行った。日本人学生と留学生の実験同様、実験直後に被介在者に介在者に対する各ママ特性の評価と、被介在者間のコミュニケーション、共感に関する評価をアンケート調査した。実験直前及び直後には、多様性・寛容性（保守・リベラル）に関する 11 項目（[20]参照）と、前回同様に幸福度の尺度として感情的幸福、幸せの 4 因子のアンケートを実施し、13 件の有効回答を得た。これらの回答を Excel にて相関係数の算出と t 検定を実施した。

4.1.2 調査対象者

日本人学生と留学生を被介在者の対象にした実験の対象者は筆者の参加呼びかけに応じて自主的に集まった 20 代～30 代までの男女である（n=10、男性 4 名、女性 6 名、日本人学生 6 名、留学生 4 名）。内、留学生はマレーシア出身の女性留学生 1 名と、インドネシア出身の男性の留学生 1 名、ベトナム出身の女性留学生 1 名、台湾出身の女性留学生 1 名である。

日本人のみを対象にした実験では、SDM 生の前野研究室に所属する学生・研究員 8 名と OBOG 5 名の計 13 名を被介在者の対象とし、学生・研究員（n=8、男性 1 名、女性 7 名）と OBOG 間（n=5、男性 2 名、女性 3 名）の初対面での交流を行った。介在者は学生・研究員の 6 名が行い、6 名は学生・研究員と OBOG それぞれと面識がある者とした。全員に対し、アンケート調査とインタビューにて調査を行った。調査に際しデータを研究に用いることに全員から同意を得た。

4.2 ママ特性とコミュニケーション・共感に関する結果と考察

被介在者に介在者の行動を各ママ特性の具体的な行動のチェック項目にてアンケートに複数回答してもらった結果、行動の傾向を図 4-2 に示す。この結果から、一番多く見られた行動は「相槌などで共感を示す」という「聞き上手」に分類される行動であった。

次に、介在者ごとの各ママ特性の得点平均を算出した。調査結果から介在者ごとの各ママ特性の得点平均とコミュニケーションと共感の各得点平均とを相関係数を用いて分析した結果を表 4-1 と散布図に示す。

表 4-1 からは、「ユーモア」と「聞き上手」がコミュニケーションと共感の両方において強い正の相関を示していることが明らかになった。しかし、散布図（図 4-7、図 4-8）を確認すると「ユーモア」は点数にばらつきがあり、強い相関があるとはいえないが、正の相関の傾向にあるとわかる。そのため、「聞き上手」のみ共感とコミュニケーションと強い正の相関が見られ、ママ特性の中では一番共感とコミュニケーションに寄与している特性であることが分かった。「話しかけやすさ」はコミュニケーション・共感の両方において正の相関を示し、コミュニケーションと共感にそれぞれ寄与していることが示された。「口調」は、コミュニケーションにのみ正の相関を示し、被介在者間のコミュニケーションに寄与していると示された。「つなげる」はコミュニケーションには正の相関、共感には弱い正の相関が示されておりどちらにも寄与しているが、よりコミュニケーションに寄与しているママ特性であると示される。また、「笑顔」と「安心感」は、共感とコミュニケーションのどちらにも弱い正の相関が示されている。一方、「飾らない」は共感とコミュニケーションのどちらとも正の相関が見られなかった。

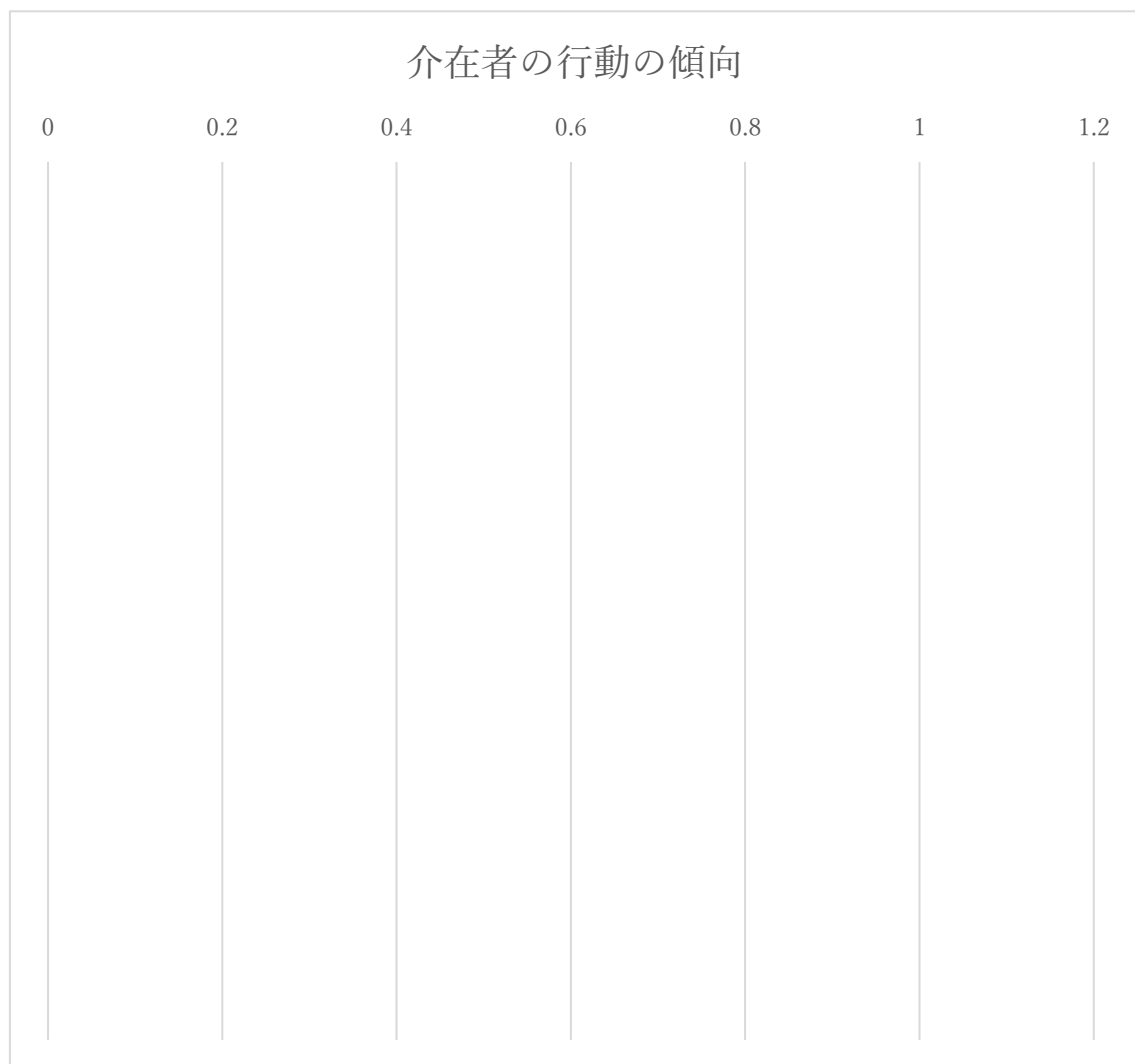


図 4-2 介在者の行動の傾向

表 4-1 各ママ特性とコミュニケーション・共感の相関係数表

	笑顔	口調	ユーモア	話しかけ やすさ	つなげる	飾らない	安心感	聞き上手
コミュニケー ション	0.274	0.424	0.773	0.547	0.423	-0.233	0.320	0.744
共感	0.371	0.034	0.836	0.501	0.279	0.170	0.370	0.743

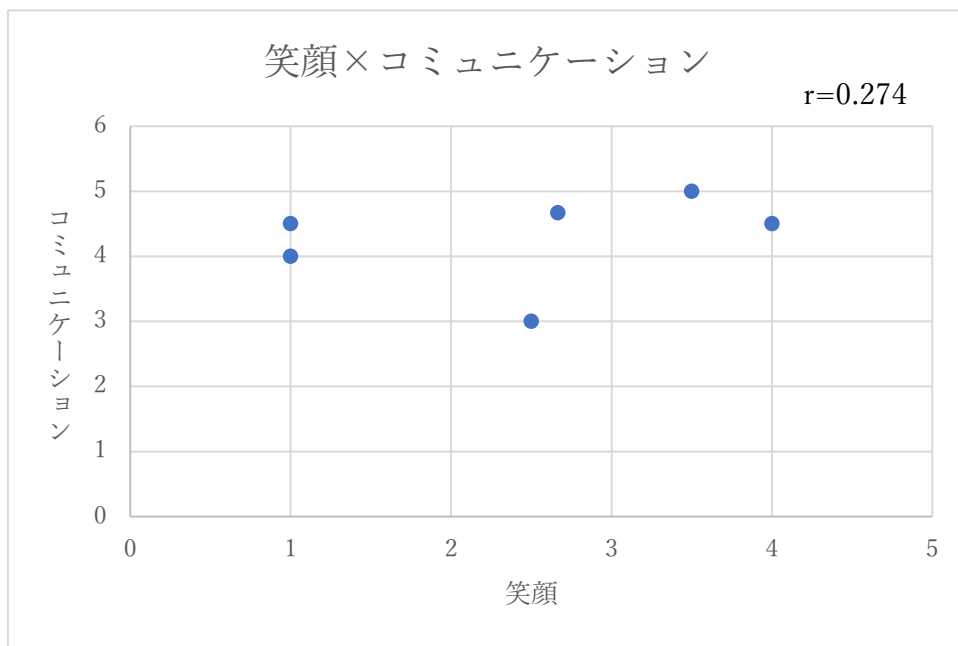


図 4-3 笑顔とコミュニケーションの散布図

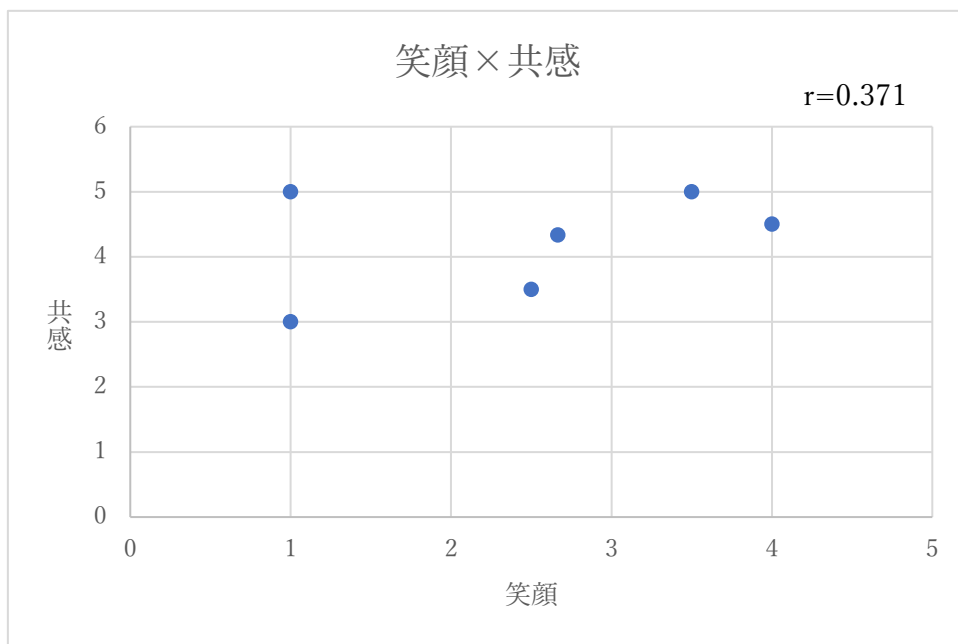


図 4-4 笑顔と共感の散布図

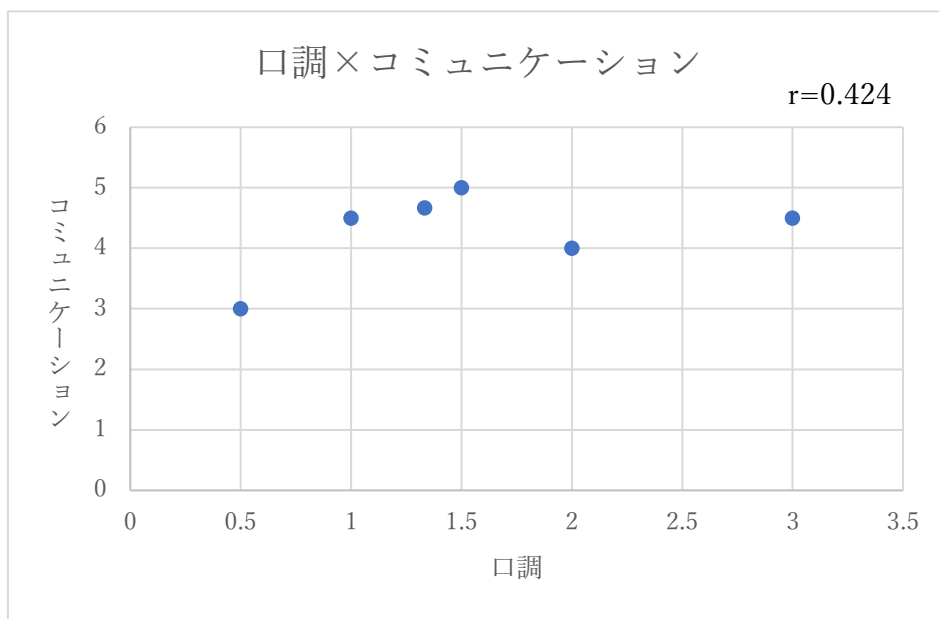


図 4-5 口調とコミュニケーションの散布図

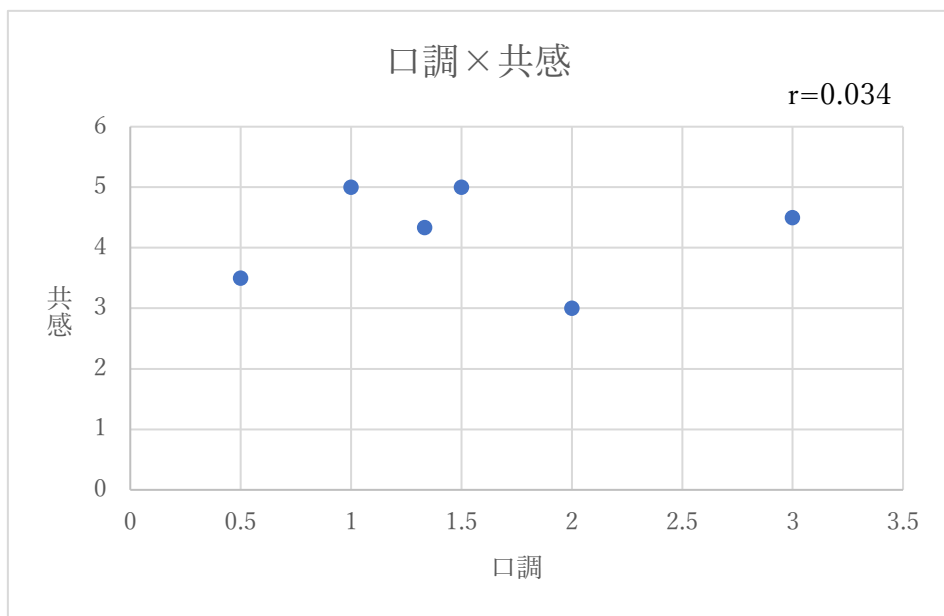


図 4-6 口調と共感の散布図

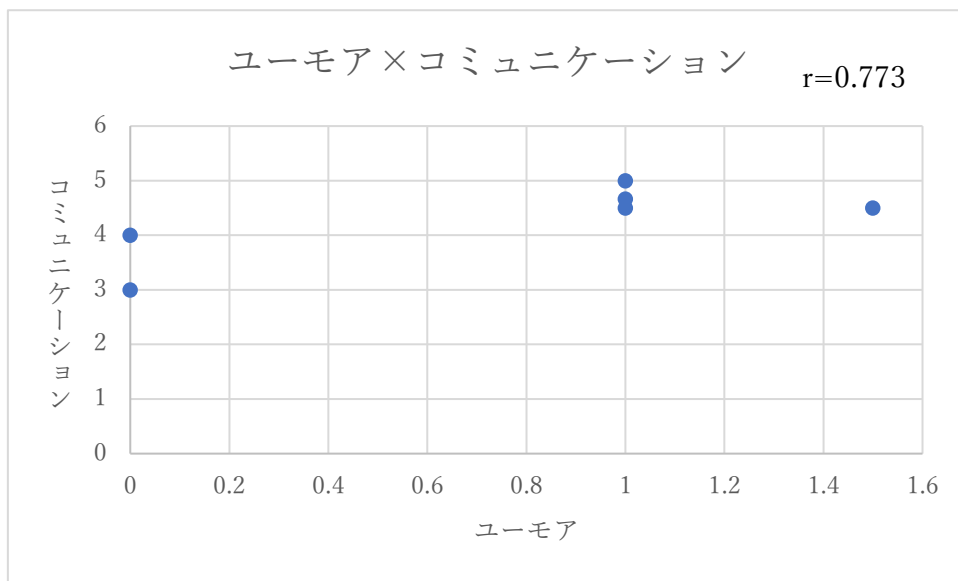


図 4-7 ユーモアとコミュニケーションの散布図

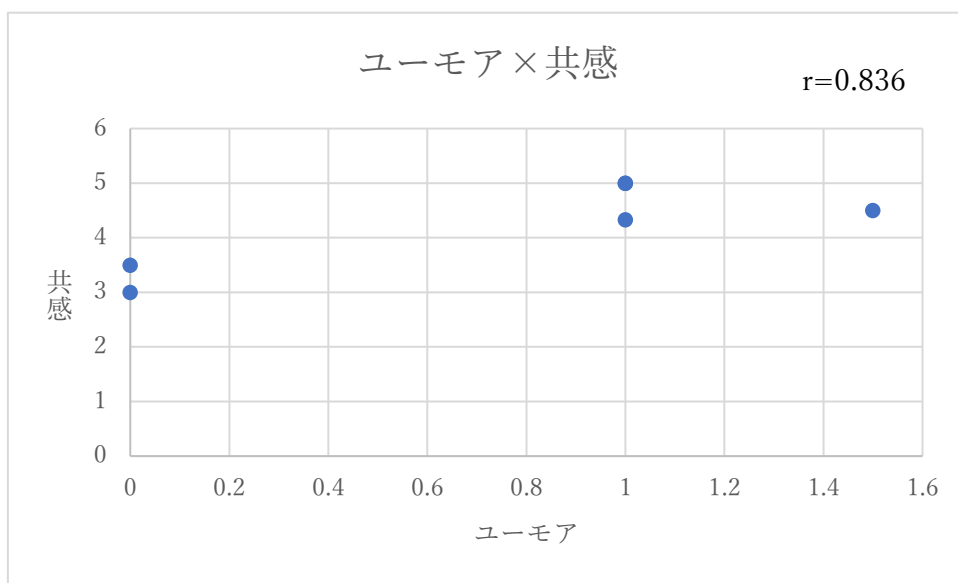


図 4-8 ユーモアと共感の散布図

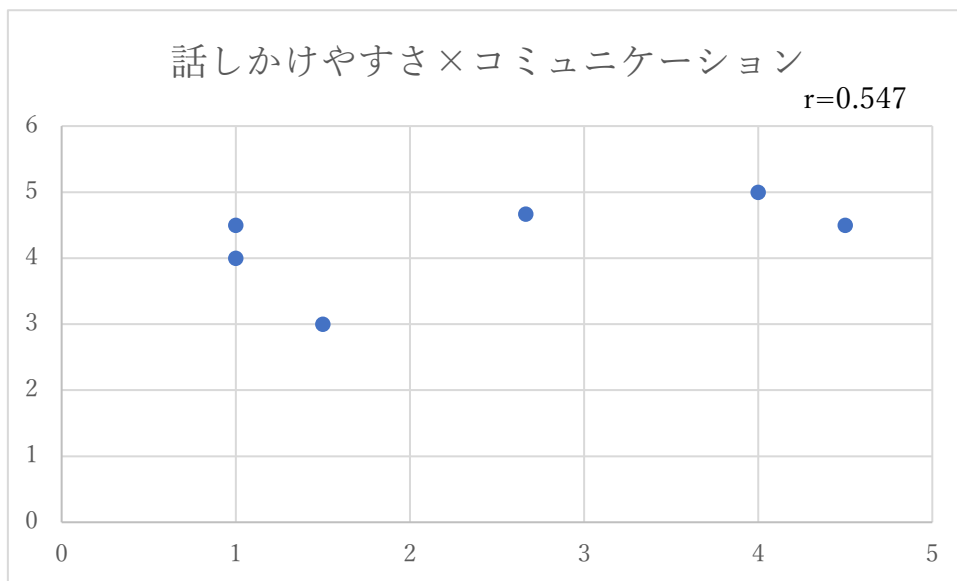


図 4-9 話しかけやすさとコミュニケーションの散布図

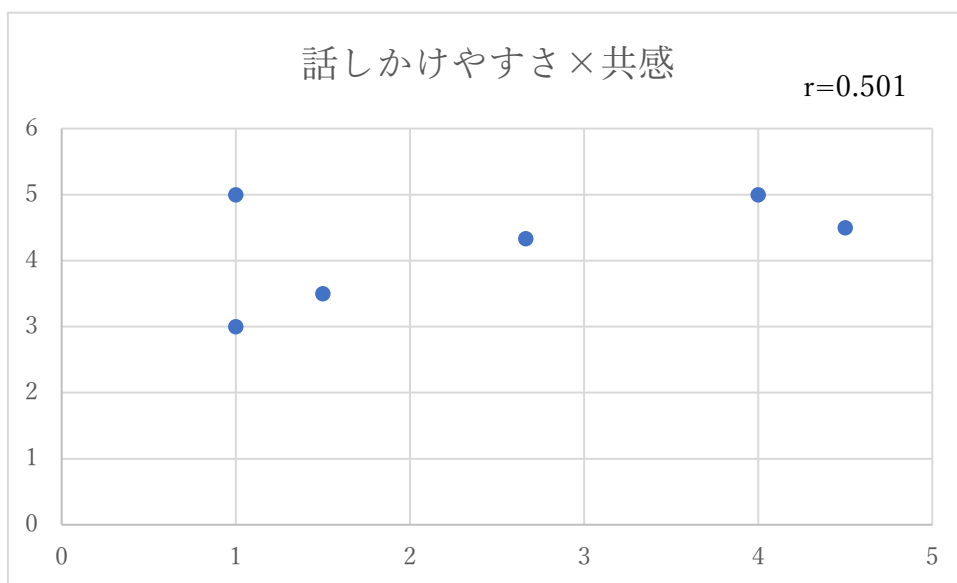


図 4-10 話しかけやすさと共感の散布図

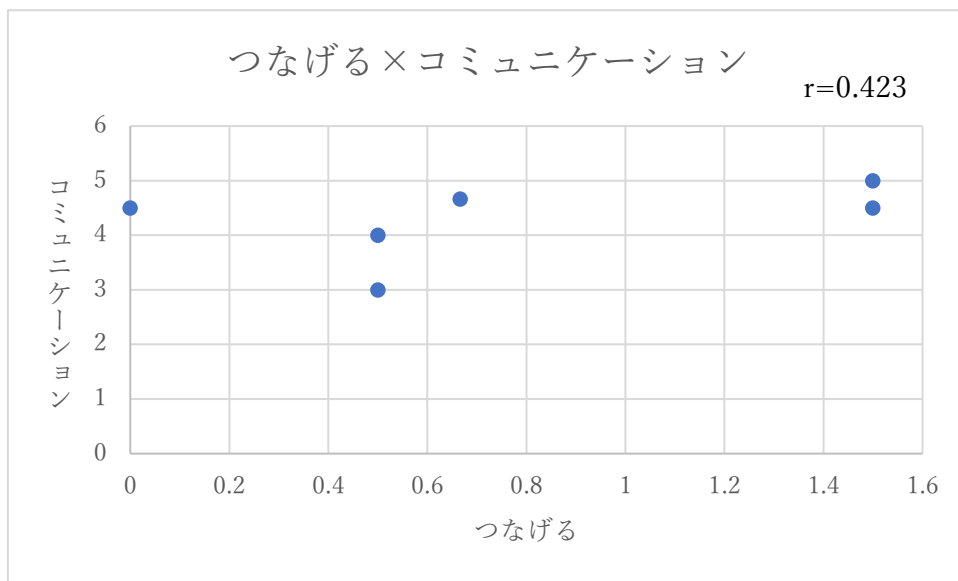


図 4-11 つなげるとコミュニケーションの散布図

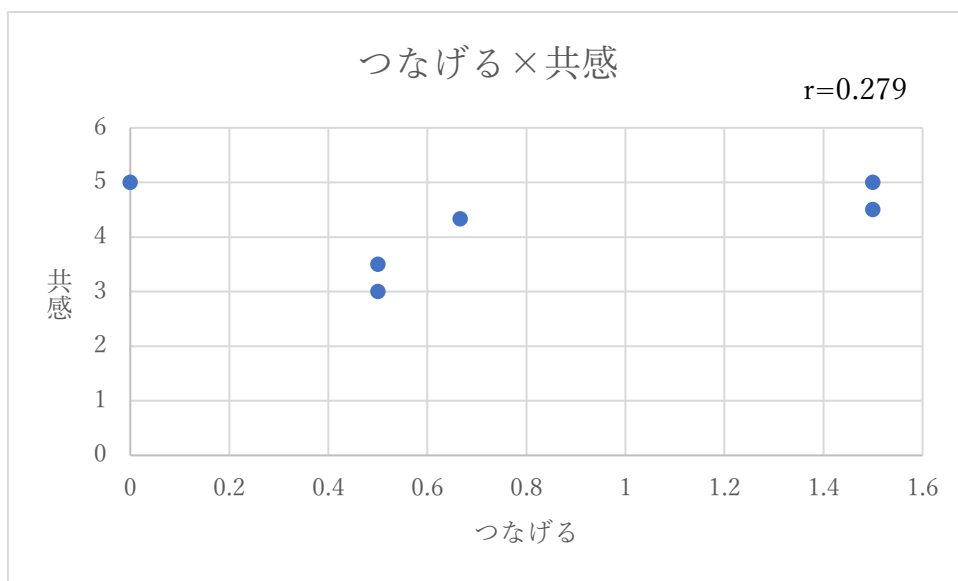


図 4-12 つなげると共感の散布図

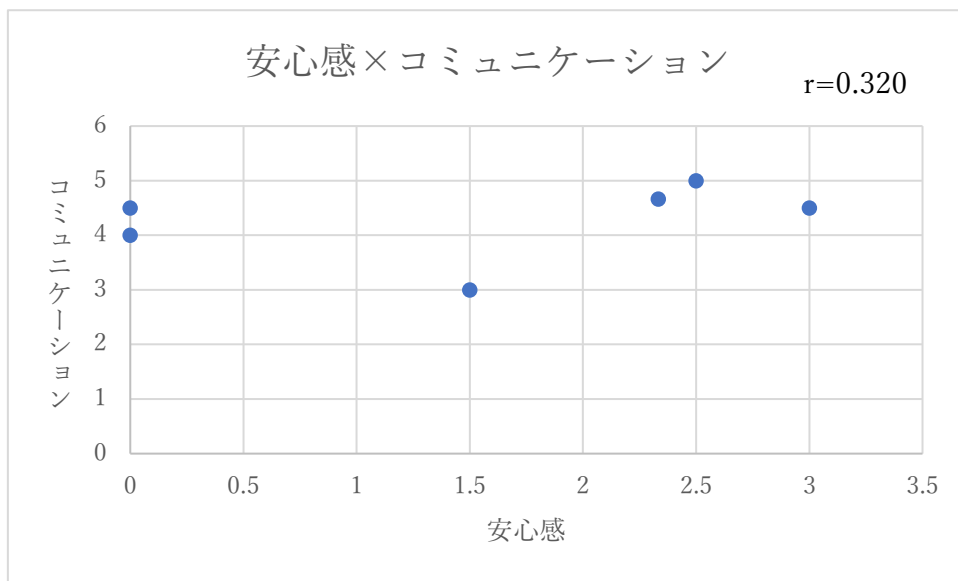


図 4-13 安心感とコミュニケーションの散布図

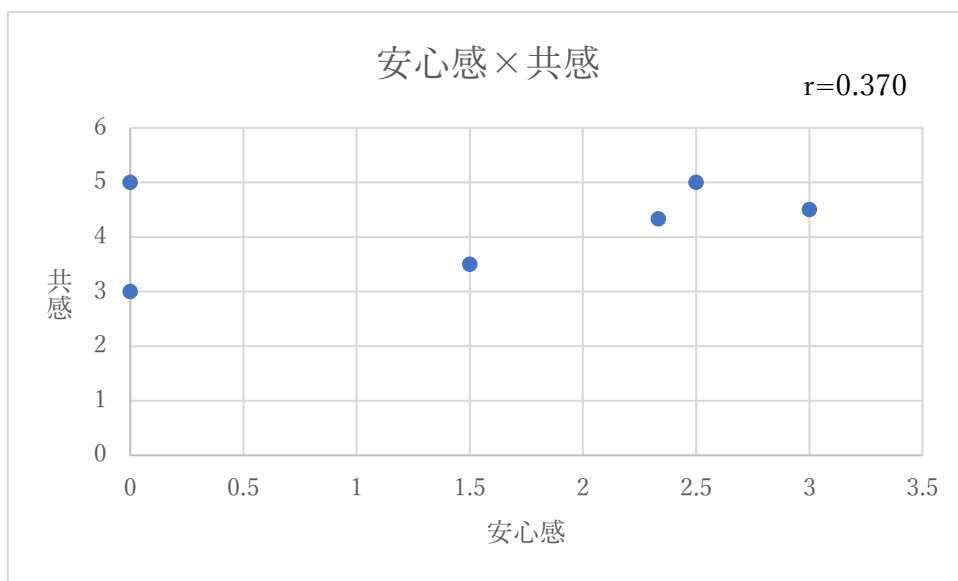


図 4-14 安心感と共感の散布図

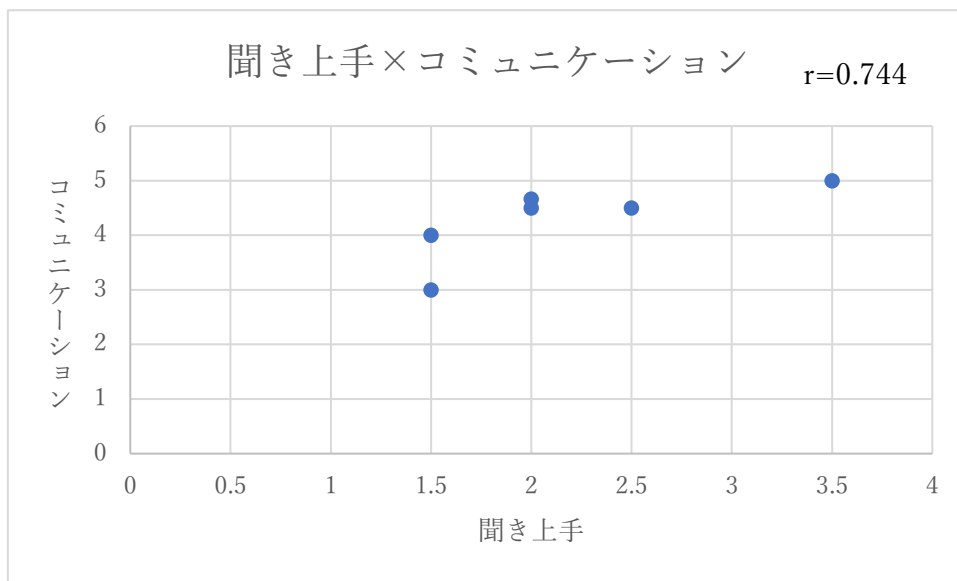


図 4-15 聞き上手とコミュニケーションの散布図

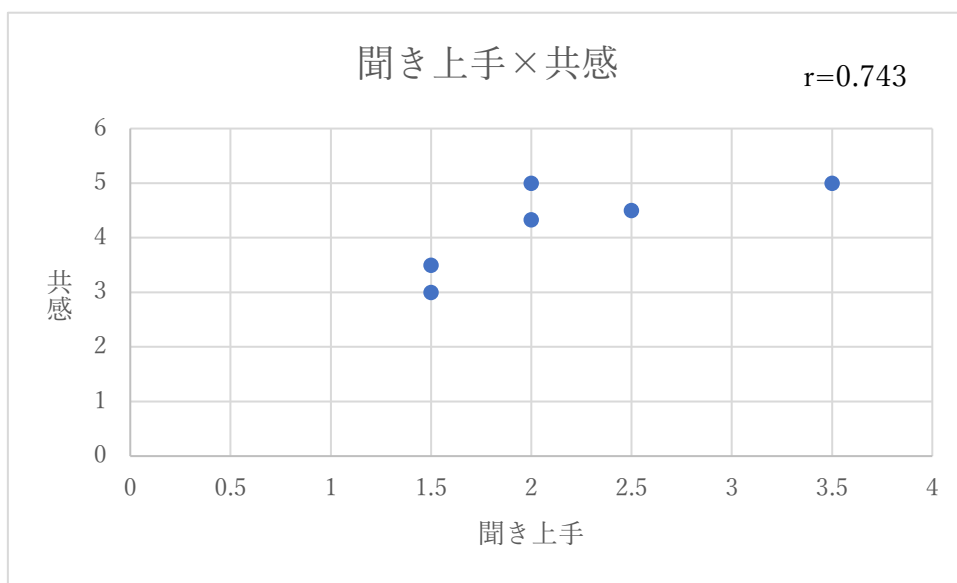


図 4-16 聞き上手と共感の散布図

これらの結果について被介在者に対し実験後にインタビューを行ったことも加えながら考察を行う。まず、ママ特性の8項目中7項目でコミュニケーションもしくは共感と正の相関が認められたことから、仮定していたママ特性の分類は妥当に近いと考えられる。

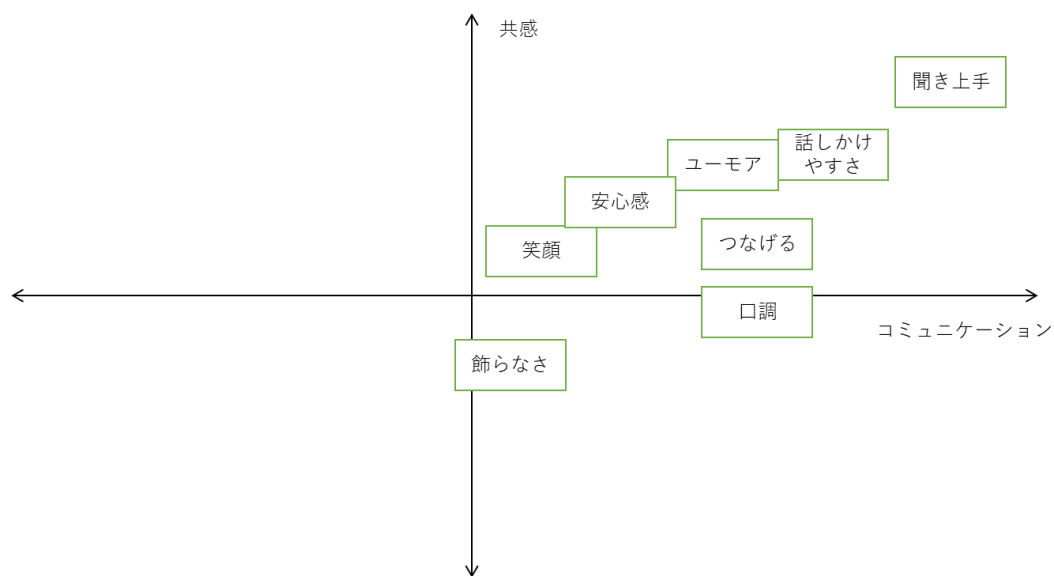


図 4-17 各ママ特性の分布（2軸図）

また、結果から「聞き上手」がコミュニケーションと共感のどちらにも強い相関を示し、ママ特性のなかでも一番コミュニケーションと共感に寄与していた。「聞き上手」に分類される介在者の行動の傾向に着目すると、介在者が被介在者2名両者の話を相槌などを打ちながら聞き、それに対し自分の経験も話すことが重要であることが伺える。これは、被介在者と既知の関係である介在者が聞き上手であることで、被介在者の話を引き出すことにもつながっている。これにより、被介在者間での共通点や違いを認め合えるきっかけとなるため、コミュニケーションや共感に寄与しており介在者の特性として重要であると考えられる。また、「話しかけやすさ」もコミュニケーションと共感のどちらにも寄与しているが、「聞き上手」であることが「話しかけやすさ」につながっていることも考えられる。どちらの特性も被介在者の「話す・聞く」という動作に対する介在者の受け方に対する評価であり、両特性が互いに影響を与え合っていることも示唆され、両特性ともママ特性としては必要

な要素であると考えられる。

「つなげる」というママ特性もコミュニケーションと共感のどちらにも正の相関を示したが、これは介在者が「話しかけやすく」「聞き上手」であることから、被介在者から話を引き出しやすくさせていることで、被介在者同士の共通点も見出しやすくなっている可能性がある。また、実験では介在者がつなげなくても会話をしている中で被介在者間に新たな共通点が見つかり、自然と会話が盛り上がる様子も見られ、「つながり」がコミュニケーションを発展させるきっかけになることが示唆された。そのため、「つながり」をつくるために介在者が「つなげる」という特性を持っていることはきっかけを増やすことになるため、被介在者のコミュニケーションをより強くすることになり重要な要素であると考えられる。

コミュニケーションにのみ正の相関が認められた「口調」は、介在者が親しみの持てるような口調や優しい口調であることで、被介在者間の心理的距離が近く感じられコミュニケーションが円滑になったのではないかと考えられる。また、前提として介在者と被介在者間は既知の関係であることから口調が砕けやすく、介在者も親しみのある口調になりやすかったと考えられる。

「笑顔」や「安心感」はコミュニケーション、共感ともに弱い正の相関が見られたが、インタビュー結果から、介在者が笑顔で相槌を打っていたことや、誰の話も等しく興味を持ってきていたなど、どちらも「聞き上手」や「話しかけやすさ」に寄与していることが示唆され、コミュニケーションや共感には間接的な寄与が認められる。特に「笑顔」はあらゆる特性の前提となっている可能性がある。「笑顔」があることで「安心感」のある場になり、雰囲気が和やかになる。和やかな場であれば介在者、被介在者ともに「口調」も柔らかくなり、「ユーモア」も表出しやすくなる可能性がある。聞いてくれる介在者が「笑顔」であれば、被介在者は「話しかけやすく」なるなど、「笑顔」があることが特性としての前提条件になっていると考えられ、直接的にはコミュニケーションや共感に寄与していないものの、重要な特性であると考えられる。また、「安心感」は介在者に対し「安心感」があることで場に対する心理的安全性が高まり「笑顔」を出しやすくなるなど、交流がしやすくなるなどコミュニティの場として重要な要素であり、間接的にコミュニケーションや共感に寄与していると考えられる。ただし、「安心感」は、介在者と被介在者間の既に存在している信頼関係とも言えるため、スナックのママ的介在者個人の特性ではない可能性があると考えられ、実験を経て示唆された。「安心感」の具体的行動から再考し「関係のフラットさ」と「寛容さ」に分類するなど、特性の再分類を検討する余地がある。「飾らない」に関しては、介在者の行動の

傾向として「気取らない」が上位4位にあるため、行動としては見られていたもののコミュニケーションと共感には直接寄与していないと考えられる。ただし、「飾らない」から「話しかけやすさ」に寄与するなど各ママ特性の基盤となって寄与している可能性があり、コミュニケーションと共感以外への影響も今後検討していかなければならない。

これらの結果より、スナックのママ的介在者がママ特性を持つことで、共感・コミュニケーションに寄与していることが検証され、第一段階の仮説は支持された。また、特性の中でも「聞き上手」が最も共感・コミュニケーションに寄与していると示されたが、各特性が相互に影響を与え合っている可能性も示唆された。

4.3 共感・コミュニケーションと多様性・寛容性及び幸福度

4.3.1 共感・コミュニケーションと多様性・寛容性の結果と考察

次に、日本人学生と留学生における共感・コミュニケーションと多様性・寛容性（異文化理解）の関係性を確かめるために、それぞれのアンケートの平均点を散布図に表し、相関係数を算出した。表（表 4-2）より、共感と多様性・寛容性の相関係数が、.711、コミュニケーションと多様性・寛容性の相関係数が、.782 とどちらも強い正の相関がみられた。両者を比較すると共感よりもコミュニケーションのほうがやや多様性・寛容性の向上に寄与していると示されたが、ほぼ差はないとわかった。

日本人学生と留学生に分けて相関係数を算出したところ、どちらも強い正の相関を示し、日本人学生よりも留学生のほうがより強い相関を示していることが分かる。

表 4-2 共感・コミュニケーションと多様性・寛容性の相関係数表

相関係数	共感平均	コミュニケーション平均
全体	0.712	0.782
日本人学生	0.747	0.831
留学生	0.848	0.808

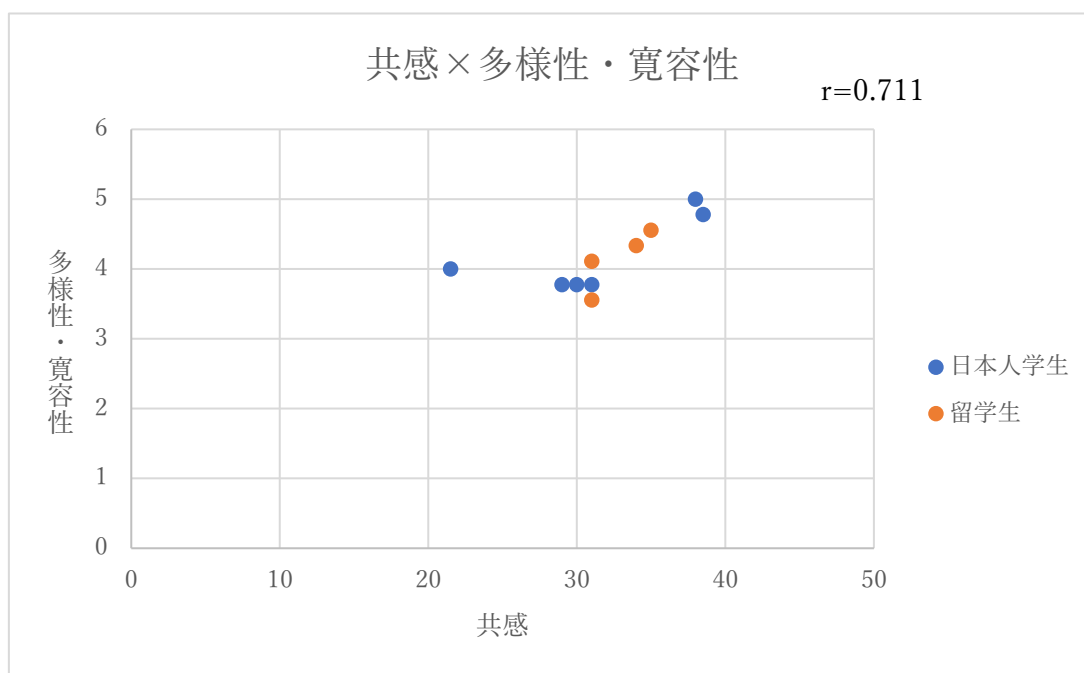


図 4-18 共感と多様性・寛容性の散布図

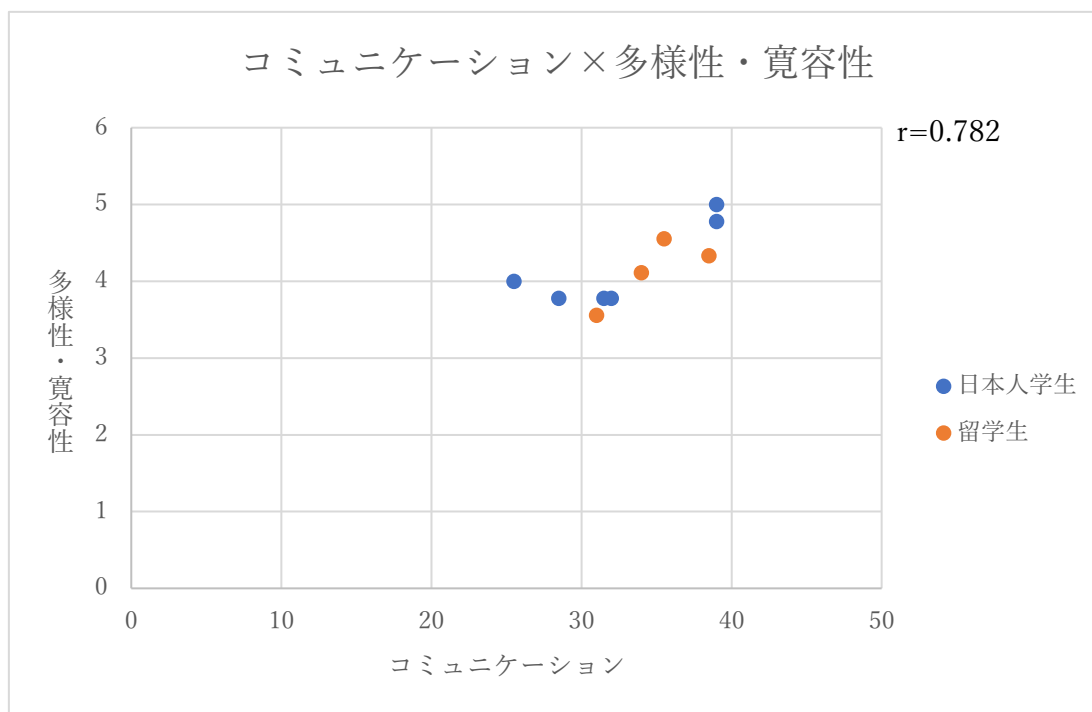


図 4-19 コミュニケーションと多様性・寛容性の散布図

次に、日本人学生と留学生の多様性・寛容性（異文化理解）の事前事後を比較する。

図（図 4-20）より、9 項目中、7 項目での上昇が見られた。特に変化が大きいのは、留学生（日本人学生）と交流することへのハードルの高さについて、実験後のほうが日本人学生、留学生ともに大幅にハードルが低いと感じている。t 検定を実施したところ、全体（表 4-3）では $t(9)=2.57, p<.05$ となり、実験前後の差が有意であることがわかった。さらに日本人学生と留学生に分けて t 検定を実施した（表 4-4）ところ、日本人学生は $t(5)=1.96, p<.10$ 、留学生は $t(3)=3, p<.05$ となり、留学生、日本人学生ともに有意な傾向にあることが分かる。さらに、留学生（日本人学生）への声かけについても変化が見られ t 検定を実施した（表 4-5）。全体では、 $t(9)=2.22, p<.05$ であり、有意な傾向にあることがわかる。また日本人学生と留学生に分けた場合、留学生は $t(3)=2.45, p<.05$ となり有意傾向が見られたが、日本人は $t(5)=1.19, p<.28$ となり有意差は見られなかった。また、留学生のみ日本人学生に対する苦手意識の軽減が $t(3)=2.45, p<.10$ となり有意な傾向が見られた。

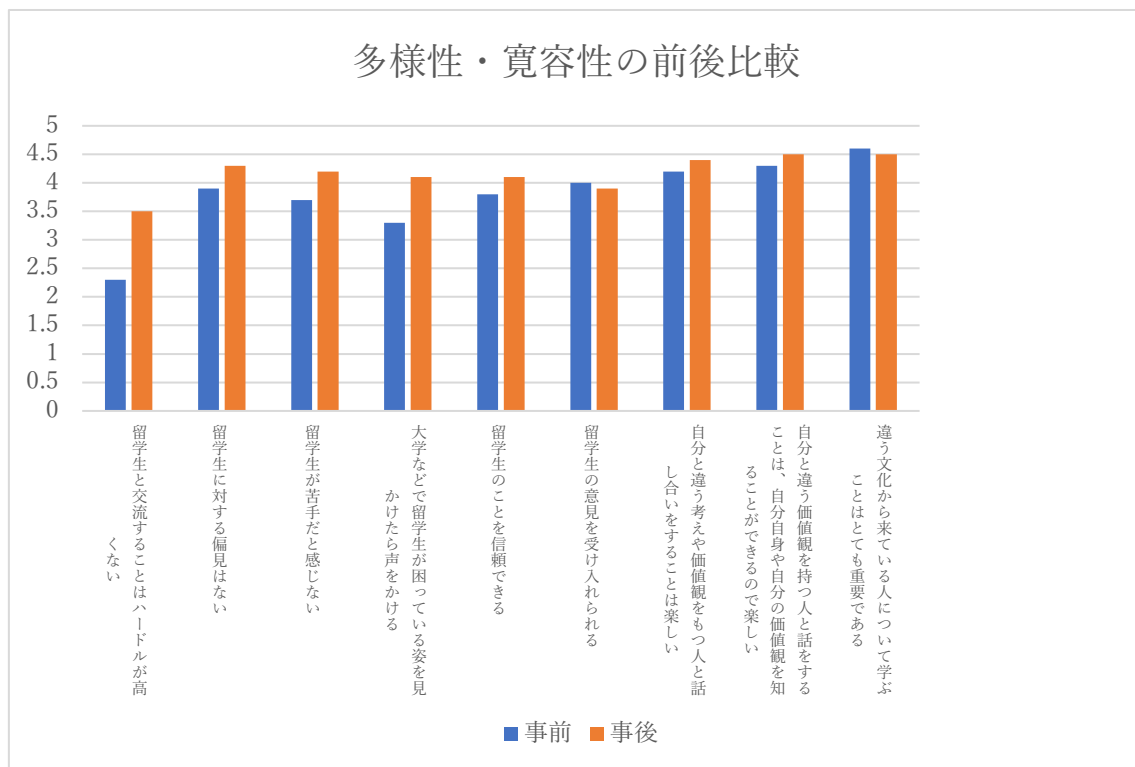


図 4-20 項目別多様性・寛容性の実験前後比較（全体）

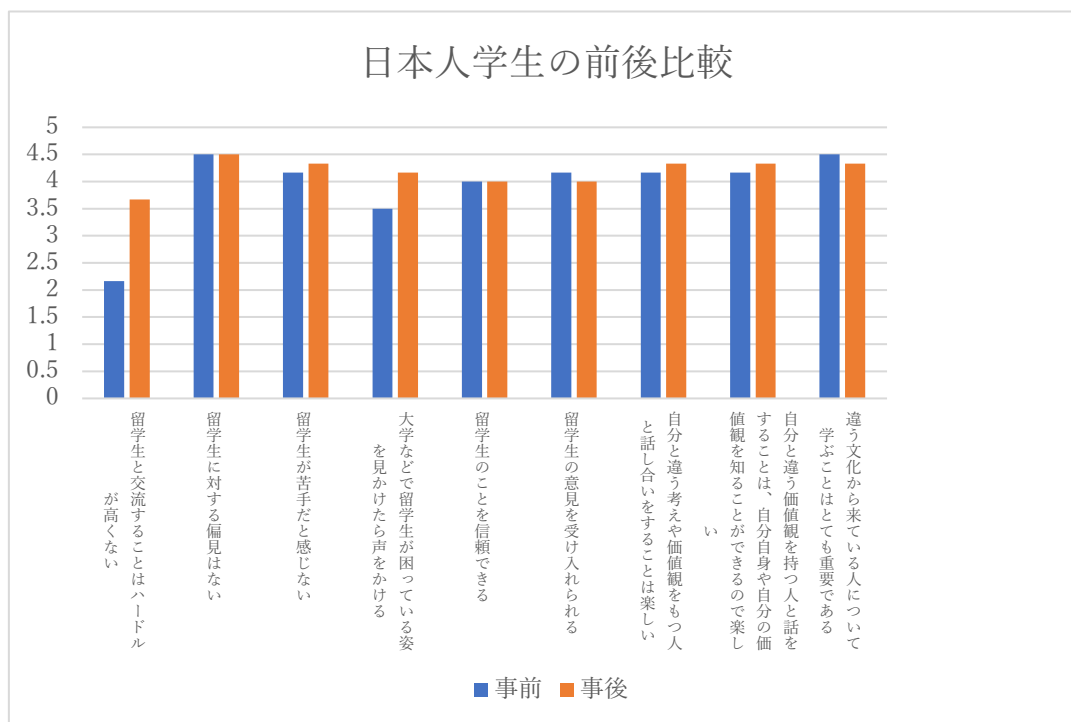


図 4-21 項目別多様性・寛容性の実験前後比較（日本人学生のみ）

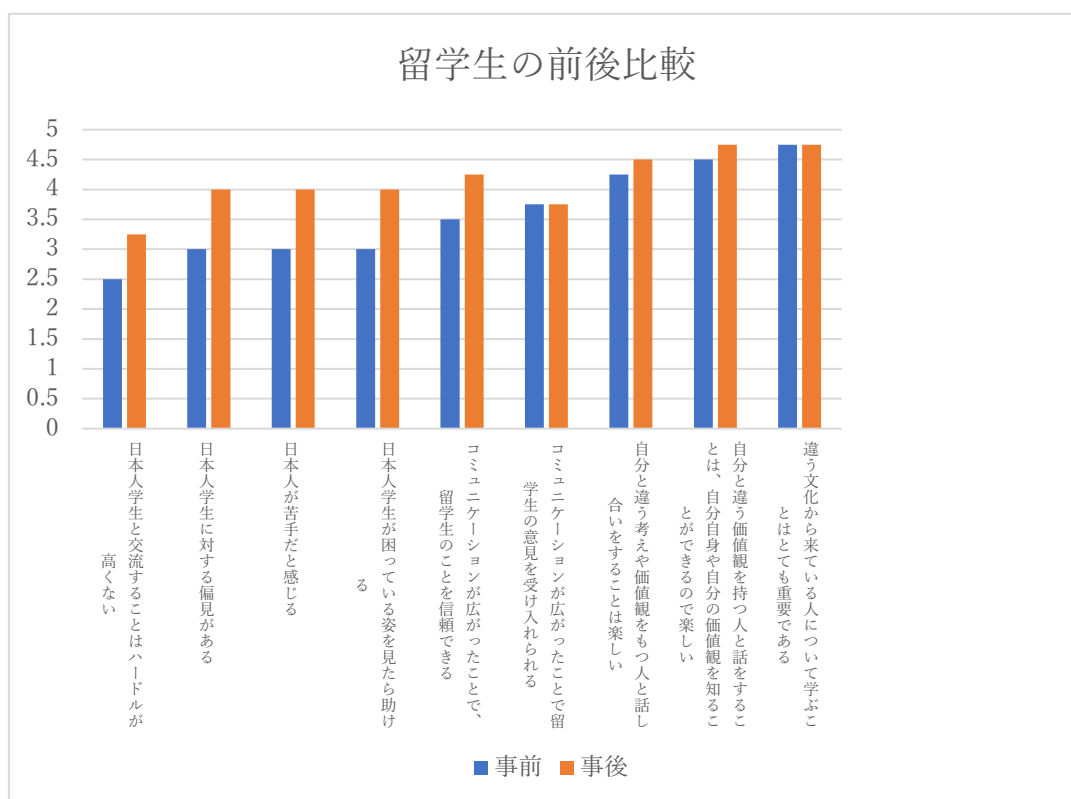


図 4-22 項目別多様性・寛容性の実験前後比較（留学生のみ）

表 4-3 t 検定の結果（全体）

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール

	留学生と交流する ことのハードルは 高くない	留学生と交流する ことのハードルは 高くない
平均	3.7	2.5
分散	0.677778	0.944444
観測数	10	10
ピアソン相関	-0.34719	
仮説平均との差異	0	
自由度	9	
t	2.571429	
P(T<=t) 片側	0.015059	
t 境界値 片側	1.833113	
P(T<=t) 両側	0.030117	
t 境界値 両側	2.262157	

表 4-4 t 検定の結果（日本人学生・留学生各結果）

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール

日本人

	留学生と 交流する ことはハ ードルが 高くない	留学生と 交流する ことはハ ードルが 高くない
平均	2.166667	3.666667
分散	0.966667	1.466667

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール

留学生

	日本人学 生と交流 すること はハード ルが高く ない	日本人学 生と交流 すること はハード ルが高く ない
平均	2.5	3.25
分散	0.333333	0.25

観測数	6	6	観測数	4	4
ピアソン相関	-0.44791		ピアソン相関	0.57735	
仮説平均との差			仮説平均との差		
異	0		異	0	
自由度	5		自由度	3	
t	-1.96396		t	-3	
P(T<=t) 片側	0.053373		P(T<=t) 片側	0.028834	
t 境界値 片側	2.015048		t 境界値 片側	2.353363	
P(T<=t) 両側	0.106746		P(T<=t) 両側	0.057669	
t 境界値 両側	2.570582		t 境界値 両側	3.182446	

表 4-5 t検定の結果（全体）

	留学生（日本人 学生）が困って いる姿を見たら 声をかける	留学生（日本人 学生）が困って いる姿を見たら 声をかける
平均	3.3	4.1
分散	0.677778	0.544444
観測数	10	10
ピアソン相関	-0.05487	
仮説平均との差異	0	
自由度	9	
t	-2.22834	
P(T<=t) 片側	0.02642	
t 境界値 片側	1.833113	
P(T<=t) 両側	0.052839	
t 境界値 両側	2.262157	

表 4-6 t 検定の結果（日本人学生・留学生各結果）

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール			t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール		
日本人			留学生		
	留学生が困っている姿を見たら声をかける	留学生が困っている姿を見たら助ける		日本人学生が困っていたら声をかける	日本人学生が困っていたら声をかける
平均	3.5	4.166667	平均	3	4
分散	0.7	0.566667	分散	0.666667	0.666667
観測数	6	6	観測数	4	4
ピアソン相関	-0.47633		ピアソン相関	0.5	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	5		自由度	3	
t	-1.19523		t	-2.44949	
P(T<=t) 片側	0.142795		P(T<=t) 片側	0.045861	
t 境界値 片側	2.015048		t 境界値 片側	2.353363	
P(T<=t) 両側	0.285591		P(T<=t) 両側	0.091721	
t 境界値 両側	2.570582		t 境界値 両側	3.182446	

表 4-7 t 検定結果（留学生のみ）

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール

留学生

	日本人学生 が苦手だと 感じる	日本人学生 が苦手だと 感じる
平均	3	4
分散	2	0.666667
観測数	4	4
ピアソン相関	0.866025	
仮説平均との差 異	0	
自由度	3	
t	-2.44949	
P(T<=t) 片側	0.045861	
t 境界値 片側	2.353363	
P(T<=t) 両側	0.091721	
t 境界値 両側	3.182446	

次に、比較実験として行った日本人同士の交流による結果を述べる。日本人同士での共感・コミュニケーションと多様性・寛容性（保守・リベラル）の関係について日本人学生と留学生の結果同様、散布図と相関係数を算出した（図 4-23, 図 4-24）。結果から、日本人同士の交流では、共感・コミュニケーションともに多様性・寛容性とは相関関係が確認されなかった。実験前後での多様性・寛容性の比較もおこない 11 項目中 6 項目で上昇が見られたが、残りの 5 項目では数値が下がるもしくは差異無しという結果になった。上昇した項目の 1 つである「リスクを取って新しい試みをする人が尊敬される」で t 検定を実施したところ、 $t(12)=1.95$, $p<.10$ となり有意な傾向にあると結果が得られた。その他の項目では有意差は確認されなかった。

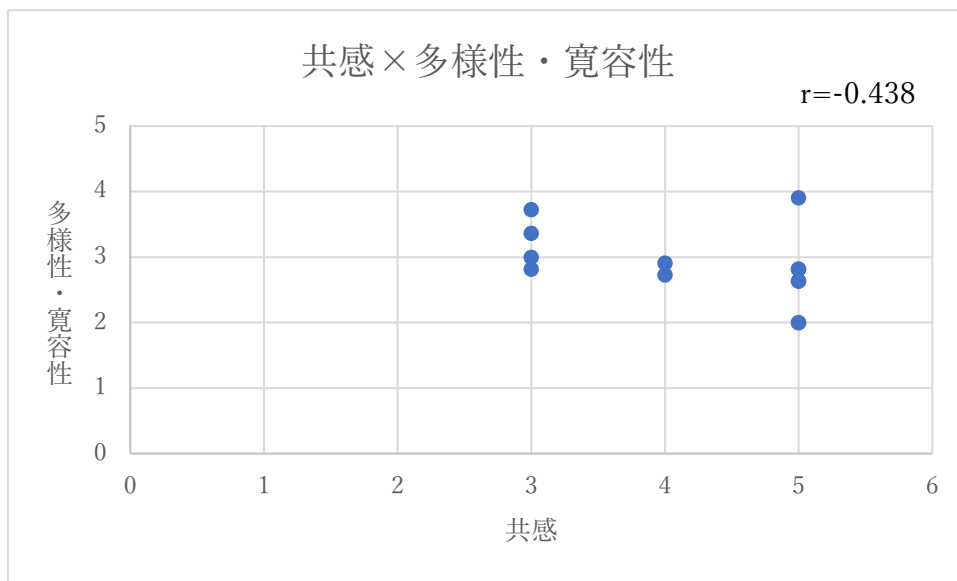


図 4-23 共感と多様性・寛容性の散布図（日本人同士の交流において）

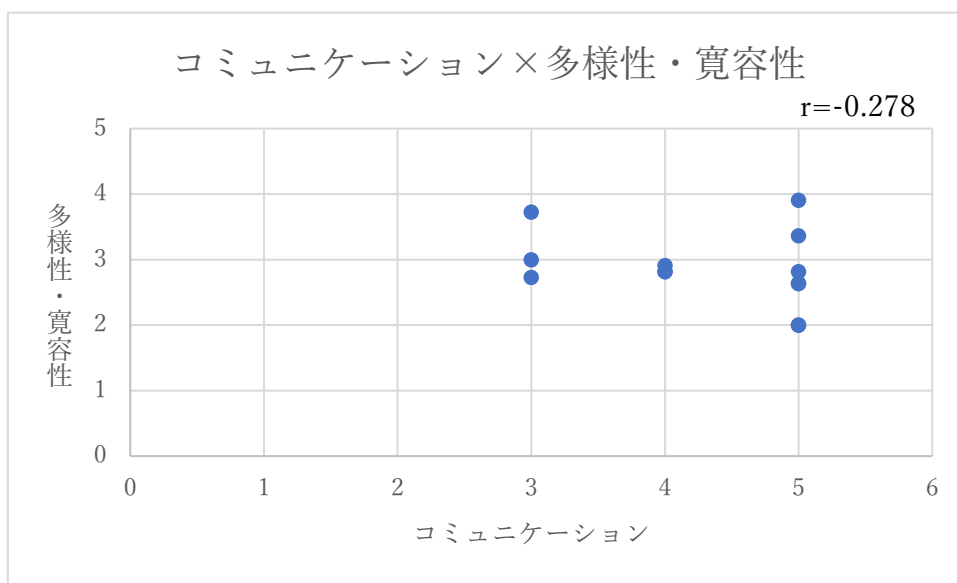


図 4-24 コミュニケーションと多様性・寛容性の散布図（日本人同士の交流において）

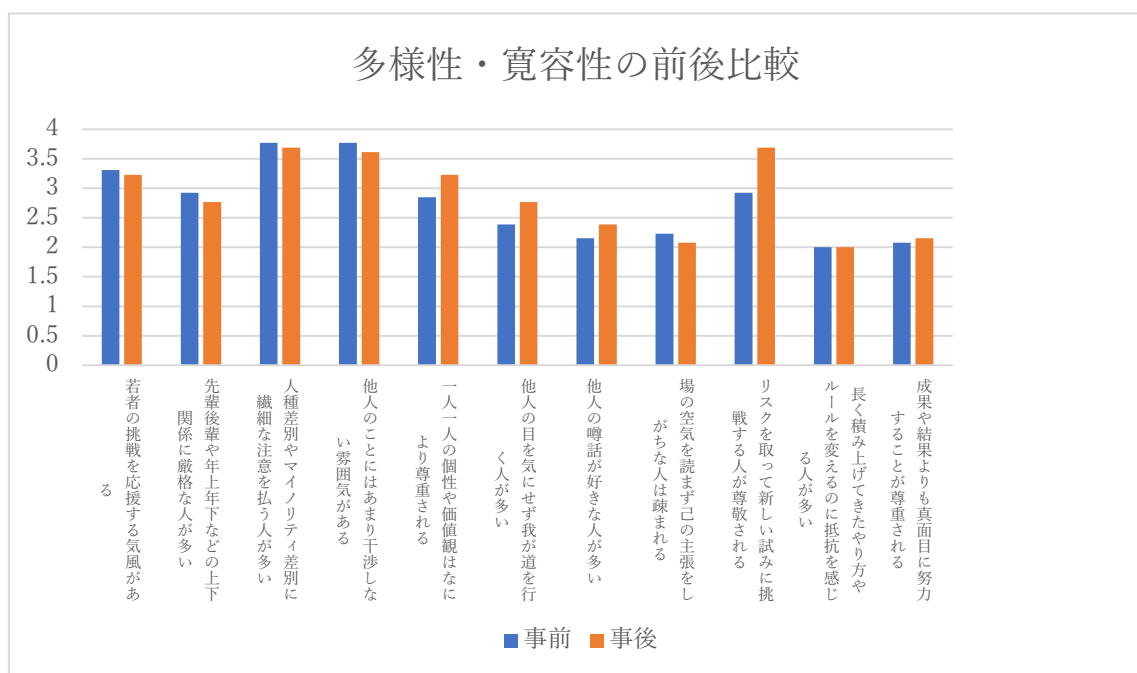


図 4-25 項目別多様性・寛容性の実験前後比較（日本人同士の交流において）

表 4-8 t 検定の結果

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール		
	リスクを取って新しい試みに挑戦する人が尊敬される（事前）	リスクを取って新しい試みに挑戦する人が尊敬される（事後）
平均	2.923077	3.692308
分散	1.076923	1.730769
観測数	13	13
ピアソン相関	0.286413	
仮説平均との差異	0	
自由度	12	
t	-1.94871	
P(T<=t)	0.037548	

片側		
t 境界値	1.782288	
片側		
P(T<=t)	0.075096	
両側		
t 境界値	2.178813	
両側		

これらの結果から、同じ文化背景を持つ日本人同士では共感・コミュニケーションと多様性・寛容性は相関関係がなく、日本人学生と留学生間においては共感・コミュニケーションが多様性・寛容性（異文化理解）に寄与していることから、第二段階の仮説は日本人学生と留学生との関係性においては検証されたといえる。この結果について考察すると、やはり異文化コミュニケーションの場合には、自分と違う文化について触れて、知ることによって多様性・寛容性への影響が認められる。多様性・寛容性の項目を前後比較した結果からも、相手に対する苦手意識や、交流へのハードルがさがり、今後は声をかけると変化が見られたことから、交流することによって相手とコミュニケーションをとって、共感することで自分と近い存在に感じられるようになり、不寛容さや排他性を軽減することにつながっていると考えられる。また、インタビュー結果からも介在者が間に入って交流することで、共通点も違いも見つかり、互いの文化について質問し合いやすい状態になり、より異文化理解が進んだのではないかと考えられる。

日本人同士では結果が得られなかった理由として、今回の実験における日本人同士の交流が筆者が属する大学院の研究室の現役生・研究員と OBOG であったため、似た趣向を持つ人も多く多様性・寛容性の向上にはつながらなかった可能性も考えられる。しかし、同じ文化背景を持つ日本人同士でも、出身や年齢や職業などが異なる人と交流することで、「リスクを取って新しい試みに挑戦する人が尊敬される」項目に実験前後で 10%の有意傾向がみられるなどこちらも少しは多様性・寛容性の向上に寄与していることが示唆される。

日本人同士の多様性・寛容性尺度では実験前後で低下した項目や、変化がない項目が多かった点や、今回の多様性・寛容性尺度の項目が日本人学生・留学生間と日本人同士で異なっており、一概に比較できない部分がある点を踏まえ今後は多様性・寛容性の尺度の開発も含めて改善の余地があると考えられる。さらに、日本人同士の交流を地域コミュニティに準じ

て、若い世代と高齢者層や、定住者と移住者など、異なる考えをもっていることが示唆されるグループ間にて実験することで日本人同士の異文化交流における共感・コミュニケーションと多様性・寛容性の関係性を確認する必要がある。また、日本人学生と留学生の交流における数値に対しても、被験者数が少なく、特に留学生は 4 人のため相関係数などがかなり高い値を示しており、今後被験者を増やして再度検証する必要性もあると考える。

4.3.2 多様性・寛容性と幸福度の結果と考察

次に、日本人学生と留学生の交流実験における多様性・寛容性と幸福度の関係性を確かめるためにそれぞれの平均点を散布図に示し、相関係数を算出した（表 4-9）。図から、ポジティブ感情と多様性・寛容性では正の相関がみられ、ネガティブ感情と多様性・寛容性では負の相関がみられたことから、多様性・寛容性の向上が感情的幸福の向上に寄与していると示された。また、幸せの 4 因子と多様性・寛容性でも正の相関がみられ、多様性・寛容性の向上が幸福度の向上に寄与していることも分かった。心的要因を示す 4 因子ごとに関係性を確認すると、「ありがとう因子」、「なんとかなる因子」、「ありのままに因子」の 3 つの因子で正の相関がみられ、多様性・寛容性の向上が 4 因子中 3 因子の向上に寄与していると示された。

日本人学生と留学生に分けて相関係数を算出したところ、ポジティブ感情は日本人学生のほうがより強い相関を示し、ネガティブ感情と、幸せの 4 因子は留学生のほうがより強い相関を示した。4 因子を因子ごとに確認すると、留学生が「ありがとう因子」と「何とかなる因子」において、かなり高い相関を示していることが分かった。また、「やってみよう因子」は日本人学生では多様性・寛容性と相関関係が確認されず、留学生に弱い正の相関が確認された。しかし、他の項目については強い相関が見られ、これらの結果より日本人学生と留学生の交流において、多様性・寛容性の向上は幸福度の向上に寄与するという仮説（第三段階）は支持された。

表 4-9 多様性・寛容性と幸福度の相関係数表

相関係数		ポジティブ感情	ネガティブ感情	4 因子	やってみよう	ありがとう	なんとかなる	ありのままに
	全体	0.690	-0.567	0.529	-0.049	0.698	0.639	0.445
	日本人学生	0.732	-0.555	0.416	-0.138	0.567	0.538	0.439
	留学生	0.594	-0.705	0.819	0.368	0.998	0.879	0.492

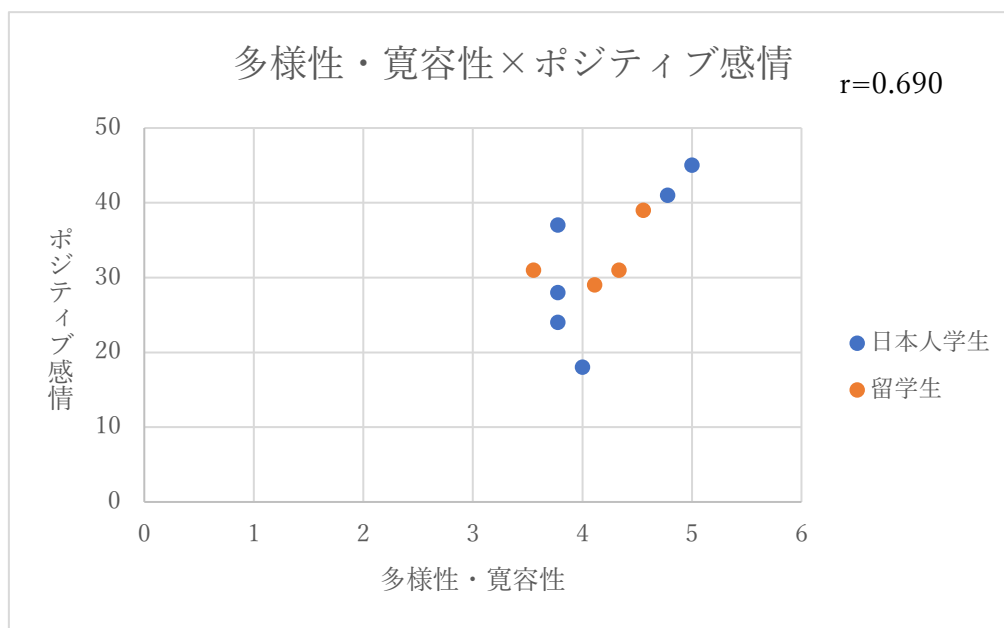


図 4-26 多様性・寛容性とポジティブ感情の散布図

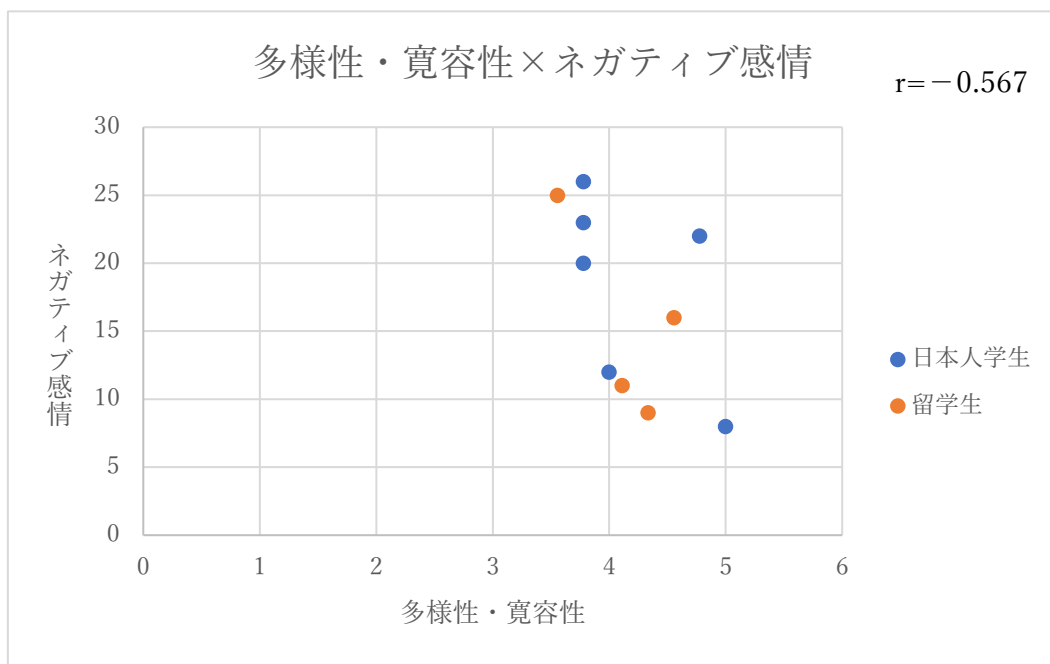


図 4-27 多様性・寛容性とネガティブ感情の散布図

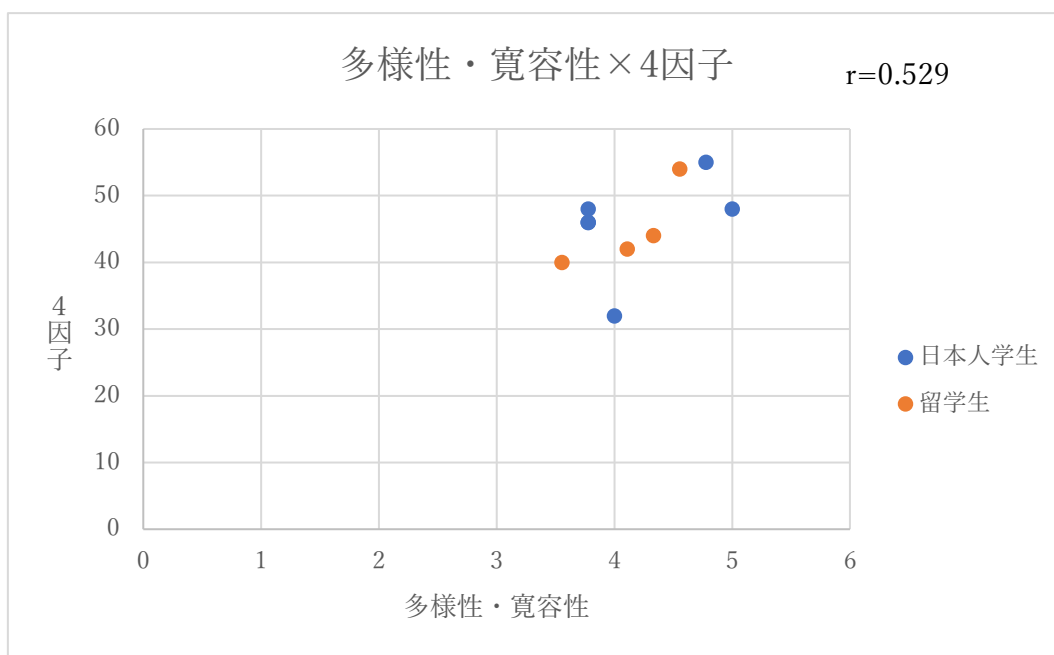


図 4-28 多様性・寛容性と 4 因子の散布図

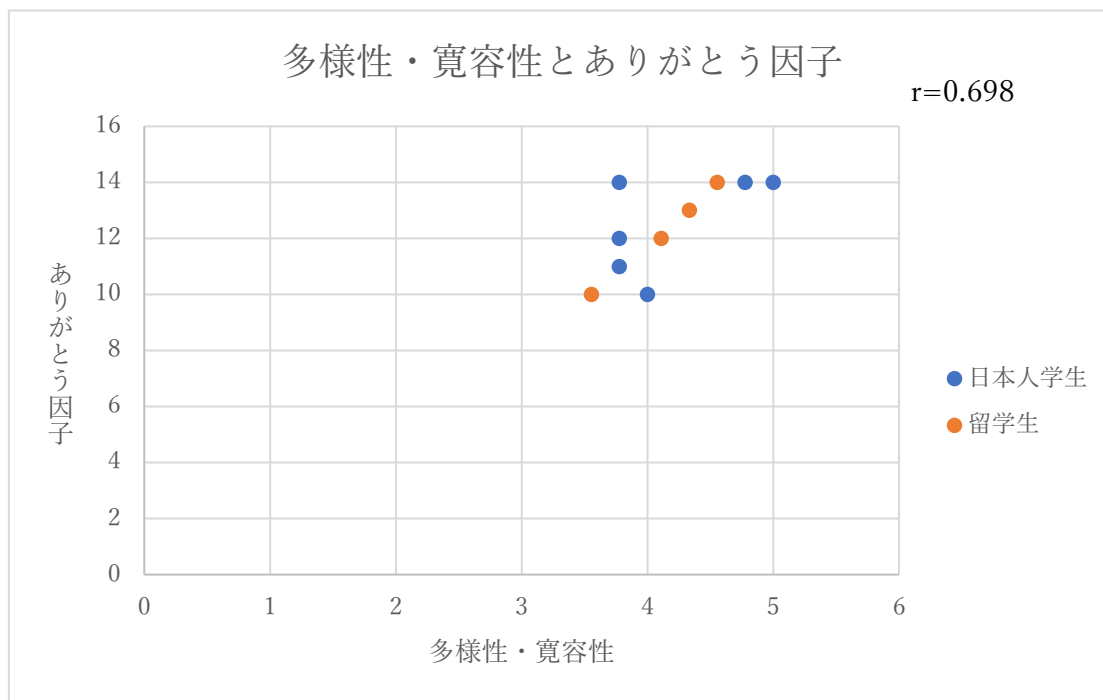


図 4-29 多様性・寛容性とありがとう因子の散布図

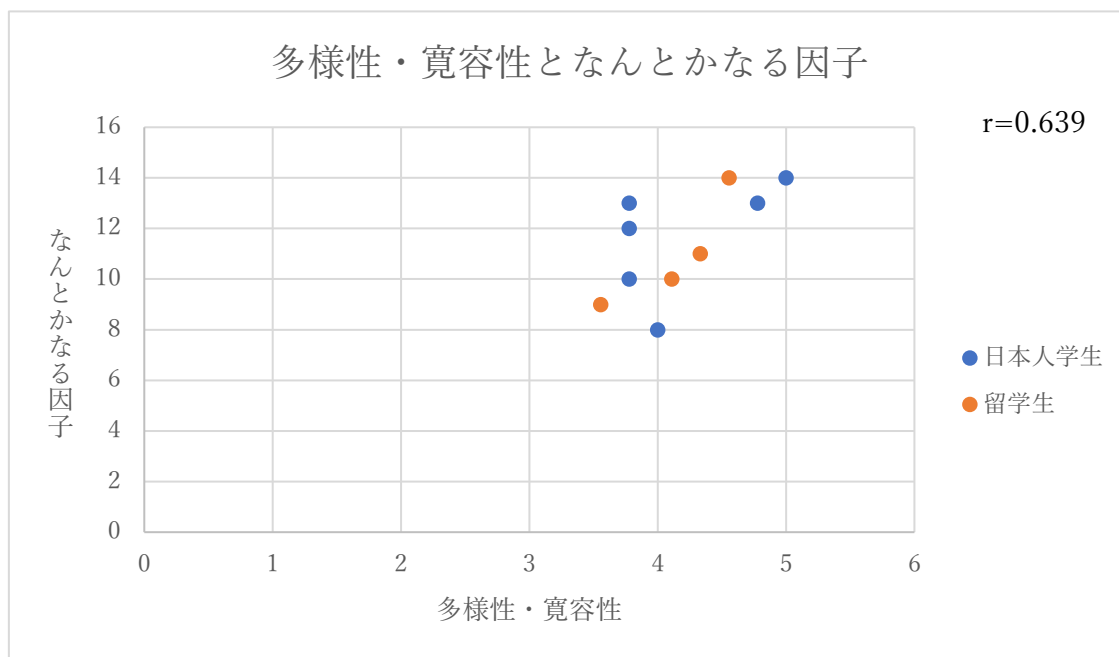


図 4-30 多様性・寛容性となんとかなる因子の散布図

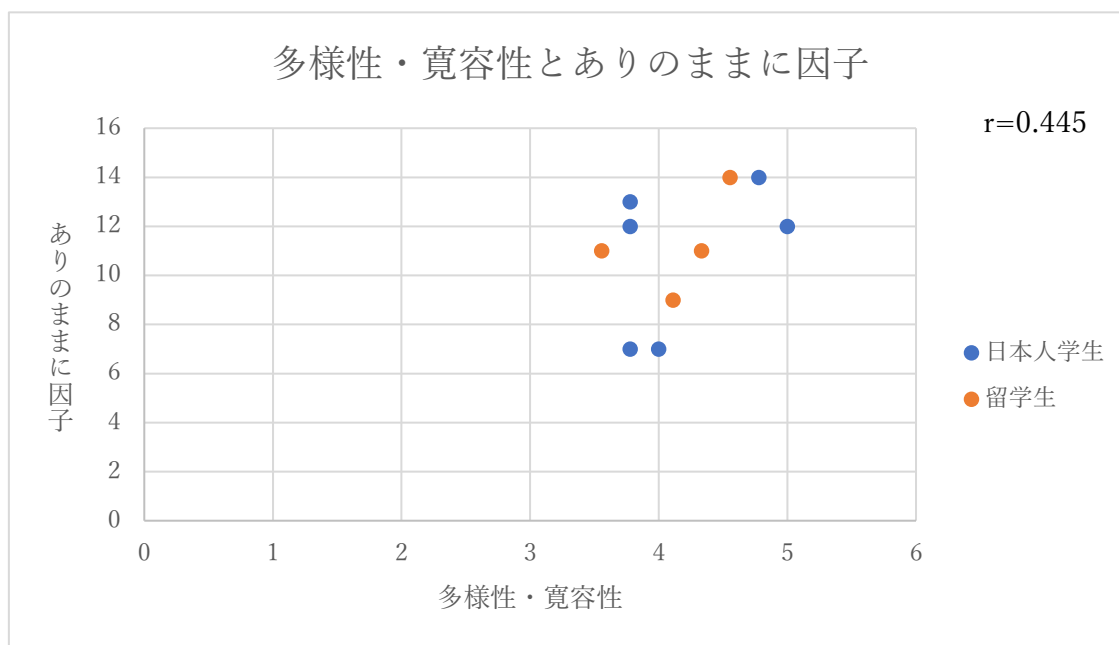


図 4-31 多様性・寛容性とありのまに因子の散布図

次に比較実験として行った日本人同士の交流実験における結果を表に示す(表 4-10)。表より、ポジティブ感情は-.632, ネガティブ感情は-.251 となり感情的幸福は多様性・寛容性(保守・リベラル)と負の相関を示した。幸せの 4 因子も.085 となり、多様性・寛容性と相関関係にないという結果が得られた。幸せの 4 因子を因子ごとに結果を確認すると、「ありがとう因子」が.244, 「なんとかなる因子」が.340 と弱い正の相関を示した。よって、日本人同士の交流においては、多様性・寛容性と幸福度の関係は確認されず、仮説(第三段階)は支持されなかった。

表 4-10 多様性・寛容性と幸福度の相関係数表(日本人同士の交流において)

	ポジティブ感情	ネガティブ感情	4 因子	やってみよう	ありがとう	なんとかなる	ありのまに
多様性・寛容性	-0.632	-0.251	0.085	-0.064	0.244	0.340	-0.040

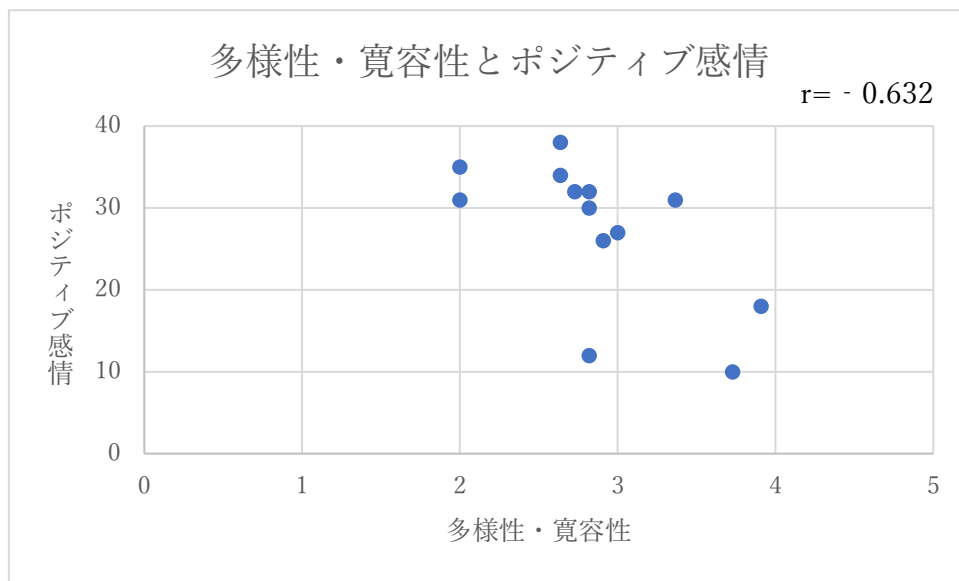


図 4-32 多様性・寛容性とポジティブ感情の散布図（日本人同士の交流において）

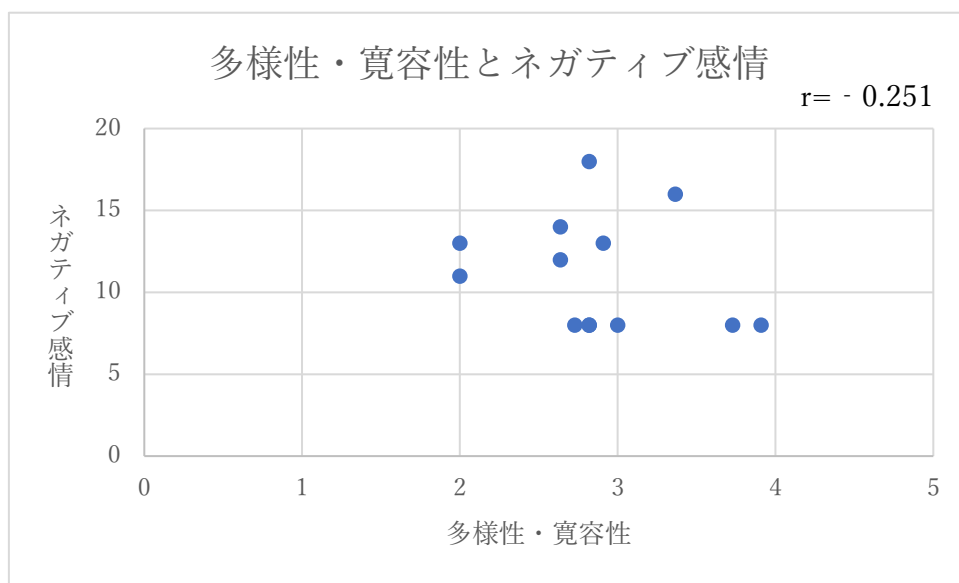


図 4-33 多様性・寛容性とネガティブ感情の散布図（日本人同士の交流において）

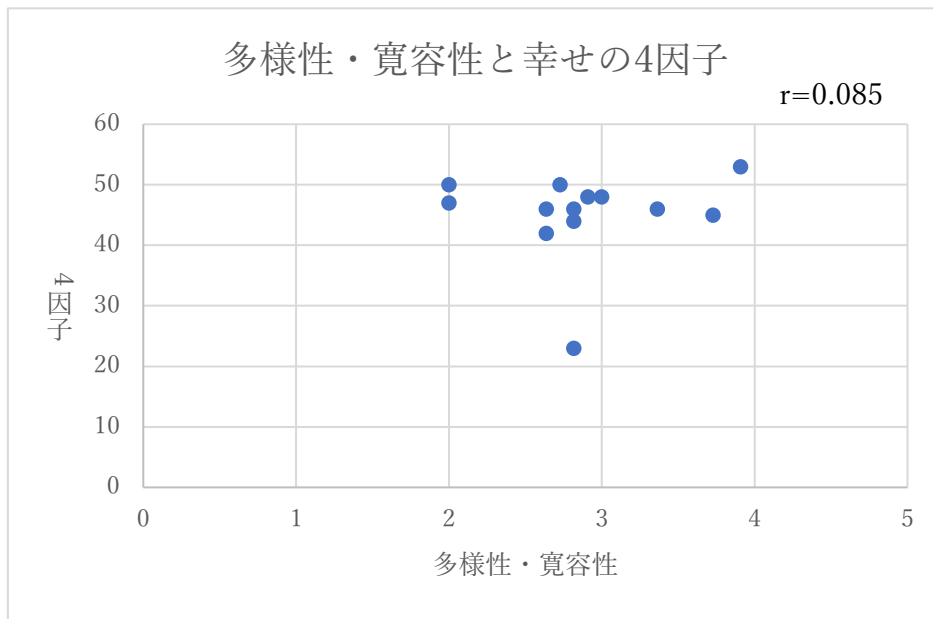


図 4-34 多様性・寛容性と幸せの4因子の散布図（日本人同士の交流において）

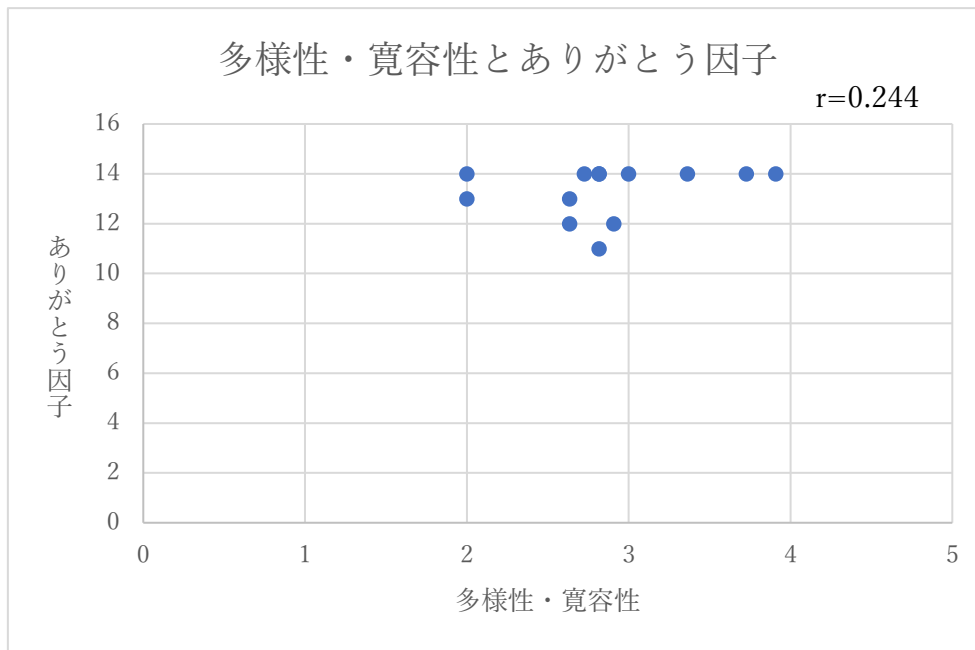


図 4-35 多様性・寛容性とありがとう因子の散布図（日本人同士の交流において）

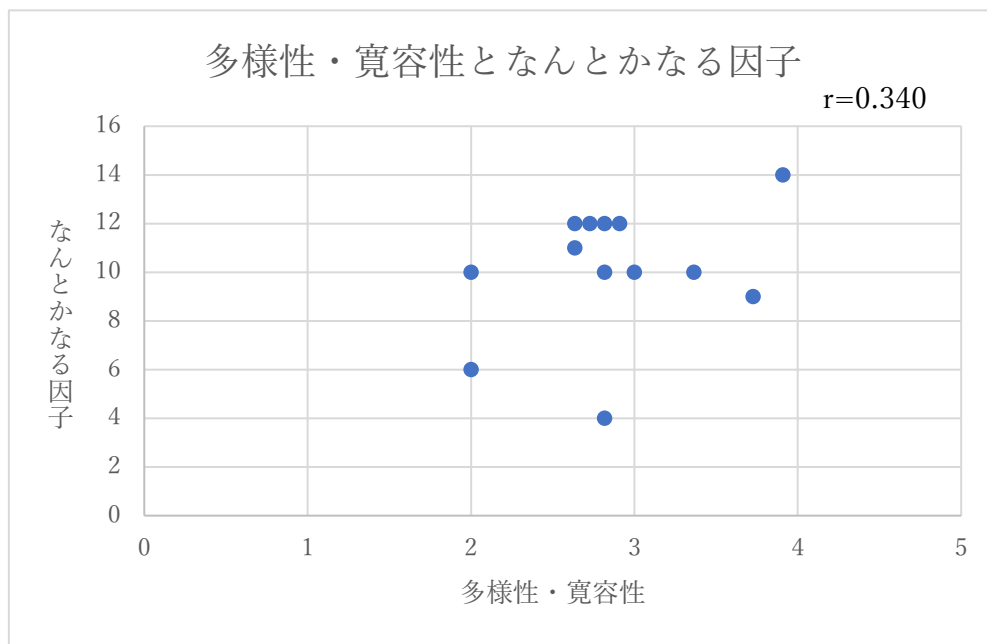


図 4-36 多様性・寛容性となんとかなる因子の散布図（日本人同士の交流において）

これらの結果から考察すると、日本人学生と留学生の交流においては、多様性・寛容性（異文化理解）が向上することで相手への理解や考えが深まり、興味が増幅されワクワクといった感情が向上する一方、初対面の相手に対する怯えなどが軽減されることでポジティブ感情の向上とネガティブ感情の低下が起こり、感情的幸福が向上したのではないかと考えられる。また、互いに交流することで今まで当たり前だと思っていたことが、他の文化では享受し得ないことがあると分かるなど、多様性・寛容性の向上により視野が広がったことで、自分の現状に対する感謝や、そのことに気づかせてくれた人との出会いにも感謝の気持ちがうまれたのではないかと考えられる。また、視野の広がりや、自分の課題もなんとかなると思うことができるようになったり、自分らしさを認識したりすることにもつながったのではないかと考えられ、多様性・寛容性の向上が 4 因子の向上にも寄与していると示唆される。

日本人学生と留学生を比較すると、日本人学生も留学生も感情的幸福に強い相関を示しているが、日本人学生はポジティブ感情、留学生はネガティブ感情に強い相関を示し、相関が見られる感情に違いがあった。日本人学生のほうが多様性・寛容性とポジティブ感情の関係が強いことが示され、実験後のインタビュー結果も踏まえて考察すると、交流から自分の知らなかった文化を知ることができたり、違うと思っていた文化や考え方に意外な共通点が見つかったりと、発見が多くあったことが感情にプラスの刺激となり、実験後の興奮した

様子や楽しかったという声が聞こえたようにポジティブ感情の増幅に寄与したと考えられる。逆にネガティブ感情と多様性・寛容性の関係は留学生のほうが日本人学生に比べて強いと示されたが、これは留学生がもともと日本人学生と関わる機会が少なく、言語の壁もあり交流に対し大きな不安を覚えていたが、実際に交流してみると介在者が間に入って話すことで、自分のことも伝えてくれて相手のことも伝えてくれるので、交流のハードルが下がり、言葉が伝わるか不安なのに積極的に会話をしなければいけないというプレッシャーといったことが軽減されたので、楽しいといったポジティブ感情の増幅よりも、ネガティブ感情の低下とより強い負の相関を示したのではないかと考えられる。

比較実験で行った日本人同士の交流では、多様性・寛容性（保守・リベラル）とネガティブ感情は弱い負の相関を示し、これは保守的な考えが弱まると保守せねばならないといった不安や恐れが弱まることにもつながるのではないかと考えられる。幸せの4因子の因子ごとの結果より、「ありがとう因子」と「なんとかなる因子」は弱い正の相関が見られたが、これらは、リベラルな考えで多様性・寛容性があがると、いろいろな人とのつながりを感じて感謝を感じられ、自由な発想で課題に対しても楽観的に前向きに捉えることができるようになるのではないかと考えられる。ただし、今回は多様性・寛容性と幸福度の弱い関係しか認められなかったが、そもそも多様性・寛容性の向上が見られなかったことも要因として挙げられる。また、同じ日本人同士でもさらに同じ研究室に所属している現役・研究員とOBOGであったことから、多様性・寛容性と幸福度の関係は見られなかった可能性もある。

以上から、日本人学生と留学生の交流における異文化理解としての多様性・寛容性と幸福度には正の相関関係が確認され多様性・寛容性の向上が幸福度の向上にも寄与しているとする仮説（第三段階）は支持された。

次に、幸福度の実験前後の変化の結果を述べる。日本人学生と留学生との交流において、全体の結果を示す（図 4-37）。図からポジティブ感情の向上、ネガティブ感情の低下、幸せの4因子の向上が分かる。幸せの4因子をそれぞれ因子別に分けて前後を比較した図（図 4-38）からも、すべての因子において向上している。t検定を行った結果、幸せの4因子は有意差が認められた（ $t(9)=2.43, p<.05$ ）。因子別に分けると「なんとかなる因子」は有意差が認められ（ $t(9)=2.54, p<.05$ ）、と「ありがとう因子」で10%有意傾向（ $t(9)=2.08, p<.10$ ）が確認できた。これらの結果より、日本人学生と留学生の交流において幸福度の向上が認められた。

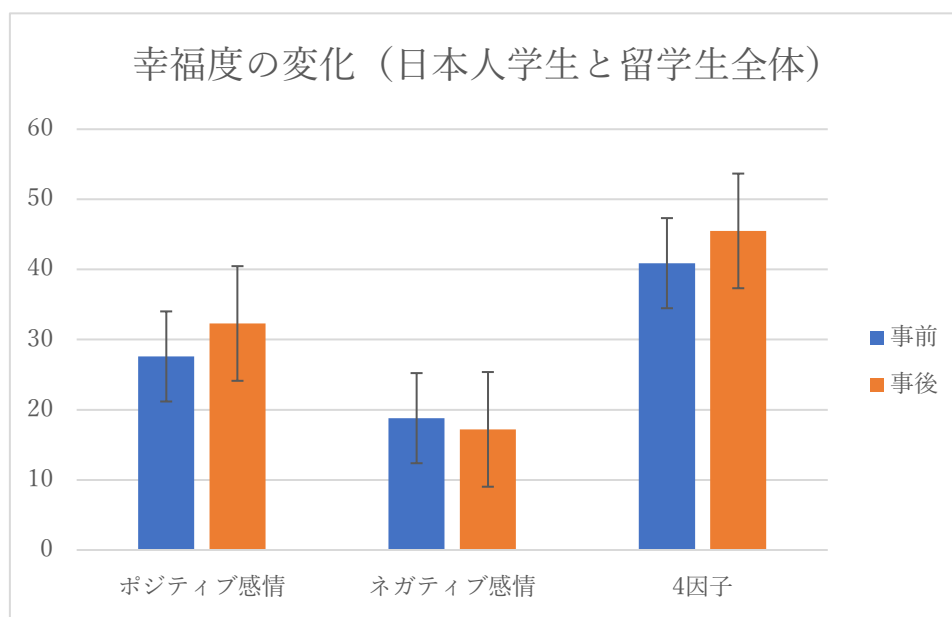


図 4-37 幸福度の前後変化（全体）

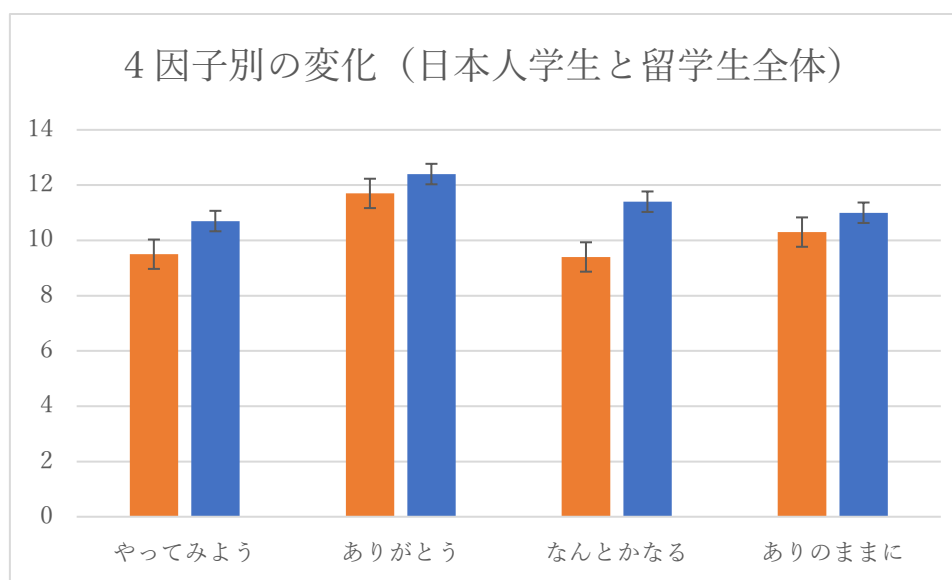


図 4-38 幸せの 4 因子別の前後変化（全体）

表 4-11 ポジティブ感情の t 検定結果

t-検定: 一对の標

本による 全体

平均の検定ツール

	ポジティブ感情	ポジティブ感情
平均	27.6	32.3
分散	33.37777778	67.78888889
観測数	10	10
ピアソン相関	-0.139685301	
仮説平均との差異	0	
自由度	9	
t	-1.389246845	
P(T<=t) 片側	0.09908303	
t 境界値 片側	1.833112933	
P(T<=t) 両側	0.198166061	
t 境界値 両側	2.262157163	

表 4-12 ネガティブ感情の t 検定結果

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール

	ネガティブ感情	ネガティブ感情
平均	18.8	17.2
分散	35.28888889	46.84444444
観測数	10	10
ピアソン相関	0.113138338	
仮説平均との差異	0	
自由度	9	
t	0.592457158	

P(T<=t) 片側	0.284064526
t 境界値 片側	1.833112933
P(T<=t) 両側	0.568129051
t 境界値 両側	2.262157163

表 4-13 幸せの4因子のt検定結果

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール

	4 因子得点	4 因子得点
平均	40.9	45.5
分散	26.1	44.72222222
観測数	10	10
ピアソン相関	0.515471687	
仮説平均との差異	0	
自由度	9	
t	-2.437995124	
P(T<=t) 片側	0.018743857	
t 境界値 片側	1.833112933	
P(T<=t) 両側	0.037487715	
t 境界値 両側	2.262157163	

表 4-14 幸せの 4 因子別の t 検定結果

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール			t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール		
	やってみよう	やってみよう		ありがとう	ありがとう
平均	9.5	10.7	平均	11.7	12.4
分散	2.944444444	5.566666667	分散	2.9	2.711111111
観測数	10	10	観測数	10	10
ピアソン相関	0.233279795		ピアソン相関	0.800453675	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	9		自由度	9	
t	-1.474617457		t	-2.089578099	
P(T<=t) 片側	0.087207795		P(T<=t) 片側	0.03311432	
t 境界値 片側	1.833112933		t 境界値 片側	1.833112933	
P(T<=t) 両側	0.17441559		P(T<=t) 両側	0.066228641	
t 境界値 両側	2.262157163		t 境界値 両側	2.262157163	
t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール			t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール		
	なんとかなる	なんとかなる		ありのままだ	ありのままだ
平均	9.4	11.4	平均	10.3	11
分散	1.6	4.488888889	分散	5.788888889	6.666666667
観測数	10	10	観測数	10	10
ピアソン相関	-0.0248759		ピアソン相関	0.429256376	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	9		自由度	9	
t	-2.535462764		t	-0.829450131	
P(T<=t) 片側	0.015973866		P(T<=t) 片側	0.214150174	
t 境界値 片側	1.833112933		t 境界値 片側	1.833112933	
P(T<=t) 両側	0.031947733		P(T<=t) 両側	0.428300348	
t 境界値 両側	2.262157163		t 境界値 両側	2.262157163	

次に、日本人学生と留学生に分けて幸福度の前後比較を行う。日本人学生と留学生で比較すると、どちらの学生もポジティブ感情と 4 因子が実験後に向上していることが分かる。ネガティブ感情は留学生のみ減少に転じており、日本人学生は変化が小さかった。また、ポジティブ感情とネガティブ感情ともに留学生のほうが日本人学生より変化が大きいが、幸せの 4 因子は日本人学生のほうが留学生より変化が大きかった。それぞれについて t 検定を実施したところ、日本人学生では幸せの 4 因子 ($t(5)=2.45, p<.10$) と、その要素の中でも「ありがとう因子」($t(5)=2.24, p<.10$) と「なんとかなる因子」($t(5)=2.33, p<.10$) にそれぞれ有意な傾向が見られた。留学生では、ポジティブ感情に有意差 ($t(3)=5, p<.05$) が認められた。

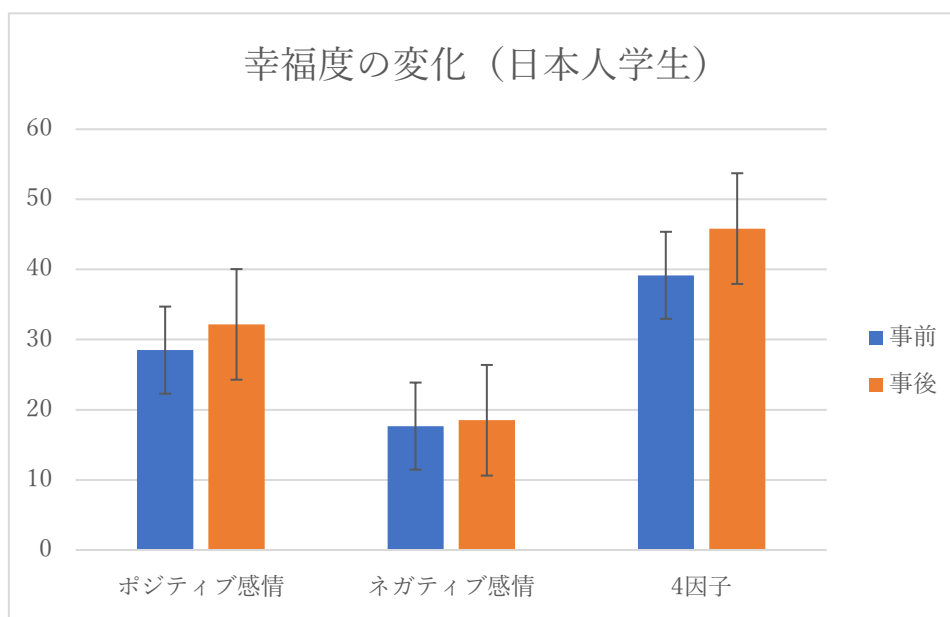


図 4-39 幸福度の前後変化（日本人学生のみ）

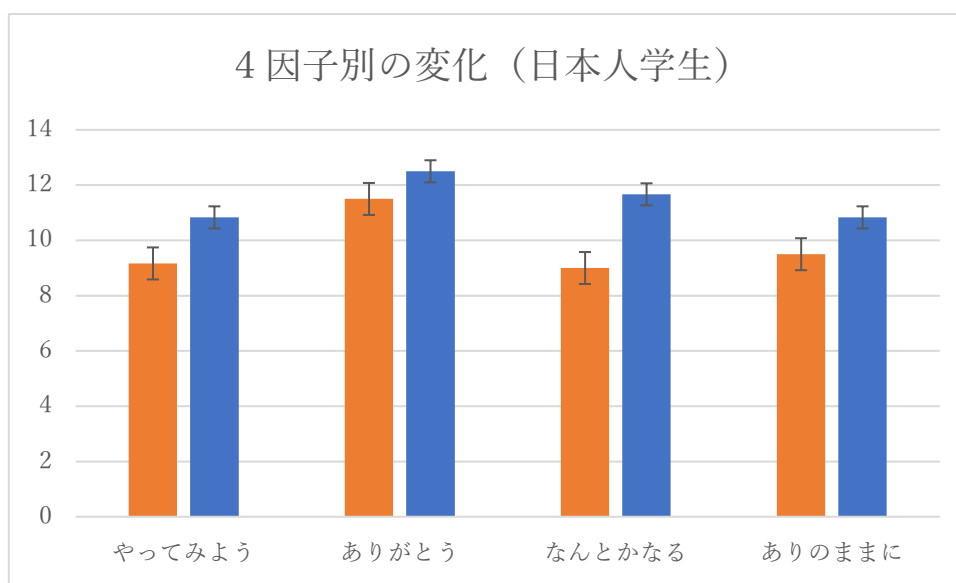


図 4-40 幸せの 4 因子別の前後変化（日本人学生のみ）

表 4-15 幸せの4因子のt検定結果（日本人学生のみ）

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール

	4 因子得点	4 因子得点
平均	39.16666667	45.83333333
分散	18.16666667	56.96666667
観測数	6	6
ピアソン相関	0.479746382	
仮説平均との差異	0	
自由度	5	
t	-2.454403468	
P(T<=t) 片側	0.028811784	
t 境界値 片側	2.015048373	
P(T<=t) 両側	0.057623567	
t 境界値 両側	2.570581836	

表 4-16 ありがとう因子のt検定結果（日本人学生のみ）

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール

	ありがとう	ありがとう
平均	11.5	12.5
分散	2.3	3.1
観測数	6	6
ピアソン相関	0.786456181	
仮説平均との差異	0	
自由度	5	
t	-2.236067977	
P(T<=t) 片側	0.037793409	
t 境界値 片側	2.015048373	
P(T<=t) 両側	0.075586818	

t 境界値 両側

2.570581836

表 4-17 なんとかなる因子の t 検定結果（日本人学生のみ）

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール

	なんとかなる	なんとかなる
平均	9	11.66666667
分散	1.6	5.066666667
観測数	6	6
ピアソン相関	-0.210731808	
仮説平均との差異	0	
自由度	5	
t	-2.328890039	
P(T<=t) 片側	0.033652105	
t 境界値 片側	2.015048373	
P(T<=t) 両側	0.06730421	
t 境界値 両側	2.570581836	

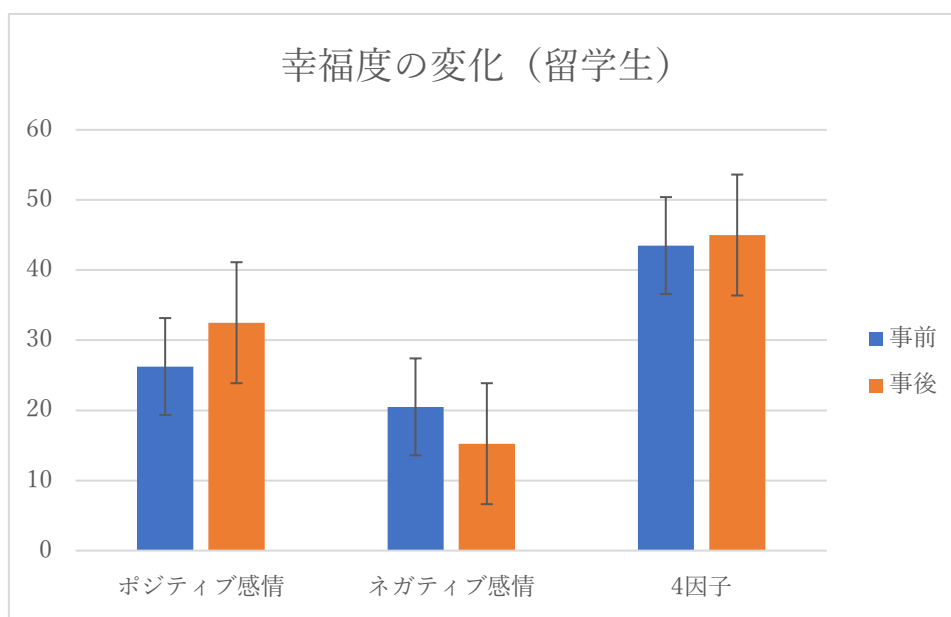


図 4-41 幸福度の前後変化（留学生のみ）

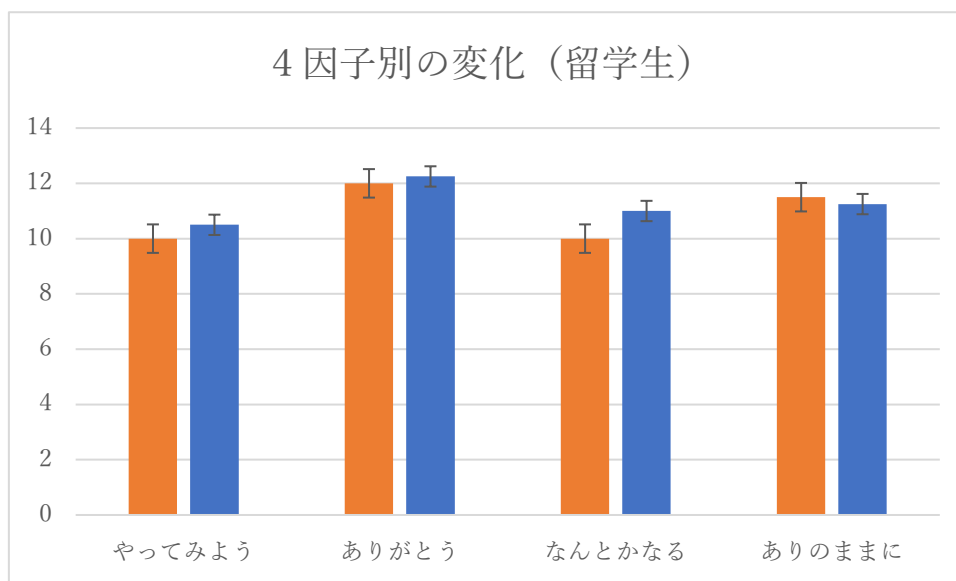


図 4-42 幸せの 4 因子別の前後変化（留学生のみ）

表 4-18 ポジティブ感情の t 検定結果（留学生のみ）

t-検定: 一对の標

本による 留学生

平均の検定ツール

	ポジティブ感情	ポジティブ感情
平均	26.25	32.5
分散	21.58333333	19.66666667
観測数	4	4
ピアソン相関	0.849402258	
仮説平均との差異	0	
自由度	3	
t	-5	
P(T<=t) 片側	0.007696219	
t 境界値 片側	2.353363435	
P(T<=t) 両側	0.015392438	
t 境界値 両側	3.182446305	

次に、日本人同士の交流実験における幸福度の事前事後の変化を示す。日本人同士の交流でも、日本人学生と留学生の交流と同様にポジティブ感情、幸せの4因子の向上と、ネガティブ感情の軽減がみられた。幸せの4因子を因子別に確認すると、「ありがとう因子」、「なんとかなる因子」「ありのままに因子」の3因子で実験前後に向上が見られた。しかし結果に対しt検定を実施したところ、有意差は見られなかった。

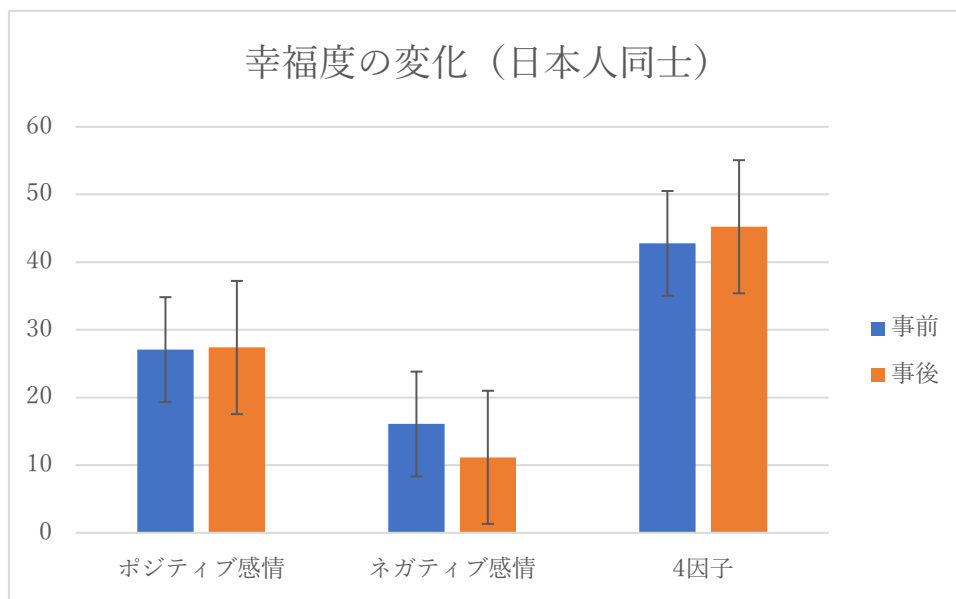


図 4-43 幸福度の前後変化（日本人同士の交流において）

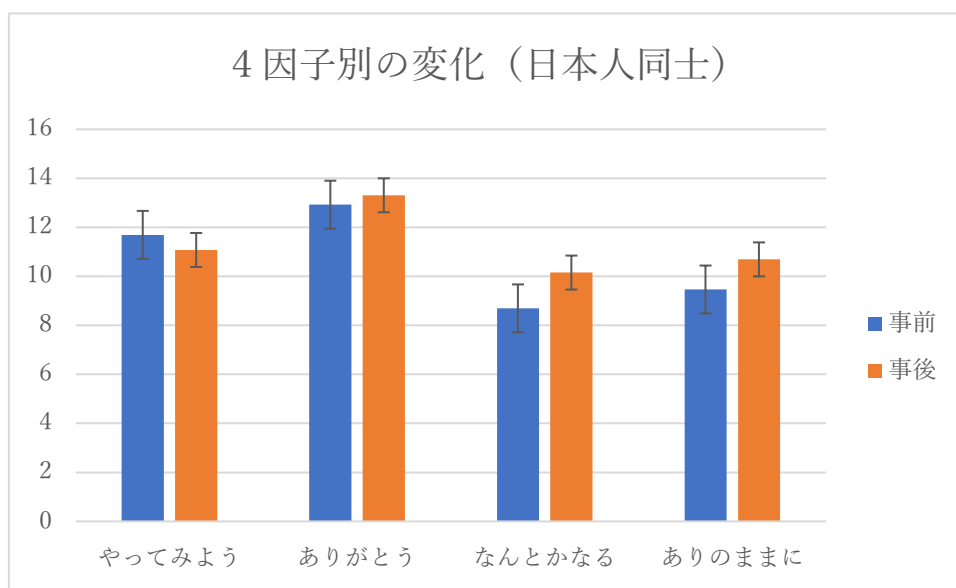


図 4-44 幸せの4因子別の前後変化（日本人同士の交流において）

これらの結果から幸福度の前後比較について考察すると、日本人学生と留学生の交流における幸福度の前後変化を見ると、留学生は感情的幸福の変化が大きく、日本人は幸せの4因子の変化が大きいことがわかる。この結果から、交流することが留学生には感情への影響を与え、日本人学生には考え方に影響を与えていることが示唆された。しかし、今回は日本語でのアンケートを実施したため留学生が幸せの4因子の項目の意味をきちんと理解できていたかはわからず結果に影響した可能性も考えられるため今後の検証においては留学生に対し英語版でのアンケート作成が検討される。

幸福度の前後変化のみを確認すると、日本人学生と留学生の交流も日本人同士の交流も実験後に幸福度が向上していることが確認された。日本人学生と留学生は多様性・寛容性との関係が確認されたが、日本人同士の交流においては多様性・寛容性には関係が認められなかったことから、日本人同士の交流の幸福度の向上には多様性・寛容性の向上ではない要因があることが示唆され、その要因が日本人同士の交流だけでなく、日本人学生と留学生の幸福度の向上にも寄与しているのか検証するなど、今後研究の余地があると考えられる。また、日本人同士の幸福度の向上には有意差も確認できなかったことから、日本人同士の関係性を変えるなど被験者数を増やして実験していく必要性もある。

4.4 全体の考察

4.4.1 仮説の検証

4.2, 4.3 に示された結果より筆者が仮説としていた、ママ特性が共感・コミュニケーションに寄与し（第一段階）、さらに共感・コミュニケーションが多様性・寛容性の向上に寄与し（第二段階）、多様性・寛容性の向上が幸福度の向上にもつながる（第三段階）ことが、日本人学生と留学生におけるコミュニケーションの場で検証された。しかし、日本人同士のコミュニケーションの場では多様性・寛容性の向上が見られなかったことから、第二段階と第三段階の仮説は支持されなかった。また、日本人学生と留学生のコミュニケーションの場では実験前後で幸福度が有意に向上したことからママ特性を持つ介在者がいる場で交流することが被介在者の幸福度を高めることが認められた。日本人同士の交流では有意差は認められなかったが幸福度の向上の傾向がみられたため、多様性・寛容性の向上は介さないが

介在者が存在するコミュニケーションの場では被介在者の幸福度が向上する可能性がある。

4.4.2 介在者ごとの結果と考察

6名の介在者ごとに結果を見てみると、ママ特性の得点にばらつきが見られたが共通して「笑顔」「口調」「話しかけやすさ」「飾らない」「聞き上手」には得点があった。Iさん、Mさん、Bさんはグラフの形が似ており、特性が似ているとされる。3名の共通点としては、他3名の介在者に比べて平均年齢が高いことや専門性を持っていることが挙げられ、話題の幅が深く広いため、あらゆる話題に対しての介在が可能だったのではないかと考えられる。被介在者の結果を介在者ごとに比較すると、共感とコミュニケーションはHさんとBさんはコミュニケーションのほうが共感より得点が高く、SさんとUさんは共感のほうがコミュニケーションより得点が高かったが、MさんとIさんは得点と同じという結果になった。実験の様子から、HさんとBさんは自分から話題を提供することが多く、SさんとUさんは被介在者の話にうなづく場面が多く見られ、MさんとIさんはどちらの行動も行っていたため、話題の提供がコミュニケーションに寄与し、話題に対するうなづきが共感に寄与していることが示唆される。多様性・寛容性に関しては、6名とも大きな変化は見られなかった。幸福度に関しては、MさんとSさんはポジティブ感情が向上しており、t検定の結果、Sさんの結果については有意な傾向が見られた。 $(t=(1), 1.16, p<.10)$ Hさんはネガティブ感情が大きく減少しているが、t検定の結果から有意差は見られなかった。幸せの4因子は6名中4名で向上が確認された。因子ごとに確認すると、Mさんだけはすべての因子において向上が見られた。なんとかなる因子とありのままに因子の向上が大きいことから、Mさんはママ特性のバランスが良く、特に安心感が強いいためMさんが被介在者を安心させることで前向きに、マイペースに進むことができるようになったのではないかと考える。

ママ特性の得点結果について、HさんとSさんは得点が0の項目もあり、ママ特性としては極端なグラフとなっているが、共感・コミュニケーションの得点や多様性・寛容性の前後変化、幸福度の変化なども確認すると、他の4名と比較してSさんはポジティブ感情の前後変化が大きく、Hさんはネガティブ感情の低下が大きいなど、ママ特性が極端であっても効果があると示唆される。

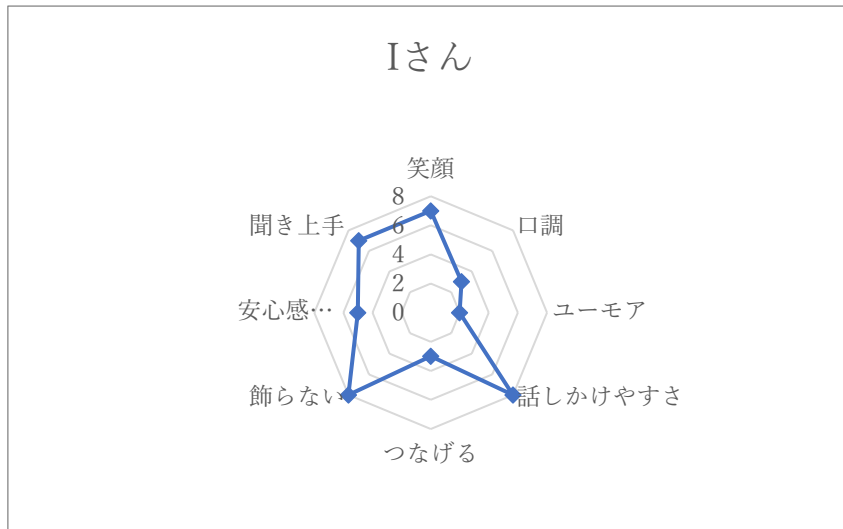


図 4-45 Iさんのママ特性レーダーチャート図



図 4-46 Mさんのママ特性レーダーチャート図

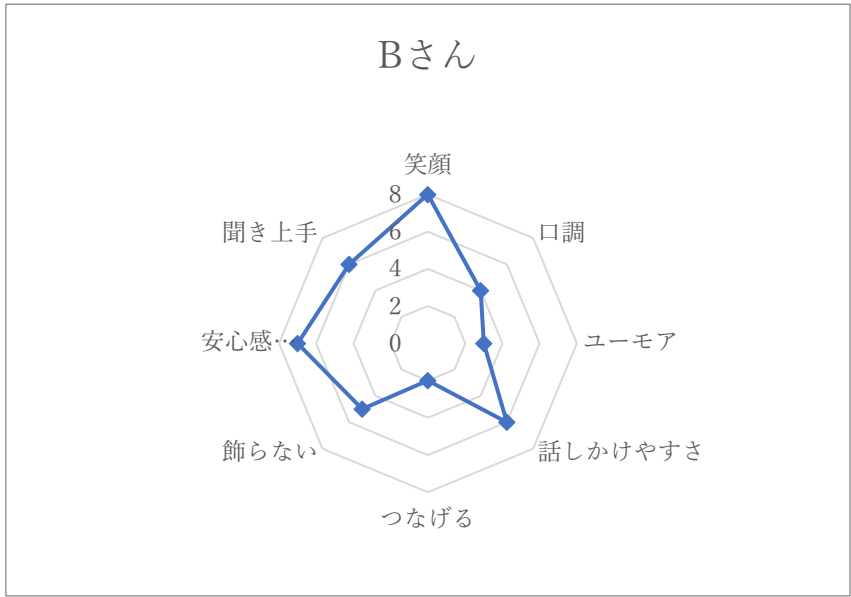


図 4-47 Bさんのママ特性レーダーチャート図

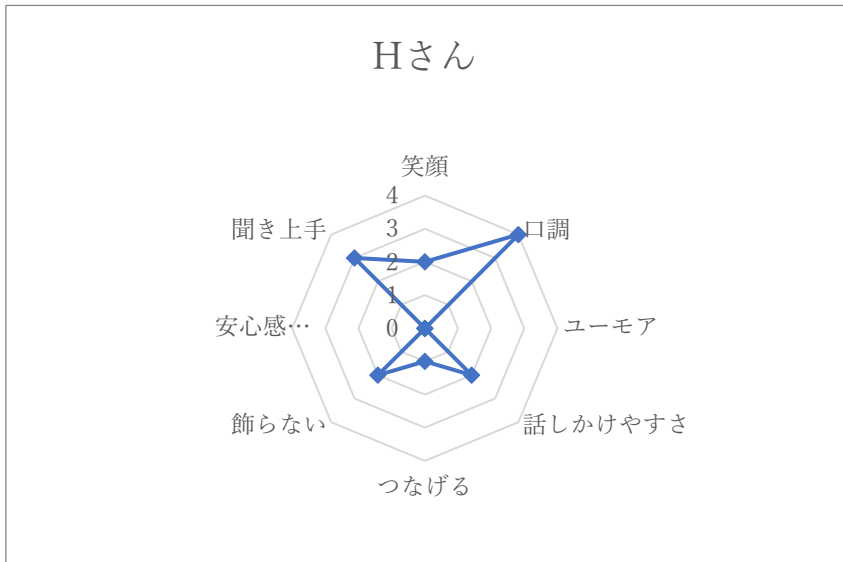


図 4-48 Hさんのママ特性レーダーチャート図



図 4-49 Uさんのママ特性レーダーチャート図

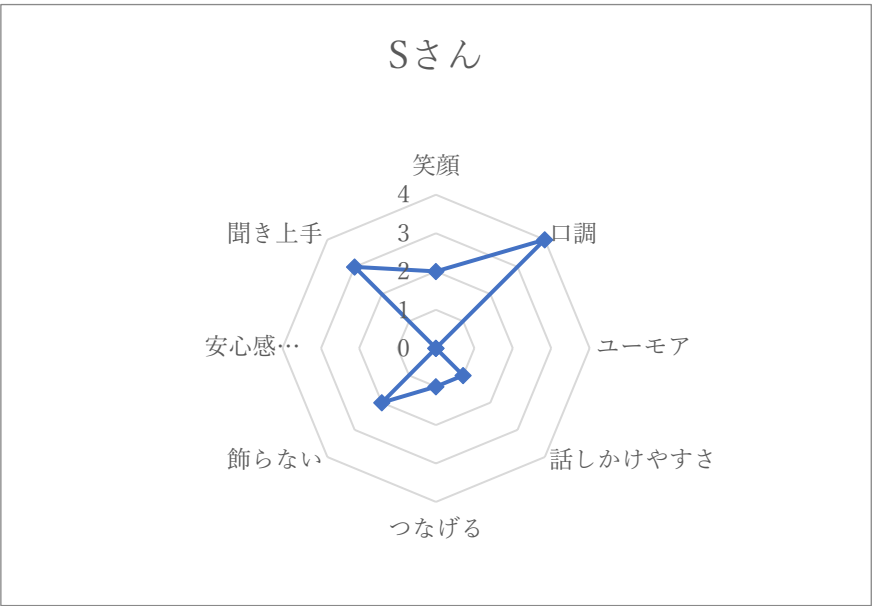


図 4-50 Sさんのママ特性レーダーチャート図

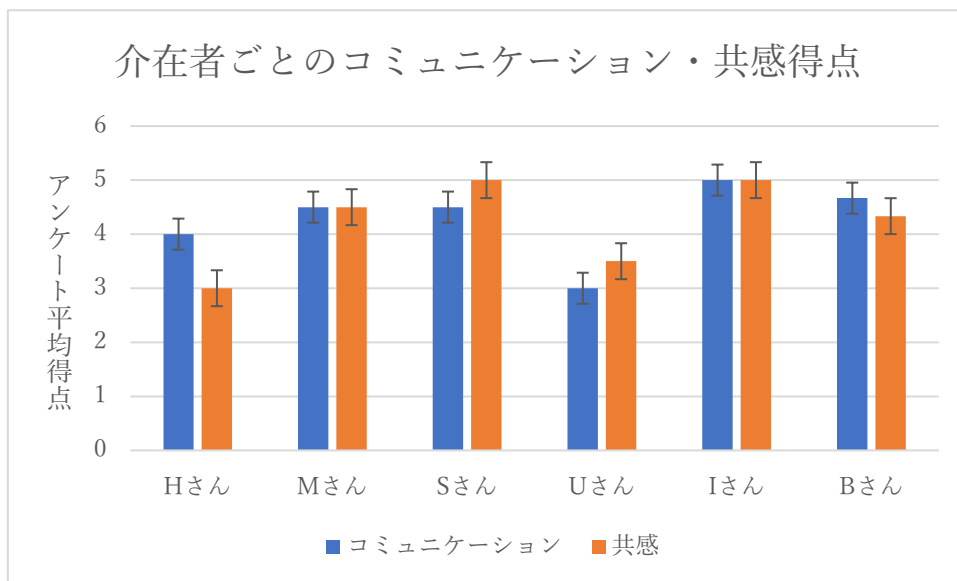


図 4-51 介入者別 被介入者のコミュニケーション・共感平均得点

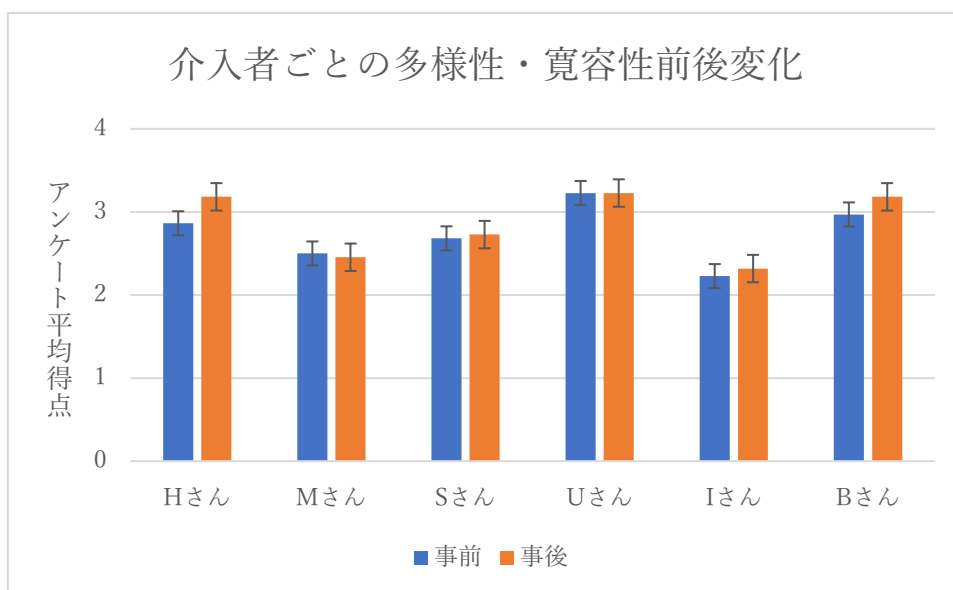


図 4-52 介入者別 被介入者の多様性・寛容性実験前後変化

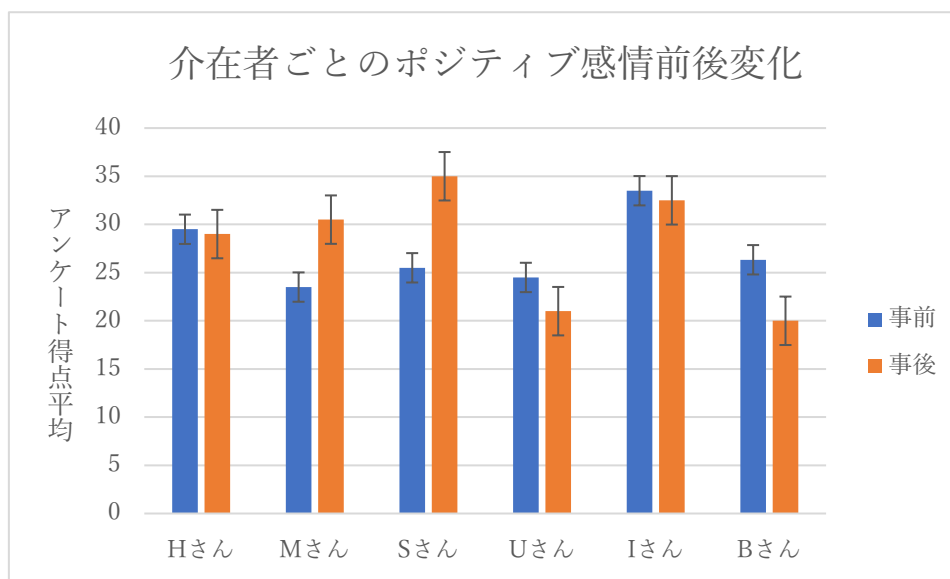


図 4-53 介在者別 ポジティブ感情実験前後変化

表 4-19 Sさんのポジティブ感情の t 検定結果

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール

	ポジティブ感情	ポジティブ感情
Sさん	情	情
平均	25.5	35
分散	4.5	18
観測数	2	2
ピアソン相関	1	
仮説平均との		
差異	0	
自由度	1	
t	-6.33333	
P(T<=t) 片側	0.049848	
t 境界値 片側	6.313752	
P(T<=t) 両側	0.099696	
t 境界値 両側	12.7062	

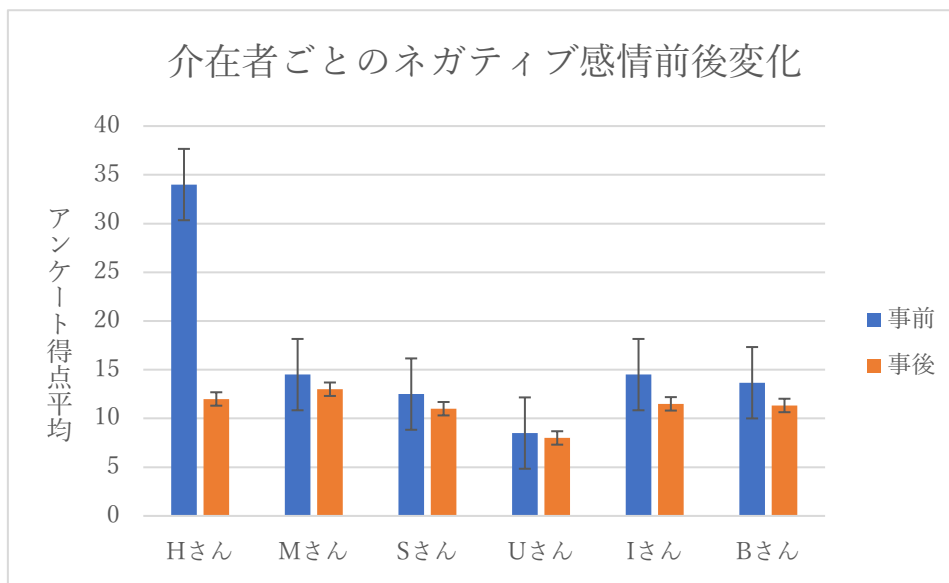


図 4-54 介入者別 ネガティブ感情の実験前後変化

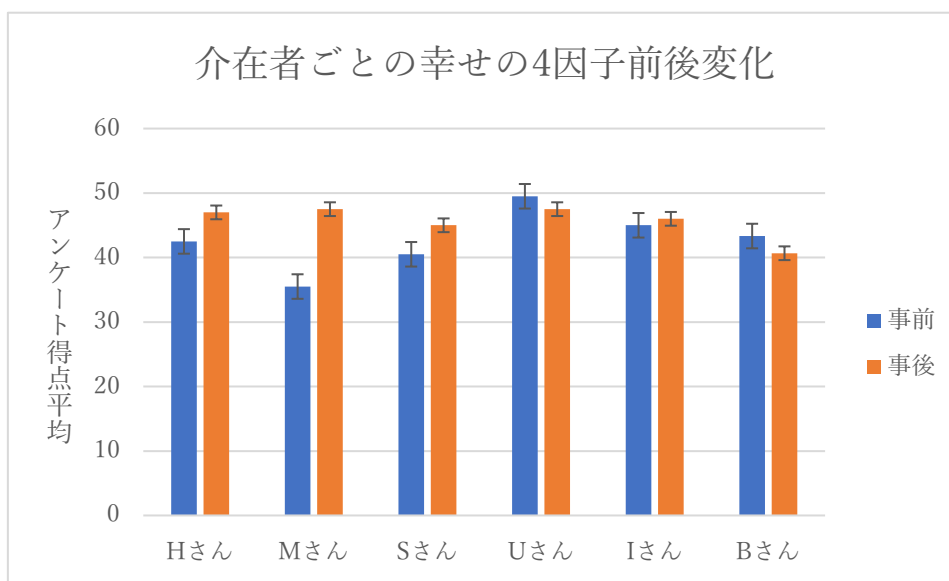


図 4-55 介入者別 幸せの4因子実験前後変化

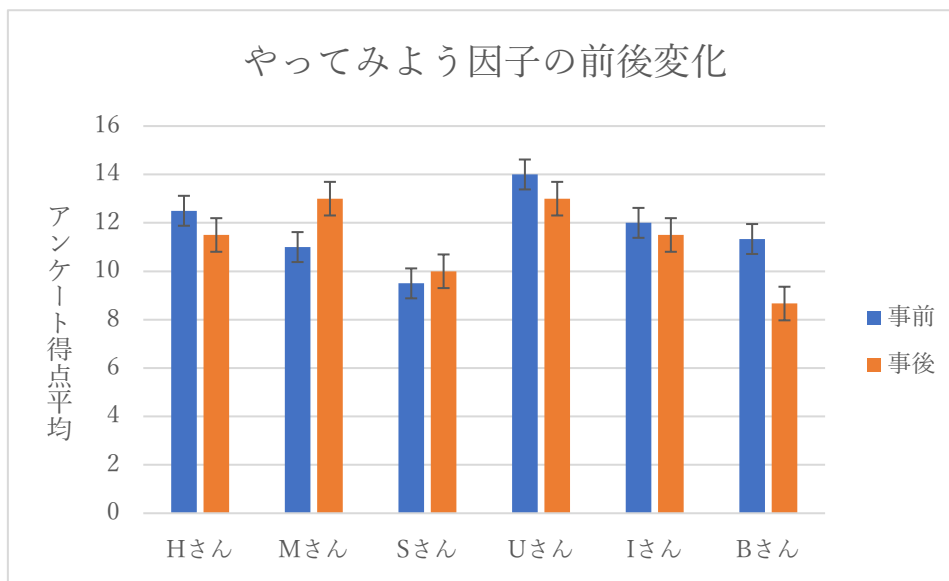


図 4-56 介在者別 やってみよう因子の実験前後変化

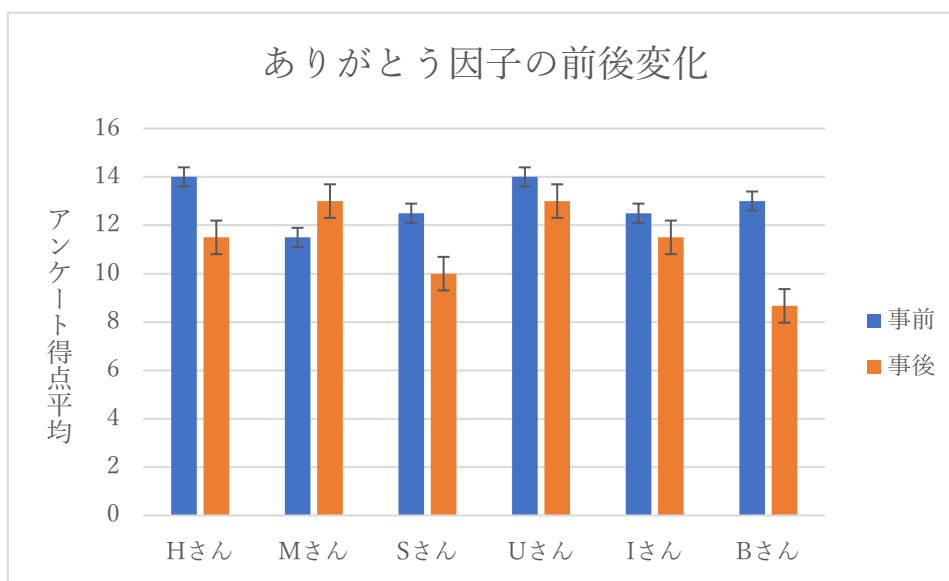


図 4-57 介在者別 ありがとう因子の実験前後変化

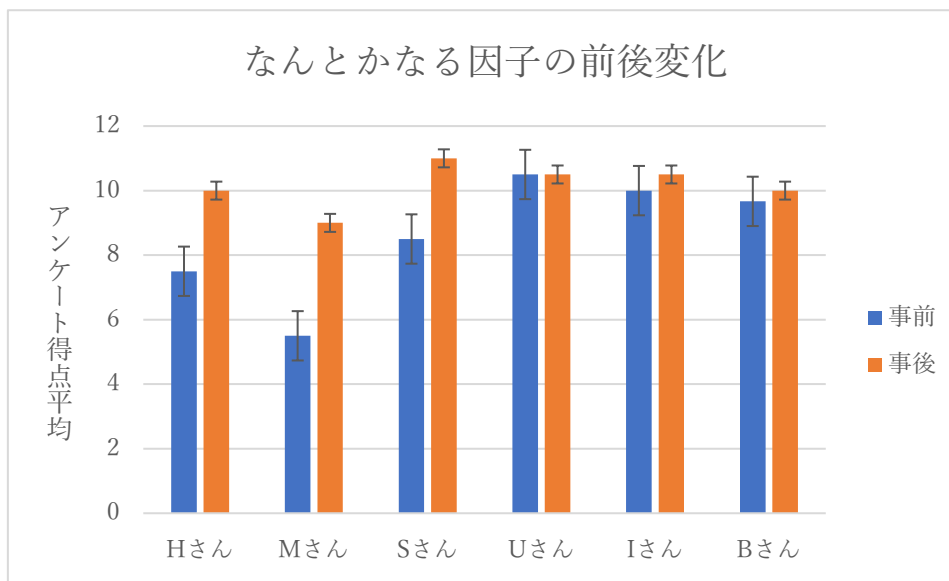


図 4-58 介在者別なんとかなる因子の前後変化

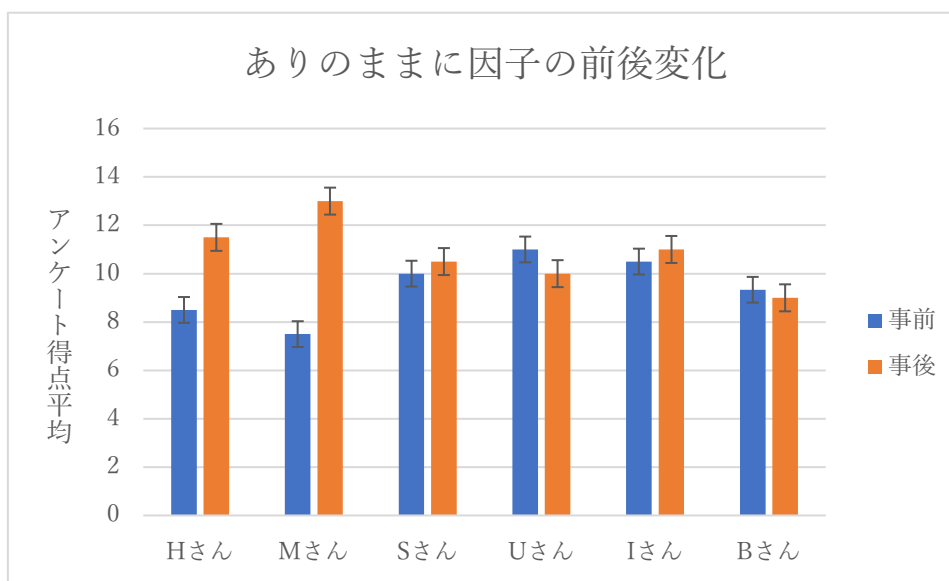


図 4-59 介在者別 ありのままに因子の前後変化

インタビュー結果からは、介在者ごとに話す話題が異なっていたことが分かり、話題の違いからママ特性の得点や多様性・寛容性の得点に差が出たことも考えられるが、どのグループでも実験後には非常に楽しかった、有意義であったという声があり交流があることで心理的にプラスに働く面が大きいことが示唆された。また、本実験における介在者は男性4名、女性2名であったが、男女差は見られなかったため、スナックのママ的介在者に性別は関係しないと言える。今後の課題としては、ママ特性の得点を複数回答のチェック項目としたため、複数回答のチェック数に被介在者間でばらつきがでたことから、アンケート設計を

再度見直す必要がある。また、本実験において介在者ごとの被介在者が 2 名と少なかったことから、介在者と被介在者の変化の関係性については、実験回数を増やすことで介在者のデータと被介在者のデータを多く収集したうえで分析する必要がある。また、実際にアンケートを取り分析したところ、ママ特性の行動が MECE ではないことが判明し、MECE 感のあるよう 5 つに分類したものが以下の表 4-20 に示す。しかし、この分類だとママ特性としては特徴が分かりづらく、スナックのママ的介在者の介在者像が想像しづらくなっている。

また、ママ特性の「安心感」は介在者が意識するものではなく、既に存在している介在者と被介在者間の関係性の結果であり、安心感を示す行動も「フラットに接する」ことと、「寛容に接する」ことに細分類できるのではないかと考えられる。これらを踏まえ、ママ特性の再分類も今後検討していくべき点である。

表 4-20 ママ特性の再分類案

見た目	微笑んでいる
	目が笑っている
	口を開けて笑う
	声を出して笑う
	不意の笑顔がある
	清潔感がある
話し方	ため口を混ぜてしゃべる
	親しみを感じる口調
	丁寧すぎない口調
	会話にツッコミを入れる
	ジョークを会話に挟む
	たくさん話題を提供してくれる
	自分の経験も話す
	全員に話を振る
	聞いたことから推測・理解して自分の言葉で返す
身体的	身振り手振りが大きい

動作	ちょっかいをかける
態度	共通点を見つけてつなげてくれる
	無理につなげようとはしない
	誰にも媚びない
	気取らない態度
	自然体でいる
	忖度しない
	上下関係つけない
	自分のために叱ってくれる
	自分の価値観を押し付けない
	平等に接する
	何を言っても認めてくれる
聞き方	相槌などで共感を示す
	新たな情報を得るための質問をする
	話しかけられることに嫌悪感を示さない
	どんな話も興味をもって聞く

4.4.3 介在者への影響

これまで実験における被介在者に対する影響について述べてきたが、ここで介在者に対する影響について述べる。介在者の幸福度を前後比較した結果、ポジティブ感情はわずかながら向上し、ネガティブ感情が低下したことから感情的幸福は高まっていることが示された。幸せの4因子についても、わずかながら向上がみられた。ネガティブ感情の低下に関しては、有意傾向が見られた ($t(5)=2.26, p<.10$)。これらの結果より、被介在者だけでなく介在者自身の幸福度を高めることにも寄与していることが分かった。介在者が知っている人同士（被介在者）の間に介在することに対して、実験前には不安があっても、実際に交流することによって自分の知っている人同士がつながり新たな関係が構築された喜びや、話題がひろがる楽しさから、楽しんでもらえなかったらどうしようといった不安や恐れなどの

ネガティブ感情が軽減されたのではないかと考えられる。

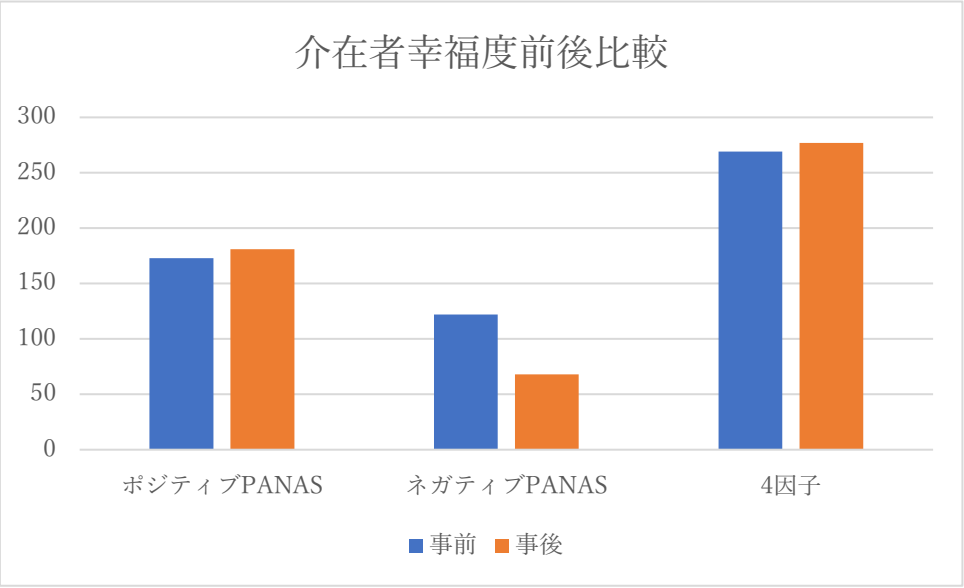


図 4-60 介在者自身の幸福度実験前後変化

表 4-21 ポジティブ感情の t 検定結果

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール

	ポジティブ感情	ポジティブ感情
平均	28.83333	30.16667
分散	43.36667	89.76667
観測数	6	6
ピアソン相関	-0.72391	
仮説平均との		
差異	0	
自由度	5	
t	-0.21848	
P(T<=t) 片側	0.417847	
t 境界値 片側	2.015048	
P(T<=t) 両側	0.835694	
t 境界値 両側	2.570582	

表 4-22 ネガティブ感情の t 検定結果

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール

	ネガティブ感情	ネガティブ感情
平均	20.33333	11.33333
分散	65.46667	28.26667
観測数	6	6
ピアソン相関	-0.0124	
仮説平均との		
差異	0	
自由度	5	
t	2.264196	
P(T<=t) 片側	0.036484	
t 境界値 片側	2.015048	
P(T<=t) 両側	0.072967	
t 境界値 両側	2.570582	

表 4-23 幸せの 4 因子の t 検定結果

t-検定: 一対の標本による平均の検定ツール

	4 因子	4 因子
平均	44.83333	46.16667
分散	19.76667	42.56667
観測数	6	6
ピアソン相関	0.056308	
仮説平均との		
差異	0	
自由度	5	
t	-0.42496	
P(T<=t) 片側	0.344268	

t 境界値 片側	2.015048
P(T≤t) 両側	0.688537
t 境界値 両側	2.570582

第5章 結語

5.1 結論

本研究では日本人学生と留学生の交流の場を例として、交流の場に存在する介在者（スナックのママ的介在者）の特徴（ママ特性）を提案した。さらに、介在者の特徴が被介在者間の共感やコミュニケーションに寄与し、共感やコミュニケーションが向上することで被介在者の多様性・寛容性の向上につながり、多様性・寛容性の向上が被介在者の幸福度に寄与することが明らかになった。また、交流の場を設けることで被介在者だけでなく、介在者自身の幸福度の向上にもつながっていることが明らかとなり、交流の場があることで人々の幸福度の向上に寄与していることが示された。このことは、地域コミュニティなど価値観の異なる者が交流する場における介在者の存在意義と介在者に必要な要素が分かりやすくなったことで介在者像の解像度をあげることに資すると考える。さらにその要素が多様性・寛容性や幸福度の向上に寄与することが確認されたことで、地域コミュニティ内における介在者が地域の不寛容さや排他性を軽減することで地域コミュニティ全体の幸福度があがると示すことができたと考える。

5.2 今後の展望

本研究の対象は日本における日本人学生と留学生間の交流であったが、日本人同士の交流でも、地域コミュニティを意識し地域間での若い世代と高齢者層の交流においても同様の効果が示されるのかを検証する必要がある。また、日本人のみを対象とせず、日本の学校内の留学生間の交流や、諸外国における地域間交流など国際的にも適用できるか検証を行うなど、様々な場面を想定して研究を続けていく余地がある。また、今回は被験者数が少なく定性的な評価が中心となったが、今後規模を拡大して定量的に検証することや、暫定的なママ特性の分類をママ特性の再分類の検討や因子分析などにつなげていきたい。さらに本研究では、地域の不寛容さの軽減を目的の一つとし多様性・寛容性の向上から幸福度の向上についての関係を検証したが、地域における孤独の問題解消にも寄与し、幸福度の向上に

つながる可能性も今後検証していく必要性がある。

参考文献

- [1] 厚生労働省, ダイバーシティ & インクルージョンの時代に治療と仕事の両立で自分らしく働く, 2022 年 [広報誌「厚生労働」2022 年 9 月号 特集 2 | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](#) (最終閲覧日 2024/1/23)
- [2] 内閣府, 経済財政運営と改革の基本方針 2021, [2021_basicpolicies_ja.pdf \(cao.go.jp\)](#) 2021 年 6 月 18 日 (最終閲覧日 2024/1/23)
- [3] 経済産業省, ダイバーシティ経営の推進, 最終更新日 2023/12/26, [ダイバーシティ経営の推進 \(METI/経済産業省\)](#), (最終閲覧日 2024/1/23)
- [4] 日本規格協会, ISO26000「社会的責任に関する手引」, 2010 年 <https://kikakurui.com/z2/Z26000-2012-01.html>
- [5] 谷口真美, 組織におけるダイバーシティ・マネジメント, 特集 雇用平等とダイバーシティ, 日本労働研究雑誌, 50(5), pp69-84, 2008 年
- [6] 馬越恵美子, ダイバーシティ・マネジメントと異文化経営, グローバル人材を育てるマインドウェアの世紀, 新評論, 2011 年
- [7] 津々木晶子他, 多様性適応力評価尺度の開発と適用の試み, 日本ブラインドサッカー協会のワークショップを対象として, スポーツ産業学研究, Vol. 25, No.2, pp277-291, 2015 年
- [8] NHK, 地域づくり情報局 インタビュー・地域づくりへの提言 「ひとりひとりが主役のダイバーシティー(多様性)な地域へ⑥」【社会学者・萩原なつ子さん】, 2016/8/12 (最終閲覧日 2024/1/23)
- [9] 岡本雅享「島国観再考ー内なる多文化社会論構築のために」, 『福岡県立大学社会学部紀要』 2010 年, 18 (2), 75-98.
- [10] 国広陽子, 「テレビ CM にみる日本人の自意識: 単一民族社会の神話と『外国人』カテゴリーをめぐって」, 『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』, 2004 年, 54 (3), 27-42.
- [11] 相川真穂, 日本は「単一民族社会」? ー多文化社会形成に向けて, 問われる日本社会の「自己像」, 2021/12/14 <https://web-opinions.jp/posts/detail/481> (最終閲覧日 2024/1/19)
- [12] 法務省, 外国人の人権を尊重しましょう, https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00101.html (最終閲覧日 2024/1/19)
- [13] Allport, G.W., The Nature of Prejudice, Mass: Addison-Wesley., 1954 年 (=1961, 原谷達夫・野村昭役『偏見の心理 上・下』培風館.)
- [14] Brown, Rupert., Prejudice: Its Social Psychology, Blackwell. ,, 1995 年 (=1999, 橋口捷久・黒川正流『偏見の社会心理』北大路書房.)
- [15] 田辺俊介, 「外国人への排他性と接触経験」『社会学論考』第 22 号 pp1-15, 2001 年
- [16] 額賀美紗子, 「排外意識と教育の効果ー外国人受け入れに対する日本人の態度の規定要因ー」, JGSS 研

究発表会発表原稿, 2005 年

- [17] 一般財団法人日本総合研究所, 全 47 都道府県幸福度ランキング 2022 年版 (最終閲覧日 2024/2/13)
- [18] 一般社団法人スマートシティ・インスティテュートジャパン, 令和 5 年度全国 Well-Being 調査 (最終閲覧日 2024/2/13)
- [19] 安達理恵, 「日本人の異文化受容態度に見られる傾向: 一地方都市での年代別・国別態度調査より」, 名古屋外国語大学外国語学部紀要, 2008 年
- [20] 橋口理文, 吉永奈央子, 地方創生のファクターX 47 都道府県の寛容と幸福, 人口移動に関する調査, LIFULL 総研, 2021 年, pp68-87
- [21] 国土交通省, 国土交通白書, 第 1 部第 2 節, 2006 年
- [22] 総務省, 地域コミュニティの現状及び本研究会について, 2021 年 7 月
- [23] 石田光規, 地域のつながりの現状と課題, 生活協同組合研究, 2022 年
- [24] 厚生労働省, 令和 5 年度版厚生労働白書—つながり・支え合いのある地域共生社会—, 第 1 部, 2023 年
- [25] 計良真生他, 「居場所」と「居心地」の差異に関する検討, 生活科学研究, 2022 年
- [26] 瑞慶覧他, 子どもの居場所に関する研究—居場所と自己受容感との関係—, 教育実践総合センター紀要, 8, pp32-42, 2009 年
- [27] You FUJIYOSHIDA, 上田潤の地域福祉とふじよしだ 20「ソーシャルハウス宝島」, 2022/3/17 [上田潤の地域福祉とふじよしだ 20「ソーシャルハウス宝島」 - you FUJIYOSHIDA あなたと富士吉田を結う \(you-fujiyoshida.jp\)](https://you-fujiyoshida.jp/) (最終閲覧日 2024/1/25)
- [28] 坂倉杏介, 保井俊之, 白坂成功, 前野隆司, 「共同行為における自己実現の段階モデル」による「地域の居場所」の来場者の行動分析: 東京都港区「芝の家」を事例に, 地域活性研究, Vol.4, pp23-30, 2013 年 3 月
- [29] 田中康裕他, コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察—主(あるじ)の発言の分析を通して—, 日本建築学会計画系論文集, 第 614 号, pp113-120, 2007 年
- [30] 佐々木英和, ファシリテーター概念に関する理論的考察—ファシリテーション実践の体系的把握につなげるための覚書—, 宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第 34 号, 2011 年 7 月
- [31] 曾我健, 錦澤滋雄, まちづくりワークショップにおけるファシリテーターの介入に関する研究—大阪市天王寺区「未来わがまち会議」を対象として—, 第 22 回環境情報科学学術研究論文発表会, Vol.22, pp451-456, 2008 年
- [32] 武田正則, 参画型協働学習におけるファシリテーションに関する理論的背景, 教育情報研究, 第 27 号 第 4 号, pp17-28, 2012 年
- [33] 竹丸草子, コーディネーターの視点から見る「場」の研究ノート, 長岡造形大学研究紀要, 第 18 号, 2020 年
- [34] 平井竜一, 自治体におけるコーディネーターの必要性和その役割: 逗子市の事例から, 東京外国語大学

- 多言語・多文化教育研究センター，17 巻，pp46-56，2013 年
- [35] 武川智子，コーディネーターの仕事とスキルについて，生活支援工学会誌，16 巻，pp11-12，2004 年
- [36] 山崎亮，「コミュニティデザインの時代 自分たちで「まち」をつくる」，中公新書，2012 年
- [37] 平本毅，コミュニティのデザイン，デザイン学論考，Vol.4，pp16-22，015 年
- [38] 田中さやか他，大学における授業コンサルタントのスキルに関する考察，日本教育工学会論文誌，34 巻 Suppl.号，pp169-172，2010 年
- [39] LEWIS,K.G, Chapter6 : The Process of Individual Consultation. A Guide to Faculty Development: Practical advice, examples and resources. Anker Publishing Company , Bolton, MA , U.S. A., pp . 59－73，2002 年
- [40] フードリンクニュース，スナックの今昔から考察する未来のスナックの可能性，2015/9/28，[フードリンクレポート | FDN フードリンクニュース \(foodrink.co.jp\)](http://foodrink.co.jp)(最終閲覧日 2024/2/13)
- [41] 有馬雄祐，地方創生のための寛容性と幸福の分析，2021 年
- [42] 高尾真紀子，保井俊之，山崎清，前野隆司，地域政策と幸福度の因果関係モデルの構築—地域の政策評価への幸福度指標の活用可能性—，地域活性研究，2018 年
- [43] 公益社団法人日本マーケティング協会，スナックが今，注目される理由，2019/6/10 [公益社団法人日本マーケティング協会 - スナックが今，注目される理由 \(jma2-jp.org\)](http://jma2-jp.org)，(最終閲覧日 2024/1/25)
- [44] 中田梓音，スナックにおける言語コミュニケーション研究—対人関係を調整する接客言語ストラテジー—，総研大，2016 年
- [45] 中田梓音，スナックの言語学：距離感の調節，三元社，2019 年
- [46] 日本経済新聞，「男性性」と「女性性」，2022/3/25，
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQQUC14B530U2A310C2000000/>(最終閲覧日 2024/2/13)
- [47] 熊田陽子，わたしを晒す，わたしを隠す：都市の性風俗産業に従事する「おんなのこ」たちの「自己」の在り方，岡井崇之編「アーバンカルチャーズ：誘惑する都市文化，記憶する都市文化」，晃洋書房，pp104-116
- [48] 前地杏波，スナックのエスノグラフィー—「水商売」への偏見を回避するママ—，奈良県立大学研究報告，2020 年
- [49] 藤本学，大坊郁夫，コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み，日本パーソナリティ心理学会，第 15 巻，第 3 号，pp347-361，2007 年
- [50] 菅原徹他，笑顔の多様性と印象の関係性分析，日本感性工学会研究論文集，Vol.7 No.2，pp401-407，2007 年
- [51] 益子行弘，表情の変化が印象と笑顔の認知に与える影響，日本心理学会第 70 回大会，2006 年
- [52] 上野行良，ユーモア減少に関する諸研究ユーモアの分類化について，社会心理学研究，7，pp112-120
- [53] 上野行良，ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係，心理学研究，64，pp247-254
- [54] 高岡しの，対人ストレス場面におけるユーモア刺激の算出，日本心理学会第 75 回大会，p123，2011 年
- [55] 高岡しの，対人ストレス対処のために算出されたユーモアの分類と出現頻度，笑い学研究，22 巻，

pp63-74, 2015 年

- [56] 佐藤翔平, 話しやすい音声対話システム実現のための対人対話における心理特性の関連性調査, 人工知能学会研究会資料, 2016 年
- [57] 中田梓音, スナックのママと顧客: 脱性化という戦略を巡って, 日本文化人類学会第 46 回研究大会, 2012 年
- [58] 原田杏子, 人はどのように他者の悩みをきくのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成—, 教育心理学研究, 51, pp54-64, 2003 年
- [59] 飯田順子他, 多様性と困難への寛容度尺度の日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討, 日本教育心理学会第 62 回総会発表論文集, 2020 年, p264
- [60] 前野隆司, 幸せのメカニズム 実践・幸福学入門, 講談社現代新書, 2013 年

謝辞

本研究と論文執筆を行うにあたって本当に多くの方々からご支援、ご協力を承りました。

慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科教授 前野先生には、主査として本論文の執筆に至るまで多大なるご指導とご鞭撻をいただき、心より感謝申し上げます。副査を担当していただいた当麻教授も、ご多忙中にも関わらず研究についての相談の時間をいただき、論文も詳細にご指摘いただいたことに心より感謝申し上げます。

また、実験に参加いただいた富山大学の学生の皆様、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科の皆様、そしてインタビューにご協力いただいたソーシャルハウス宝島の上田様、北田様には、拙い実験の説明やインタビューであったにも関わらず、快く実験とインタビューを受けてくださり、心より感謝申し上げます。また、ヒューマンラボでは、ゼミや合宿にて自分の興味がある研究テーマにたどり着くことができました。ヒューマンラボの皆様にはブレインストーミングにもご協力いただきましたし、実験にも参加していただくなど、本当に数多くのご協力を承りまして、皆様にお力添えいただいたおかげでここまで研究を進めることができました。特に今関さん、井上さんには本研究における数多くのご意見やアドバイスをいただきまして、御二人なしには本研究は成し遂げられませんでした。心より感謝申し上げます。同期の皆様もお互いに進捗報告しながら一緒に切磋琢磨しあうことで一緒に修了しようと思うことができ、辛いときでも研究を進めていく原動力となりました。皆様に心より感謝いたします。

最後になりましたが、出願当時勤めていた会社を退職し大学院に行く決断を快諾し、その後の大学院生活を支えてくれた両親に多大なる感謝申し上げます。本当にありがとうございました。